

多々良幽衣の妹(自称)は平穩に過ごしたい

ストスト

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

これは、《不転》多々良幽衣の妹のお話。

## 目次

プロローグ	1
生まれてから「妹」になるまで	5
破軍への潜入	10
多々良白雪の休日	17
ヘッドショット	22
多々良幽衣は妹から離れたい	29
選抜戦	37
接触	44
《落第騎士》との手合せ	50
対話	57
取材	61
招集：その1	66
招集：その2	71
叱咤	77
最後の選抜戦	82
古巣からの勧誘	89
姉様と!!?	94
教師役	99
計画前夜	105
計画決行	109
大阪にて	114
《KORT》始動	120
とある少女の追憶	128
高らかに讃頌せよ	133

悲観せよ、己が運命を	140
車内にて	146
穿て銀雪	150
終焉	155
《比翼》と魔術師	161
感謝	167
《KORT》の人間	173
Let's party!!? その1	178
Let's party!!? その2	183
対ステラ戦、開始	187
時間稼ぎ	193
フェイカーフアクターファイター	199
背徳の刃	204
凶手の真髄	210
最期の一撃	215
番外編：凶手達の聖夜	224
カウントダウン	231
治せない病気	236
目覚めと告白	241
猛毒の支配	246
姉妹と《KORT》のなんやかんや	251
邂逅、最弱の騎士と神代の魔術師	255
埒外の正体	261
七星を穢す者達	269
動乱、そして対峙	275

凶手のプライド

護る者、喰らう者

道化師

282

288

294

## プロローグ

「—————ブレイザー伐刀者。」

それは魔力を用いて異能の力を発揮する特異存在だ。

古き時代には「魔法使い」、「魔女」と呼ばれて

きた者たちは、人智を超えた力を持っていた。

彼らは自らの魂を武装……固有デバイス霊装として

顕現でき、その力は武道や兵器を軽く凌駕出来た。

それ故に「—————」、現代では警察や軍隊、

果ては戦争ですらも伐刀者なしでは成り立たない

状態であった。

だが、世の常として大きな力には相応の責任が

伴われる。

その一つとして、《魔導騎士制度》がある。

それは、国際的な機関の認可を受けたた伐刀者の

専門学校を卒業した者にのみ「魔導騎士」の

社会的な立場を与え、固有霊装の使用も認可する、

というものだ。

その専門学校の一つ、《破軍学園》に「彼女」の姿はあった。

その姿は、極めて面妖というか……かなり目立つ格好であった。

まず、全身にありとあらゆる防寒具を纏っている。

イヤーマフにネックマフラー、厚手の手袋、

ダッフルコートにウォーマーキャップと、

最早それのおかげでその姿はまるで羊のようにもこもこした感じになっていた。ウオーマーキャップから出ているその長髪はシルクのように白く、さらさらとしていて、また防寒具から僅かに伺える蒼色の瞳、真つ白な肌は北国……ロシアとかフィンランド、スウェーデンとか……の出身を想起させる。もうすぐ7月に入るというのに、防寒具を、それも全身に纏っていて、彼女は汗の珠一つその顔にかいていなかった。

しかし、だからといって。

(……あづい……)

汗をかいていない。暑くないというわけではなかった。

確かに顔には汗をかいている様子は見えないが、防寒具を着ている体の方はというと下着が肌に引付くレベルで蒸れていた。

(喉乾いた。体蒸れる。日本の夏辛い)

顔では全くそんな様子を見せず、心の中で不平不満を呟き続ける。

だったらその防寒具脱げよという話になってくるのだが、彼女の中にはそのような選択肢はなかった。

彼女の名は、多々良白雪。

破軍学園ではDランクの魔導騎士であり、また貪狼学園の《不転》多々良幽衣の(自称)妹でもあり、そして。

《暁学園》8人目の生徒……つまり、《解放軍》リベリオンの凶手である。

心の中で日本の夏に悪態をつきながら白雪は自らのクラス、一年一組の扉を開けた。

「おはよー」

「白雪さんおはようございます」

既に先に来ていた数人の生徒が彼女に挨拶をよこす。

「……ん」

それを白雪は分かるか分からないかというぐらいの小さな返事と、軽い首肯をした。

それから、自分の席である1番右側の最も後ろの席へと座る。

教室も暑いことに変わりないが、教師が来ればエアコンがつけられるのでそのうち楽になる。

(選抜戦も、残り数回。《暁学園》からのオーダーはなんとかいけそうかな)

机に突っ伏しながら彼女は自分のスマートフォン画面を見た。

画面には次の選抜戦の相手の名が記載されている。相手は3年のDランク、弓使い。

(今回も《落第騎士》ワーストワンと当たらなくて良かった)

そう思い、僅かに白雪は安堵の溜息をついた。

「おはよう、白雪さん」



背後からの挨拶に振り返ると、樽をすれば影というべきか、そこには件の《落第騎士》こと黒鉄一騎の姿があった。

「ん……おはよ……」

気怠げに一騎に挨拶を返し、再びスマホの画面へと顔を向ける。

今度は選抜戦のことではなく、最近の習慣として彼女にとつてたった一人の“姉”である多々良幽衣へメールを送るためだ。

(姉さまがいなければ、ボクは人形のままだった)

メールの内容を打ちこみながら白雪は昔のことを思い出していた。

(本当に、感謝してもしきれないくらいに、ボクは姉さまに人形から人間にしてもらった)

それ故に、白雪は幽衣に対して異常なまでの愛情を注いでいるのだが、白雪は自分の愛が“重過ぎる”ことには全く気付いていない。

(ああ、姉さま……)

白雪は、自らの姉の元気を祈りながら、まさかそれが元気を奪っているとも知らず

総文字数1万字越えの文面を送信するのだった。

生まれてから “妹” になるまで

多々良白雪は、赤ん坊の時から既に《解放軍》の  
凶手として育てられていた。

何故赤ん坊の時には既に《解放軍》の中にいたのかは  
白雪は知らなかったし、知る気もなかった。

《解放軍》の誰かが捨てられていた自分から魔力を  
感じて拾ったのか、はたまた《解放軍》の幹部の  
隠し子か。

別にどうでも良かったと今でも白雪はそう思っている。

赤ん坊の頃から凶手としての知識、体術と

ありとあらゆることを身体に、頭に、

血肉に刻みつけられた。

やがて12歳で一人前の凶手となった

白雪……その時はまだそのような名前はなく、  
《スノーホワイト》という名で呼ばれていた……

彼女には、ありとあらゆる感情が欠如していた。

喜怒哀楽を表現することができなかったのだ。

幼少期は人間の性格や感情、考え方などの

“根底”を創る時期である。

そんな時期に、彼女は暗殺の技術を拷問のように  
身体に叩きこまれてきた。

その結果、彼女は「感情は暗殺に不必要」として  
感情を“捨てた”。……捨てざるを得なかった。

そうして凶手となった白雪はロシアで暗殺を  
行うようになった。

暗殺を続ける内に、彼女の性格は非常に歪んだ。

まず、損得勘定で動くようになった。

仲間が傷だらけになって捕まりそうになると、

捕まえようとする敵ではなくその仲間の方を

殺害した。

捕まれば情報を喋る可能性がある上に、その仲間を助けるためにより多くの仲間が危険な目にあうのを防ぐためである。また、いつも部屋に閉じこもり、タオルケットを身近な所に置いておき、常に被っているようになり始めた。更に常に部屋に閉じこもる内に他人との会話が少なくなり、相手とのコミュニケーションの取り方が分からない状態に陥った。

段々と異常性が増してゆく《スノーホワイト》に対して《解放軍》の者たちは恐怖した。やがて、《スノーホワイト》という通り名ではなく、《白の死神》の通り名で呼ばれ始めた。理由としては、敵味方問わず“死”を振りまくこと、そして彼女の霊装がかつてとある雪国で起きた戦争にて多大なる貢献をした英雄の霊装と同じタイプの霊装であったこと、その英雄が敵国に《白い死神》の名で呼ばれたことが主な理由だ。

だが、彼女の運命を変える出会いが14歳の頃、彼女に訪れた。きっかけはとある要人の暗殺依頼だった。依頼内容を確認した《解放軍》の幹部は、《白の死神》の他にもう一人、凶手を指名し2人で依頼を遂行するように言ったのだ。暗殺決行の前日、彼女はそのもう一人の凶手と初めて顔を合わせた。そして、互いに驚愕した。無理もないだろう。

……お互いの顔が瓜二つだったからだ。  
驚くに決まっているだろう。

もう一人の凶手は彼女に対して顔が瓜二つである  
ことが気に入らなかつたらしく、ありとあらゆる  
罵詈雑言で彼女を責めた。

無論、彼女の方も黙っているわけでもなく、  
無言でその凶手へと霊装を顕現して襲いかかり、

あわや《解放軍》の支部が一つ消えかける  
大<sup>殺</sup>げんか<sup>し</sup>となつたのである。

結局、二人の勝敗はつかず、お互いに  
険悪な状態でその日は終わった。

それこそが、《不転》と呼ばれる少女……  
多々良幽衣とのファーストコンタクトだった。

暗殺決行の日。

彼女たちは首尾よく標的を暗殺した。

……《白い死神》が腹を撃たれたことを除いて。  
彼女は《不転》に対し自分を殺すように言った。  
常々自分がそうしてきたように、相手に  
そうするように強要した。  
だが、それを聞いた《不転》は、《白い死神》に  
こう返した。

「バカかテメエは。まだアタイとどっちが上か  
決めてねえのに殺せるかってんだよ」

そう言つて、最後まで殺すようなことはしなかつた。  
逃げる途中、《白い死神》は相手の行動に疑念を

抱いた。

何故自分を殺さない？その方が身軽になつて捕まる可能性は低くなるのに？

その答えはいつまでたつても見つからなかった。

《解放軍》に戻り、腹の怪我が治つても、未だに。

やがて、再び《不転》と共に任務を遂行することになり、彼女に再開した時、そのことを問うた。

「あ？アタイはな、おまえを助けたかつたから

助けたんだよ。それ以外の何物でもねえ」

その答えに衝撃を受けた。

そんな考えがあるのかと。このような人間がいるのだ、と。

《白い死神》は《不転》に、否“人”に対して初めて興味を持った。

最初は彼女の考えを理解しようとその後をついて回つた。

だが、その目的が彼女の考えではなく

「多々良幽衣そのもの」に切り替わっていることに気がついた。

自分と瓜二つの顔でありながら性格は真逆。

知りたいと、《白い死神》は……「多々良白雪」はそう願つた。

多々良幽衣を知りたい。彼女の全てを。

幽衣と触れ合つてゆく内に白雪には「感情」が芽生えた。

幼少期に出来なかつた「根底」の成長が

幽衣と触れ合つたことで再開したのである。

新しい考えと感情を得た白雪には

わかりきつていた。

自分は多々良幽衣には勝てない。

自分がないものを彼女は持っていたからだ。  
それを彼女は自分にも分け与えてくれた。  
これは一生かけても返せないほどの恩だ。  
ならば、彼女にずっとついて行こう。

《解放軍》などどうでもいい。

彼女さえいれば自分は満たされるのだから。

そうして、「多々良白雪」という少女が誕生した。  
多々良幽衣を姉として慕い愛し、だがその愛が  
重すぎて数年後に《暁学園》の一件で白雪と  
共に破軍へと送られそうになった際、

この世の終わりだと言わんばかりに

「白雪とは別にしてくれ、じゃないと殺される」と  
全力で抵抗するぐらいに姉に恐れられる妹が。

## 破軍への潜入

今日はいい天気だ。鳥は歌い、花は咲き誇る。  
こんな日には……姉さまと一緒にピクニックに  
行きたかったのに。

「ハア……」

ボクはそう思い、厚手のコートを羽織った。  
今日は《暁学園》とかいう所の注文に答えるため、  
潜入することになった破軍学園の始業式の日だ。  
それにしても、だ。

(姉さまと一緒にの学園に入学したかったな……)  
残念なことに、ボクの姉さま……多々良幽衣は  
この学園には入学しない。

直前に何かトラブルがあったらしく姉さまは  
北関東圏にある貪狼学園に通うことになって  
しまったのだ。

(元気でやってるかな……)

今度、姉さまの好物のボルシチでも作りに  
行きたい。というか毎日行きたいけど。  
一秒でも離れたくないけど。

「……よし」

ボクは姉さまとお揃いの格好をして、破軍学園へ  
向かうのだった。

……姉さまがいなくて寂しい……。

無事、始業式も終わり、クラス割りにしたがってボクは1年1組の教室に入った。入った途端、みんながボクを見た。奇異の目でだ。

『おい見ろよ、あいつスゲー防寒具着込んでる』

『うわ、ホントだ。暑くないの?』

『知らない。誰か聞けば?』

『というか、意外と顔可愛くない?』

みんな勝手なことを話しヒソヒソ話し合っている。ボクにとっては有象無象に等しいので無視して自分の席へと座る。

と、皆の声が止んだ。

一人の少年が入ってきたからだ。続いて

紅蓮の焰みたいな色をした髪をした少女も。

前者の少年は知らないし知る気もないが、

続いて入ってきた少女はボクも知っている。

ステラ・ヴァーミリオン。

Aランクの伐刀者ブレイザーであり、

ヨーロッパの小国ヴァーミリオン皇国の

第二王女。

ボクにとっては現段階であれば油断さえしなければ勝てる相手だ。

『おい、あれって……』

『《紅蓮の皇女》と《落第騎士》だ』ワーストワン

『能力が低すぎて留年したっていうFランク?』

……FランクだとかAランクだとか、この学園の生徒はランクでしか物事を考えられないらしい。

(……阿呆らしいなあ)

ランクなんてもの、くだらなくて本当に笑えてくる。霊装の能力よりボクにとって恐ろしいのは、



武術を極めている人間だ。

そっちの方が能力に頼っているバカよりよっぽど手強い。

(その点で言えば、《落第騎士》はここにいるバカどもよりずっと強い)

見れば分かる。彼はなんらかの武術の類を学んでいる。それもかなりの熟練者だ。

指についたタコ。身体についた健康的な筋肉。何年と研鑽を積んできたに違いない。

と、担任らしき女性が入ってきて、

ホームルームが始まった。

「はい、みんな座って座ってー。

ホームルーム始めるよー!!?」

なんとなく病弱そうな担任は、ノリノリで話を始めた。

(……あれ、絶対無理してるよな……)

案の定と言うべきかどうかは知らないが、

病弱な担任の話が吐血で締めくくられ、

件のFランクが「今日はもう帰っていいよ」と伝言を伝えてホームルームは終了した。

ボクとしては帰って寝たいが、Fランクの

少年がどのような性格か、少し観察することにした。

「あの、黒鉄センパイ、よかつたら私に剣の

稽古をつけてくれませんか？

私、強くなりたいんです!!?」

「あーずるい!!? 私の方が先なんだからー!!?」

「ちよっ、ちよっと落ち着いて!!? 話はゆっくり

聞くから!!?」

んー、性格としてはまあお人好し。

顔も中々。剣の稽古と言っているあたり

霊装は刀剣の類。

だけど姉さまの方が若干上……かな？

微妙なところだが。

この洞察力にはいつもお世話になっている。

と、ガラの悪そうな男子生徒が5人程黒鉄の

ところへと向かっていく。

「おいセンパイ。オレたちともお話しましょうや」

喧嘩を売る気らしい。どうやら自分たちと

相手の力量の差を分かっているようだ。

ボクはこの後の展開が簡単に読めた。

(バカだ、こいつら)

少年たちが一斉に襲いかかる。

まず最初の正面からの斬撃を黒鉄は受け流し、

転ばせた。

転んだ少年は背後にいた少年も巻き込んで

盛大に自滅する。

(自分の目の前にいるのが)

続いて頭目掛けて振るわれる鉄棍と斧を

軽く頭を下げて難なく回避。

ガアアアアンっという音と共に双方の攻撃は

かち合い、その衝撃はもろに両者の腕に伝わる。

「ぎゃあああああッ!!?」

それに耐えられず、腕を抑えて二人の少年が  
しやがみ込む。

(自分よりも格上だっただけのことを全く分かってない)  
最後に残った少年が銃の霊装を顕現して黒鉄を  
撃とうとした刹那、黒鉄が弾き上げた消しゴムが  
銃の撃鉄の間に挟まり魔弾を射出するのを防ぐ。  
そして無防備となった少年目掛け黒鉄は大きく  
踏み込み、

パアアアアアアン!!?

彼の目前で両手を打ち鳴らした。

猫だまし、単なる脅かしだ。

ただ、それでも効果は充分で、その少年は  
びびってへなへなと尻餅をついた。

お見事。相手が素人四人とはいえ傷付けずに  
無力化するのはかなり難しいことだ。

それを難なくやってのけたあたり黒鉄の  
実力の程が伺える。

ボクは黒鉄に対し、拍手で賞賛を送った。  
手袋をしてるのでくぐもった音が聞こえる。

それに続いて、教室の出入り口辺りからも  
拍手が聞こえた。

「流石ですね、黒鉄お兄様」

「珠雫ツ!!?」

そこにいたのは小さな少女……なんとなく  
ボクが親近感を感じる少女がいた。

親近感を感じるということは彼女も  
ボクと同じ類の人種だろう。

珠雫と彼の兄のやりとりを見ているうちに  
彼女は兄のことを愛していることがよく  
分かった。

うん、その気持ちにはボクも共感できる。  
性別は違えど同じ事だ。

兄を愛しても姉を愛してもそう変わりない。  
是非とも彼女の愛が成就してほしいものだ。

ああ、姉さまとボクの愛も成就してほしい……。  
と、珠雫とステラ・ヴァーミリオンが口論を  
開始した。

なんとなくだが相当ヤバイ気がするので、  
とつとと逃げることにし、教室を誰にも  
気づかれないようにそつと出た。

その後、ボクの嫌な予感は的中。

やはり喧嘩へと発展し、1年1組はその余波で  
崩壊したのだった。

その頃、貪狼学園内。

「うっ……また来てやがる……」

多々良幽衣は妹から送られてきた一万字越えの  
メールを見て呻いた。  
すぐに返信しなければ。

「やべえ、書くことがねえよ……」

だからといって返信を返さないのは御法度。  
なぜなら。

ピロリロリーン♪

ピロリロリーン♪ピロリロリーン♪

ピロリロリーン♪ピロリロリーン♪ピロリロリーン♪

ピロリロリーン♪ピロリロリーン♪

返さないと白雪から半永久的にメールが  
届いてくるからだ。

しかもその速さも尋常じゃない。

1分間に何十通と、人間の領域を超えた速さで  
愛する姉へと送るのだ。

『姉さま、返信がないなんてどうしたのですか?』

『今度、ボルシチとピロシキを作りにいけますね』

『……姉さま?』

『ああ、病気なのですね。だとしたらボクも

姉さまの元に向かわなくては』

「ツ~~~~~~~~!!?」

メールの内容を見た幽衣は、普段の傲慢な

態度は何処へやら、顔を真っ青に変えて

大慌てで返信を返した。

「頼むから、頼むから来ないでええ……!!?」

せつかく離れたのに意味がなくなっちゃうから  
来ないでくれええええ!!?」

貪狼学園に、悲痛な叫びが響き渡るのだった。

## 多々良白雪の休日

破軍学園の付近にあるショッピングモール。その入り口に多々良白雪は立っていた。

「ボルシチの材料売ってるかな……」

彼女は姉の元に向かうのに手ぶらでは失礼だと思いつ立ち、ボルシチを作ってあげるために付近で大量の食材を扱っているここに来たのだ。

「まあ、なかったらチョコとかでもいいか」

白雪の休日が、始まろうとしていた。

「セロリ、キャベツ、トマトにジャガイモ……」

豚肉、バターとあと……テールブルビートか」

カートを押しながら白雪は淡々と材料を

籠の中に入れていく。

側から見ると白雪の低めな身長のおかげで

子供が買物に来ているようにしか見えない。

そのためか、

「あら、あの子一人で買物？偉いわねえ」

「うちのマサトにも見習ってもらいたいわ」

などと言われる始末である。

(ボクは大人なんだけど)

心の中で訂正しながら白雪は買物

続行した。

容姿が子供みたいな故に、彼女は子供扱いされる  
ことが大の嫌いであった。

「……にしても、選抜戦ねえ……」

先日のホームルームの際、白雪の担任の病弱教師もといユリちゃん曰く、今年からランク評価から

実戦によって七星剣武祭の選抜メンバーを  
選ぶ方向に変わったらしい。

「理事長が変わったから『あっち』も破軍に  
二人送り込んだ訳か」

万が一凶手が脱落するような事態がないように  
一人ではなく二人送り込んだのだろう。

そう適当な推測を立てながら白雪は会計を  
済ませ、スーパーのエリアから出るのだった。

次に白雪は服屋へと立ち寄った。

姉に似合う服を買う為だ。

姉は防寒具をよく着てはいるもののそれは  
趣味から来ているものではなく

「顔を見られないようにする」ためだ。

そのためか、それ以外の服装をあまりしない。

……しないというよりは、彼女のセンスが  
圧倒的に欠如しているからなのだが。

「姉さまは勿体ないよなあ。あんなに可愛い

顔しているのに、化粧とかしないし  
服のセンスもないし。もうちよつと

そこらへんに気を使えばいいのに」

一方の白雪は姉を尊敬しているために防寒具を  
よく着ているが、服装のセンスや化粧の腕は  
姉に比べ遥かに上だ。

昔は姉同様興味はなかったのだが、

とある人物から「講義」を受けた際に、

『化粧や服装も顔を隠す一種のカムフラージュ。

化粧は顔のイメージを、服装は他人が感じる印象を上書き出来る』と教わり、

それ以来化粧や服装にも気を使うようになった。

白雪は黒系統の色をしたゴスロリの衣装を手取る。

「むー、姉さまにはこれが似合うんだろうな……

あ、でもさつき見たヴィジュアル系の服も

良かったな……」

姉の性格を表現したようなヴィジュアル系か、

それとも可愛い容姿を引き立てるゴスロリか。

白雪はどちらが姉により似合うか思索していた。

と、彼女の顔が強張る。

即座に服を元の位置に戻すと、白雪は

行動を開始した。

そして、それと同時に銃声が鳴り響いた。

2分後、白雪がいた服屋には2人の武装した

男が立っていた。

彼らは《解放軍》の《信奉者》、言ってしまうと下っ端だ。

「おい、これでもうここには人質はいないな？」

「ああ、後はビショウウさんが戻るまで人質の所で待ってろだよ」

そう言ってその男はアサルトライフルを

持ち上げて、やれやれとばかりにため息を

ついた。



「あーあ、せつかくこれを心ゆくまでぶつ放せると思ったのによ。待ってるだなんてつまらねえよなあ？」  
そう言つて、男は隣にいた仲間の方に振り向いた。

炸裂音。

それと同時にその仲間の脳天を魔弾が撃ち抜く。  
風穴からは血が噴き出し、仲間は目をぐりんつ、と裏返らせて前のめりに倒れた。

「ツ~~~~~~~~!!?」  
慌てて、男は先程まで生きていた仲間から跳びのき、アサルトライフルをリロードするとどこかにいるはずの敵を————

「遅いんだよなあ」  
探す前に彼はその声と共に、先程の仲間と同様に額を撃ち抜かれた。

「この銃は……《解放軍》の奴らか」  
白雪は、自分が生産した死体が持っていた

アサルトライフルを見て、舌打ちした。

「人の買ひ物の邪魔して……全く迷惑な連中だ」

自分がその迷惑な連中の一員であることを  
棚に上げて、白雪はそう唾棄した。

「まあ、久しぶりに腕が鈍ってないか確かめる  
には、丁度いいかな」

そう言うと、白雪は自らの霊装を再び顕現した。

硬い金属で出来た長い銃身。

白系統の色の迷彩塗装を施された銃床。

そして上部に付いたスコープ。

これこそが多々良白雪の狙撃銃の霊装、《銀雪》だ。

彼女は《銀雪》を抱えながら、店に設置されていた  
監視カメラを確認した。

どうやら男達が押し入った時に破壊されたらしく、

カメラ本体はなく、台座のみが残っている。

それから、誰もいない店内を見回し、暫し

悩んでから、

「…………ごめんなさいっ」

彼女は人質となつていようであろう店員に謝りながら

先程までどちらを買うか悩んでいたゴスロリと

ヴィジュアル系の服を袋に詰めて持ち出すのだった。

## ヘッドショット

白雪は周囲に人がいないか警戒しながら、2階の階段を利用し最上階である4階まで移動した。

このショットピングモールは吹き抜けになっている広場があり、そこに人質は集められていた。それは狙撃銃を扱う白雪にとってはとてもやりやすい状態にあつた。

4階から広場全体を狙え、更に自らの位置が悟られにくい場所へと気配を消して移動し、白雪は《銀雪》を構える。

(見たところ、下っ端しか見えないな……)

《使徒》は別働隊を率いてるらしい)

そして《信奉者》の数から推測するに恐らく

《使徒》の人数は一人。

念の為、他の位置からの視界も「作り出して」おくべきと判断し、白雪は《銀雪》を上に向けた。

「バレット・アイズ」  
《弾眼》」

その言葉と共に、銃口からまるで豆粒みたいな魔力で作られた弾丸が発射され、中空で留まった。

この弾丸には殺傷能力は殆どない。しかしその代わりにこの弾丸からの魔力を介して伐刀者の位置、または自分の視界外にいる敵を見つけることができる。

(人質の中にも伐刀者がいるな。2人……)

いや、他の位置にも2人いる。

《使徒》らしい伐刀者は……まだ3階には来ていないか)

と、人質の少年が《信奉者》の男に向かい  
アイスクリームをぶつけた。

(あーあ、こういう正義感の強いバカがいるから  
事態がより悪化するんだよ……)

そして彼女の思った通り、男は激昂して

少年を撃ち殺そうとしているが、

母親らしき女性が庇っている上に

多分《使徒》から止められているのだろう、

仲間も男を制止していた。

が、男はそれを振り切り銃のトリガーを  
引いた。

しかし、その銃弾は、間に割り込んだ

紅蓮の髪をした少女の炎によって跡形も

なく消滅した。

(あ、ステラ・ヴァーミリオンだ)

白雪は上から見ていたので、つば広の帽子を

被っていたステラに気づけなかった。

(彼女なら、油断でもしない限り平気だな。

さて、逃げよう。こんなゴタゴタ

付き合ってられないし)

と、コソコソと逃げようとした刹那、

「落ち着きなさいッツ!!??!!?」

「あひやあッ!!?」

と、思い切り肝を冷やされた。

(ツゝ。驚かさないでよ!!??。寿命が縮むかと

思ってたわ!!?)

「おやおやおやく?これはこれほとんどでもない

お方が紛れ込んだもんだあ」

下卑た声が下から聞こえ、白雪は恐る恐る

《弾眼》からの視界を共有した。

そこからは、ステラと相対する顔に刺青の入った男の姿が見えた。

黒地に金刺繍の外套を着用している。

(来た。あれか《使徒》は)

そして白雪は彼に見覚えがあった。

数ヶ月前に任務で一緒になった記憶がある。

(あいつ……確かビシヨウとか言ったか。

霊装は、えーと……)

と、白雪が考え込んでいる間にビシヨウは

先程の少年に向け銃口を突きつけ、

ステラはそれを防ごうと自らの霊装、

《妃竜の罪剣》で斬りつけた。

(あ、思い出した思い出した。

《大法官の指輪》だったっけあいつの霊装。

で、その能力が……)

その渾身の一撃をビシヨウはなんと指一本で

受け、ステラの腹部に右の拳を打ち込んだ。

その衝撃に耐えられず、彼女は膝をつく。

(姉さまと一緒に《攻撃の反射》だったな。

……あれ、ステラが膝ついてる)

どうやら考えてる間に勝負のカタがついた

ようらしい。

ビシヨウは高笑いしながら、悦に浸っている。

「……誰もが知ってる簡単な贖罪の方法、

悪いことしたら謝る。それだけのこと。

つまりですねえ、お姫様があのガキの代わりに

謝るんですよ、……全裸で、土下座してネエ!!?

カカカカカカカカカカカカ!!?」

(よし、殺そうコイツ)

ビシヨウが悦に浸りながらステラに強要しようとしたことが白雪のカンに障ったらしい。

(本能的にやっぱ受け付けないや。)

……ところで姉さま、羞恥プレイは好きかな?)

訂正。今までビシヨウを殺すかどうか悩んでたが先程の言葉で殺すことにしたらしい。

白雪は《弾眼》からの映像を共有しながら、ビシヨウの頭に向けて銃口を定めた。

(フヒヒヒヒヒ……皇女サマの)

ヌードなんざ、そうそうお目にかかれる

もんじゃねえよなあ。ヒヒッ)

どんだん服を脱いでゆくステラの姿を見ながらビシヨウはそう思った。

猛る気持ちを抑え、睨め付けるように

ステラの肢体を眺める。

ステラは羞恥と怒りで爆発しそうになっていた。

……実際、上の階から炸裂音が響いたが。

「ツ!!?チッ、上に仲間がいやがったな!!?」

そしてその音と共に一発の魔弾がビシヨウの頭目掛け直進する。

更に、先程からずっと潜伏していたステラと

一緒に来ていた一輝、アリスが奇襲を仕掛けた。

ビシヨウはまず魔弾を防ごうと自らの霊装

《大法官の指輪》の左手を突き出した。

このままでは、魔弾は《罪》としてビシヨウに

吸収され《罰》として撃ち返されるだろう。

ビシヨウは、この次の展開を完全に読めて

いた。

少なくとも、この時までには。

「……………は？」

次の瞬間、ビシヨウはとんでもないものを見せつけられた。

自分の左手へ向かっていたはずの魔弾が、まるで生きているかのように人差し指と親指の間を“曲がって”すり抜け、更に弾道をビシヨウの頭へと再度ロツクオンする非常に奇怪な挙動を。

「なッ……………!!?」

いかに攻撃を反射できようが、その《罪》の左手に捉えなければ意味はない。

魔弾は今度こそビシヨウの頭へ突き進み、

「……………こんなのアリかよオオオオオ!!?」

一寸のブレなく額のだ真ん中を貫いた。

「こんなのアリかよとか、お前が言うな」

ビシヨウが負けた理由は一つ、

「自らの霊装の情報を白雪に見せてしまった」。

それによって白雪にそれを破る術を生み出させて  
しまった訳である。

「逃げましょ逃げましょ」

今度こそそそくさと退散しようとした時、  
影から一人の背高の青年が現れた。

「《暁学園》の多々良白雪ね？ついて来て。

出口まで案内してあげる」

白雪はその言葉に従い、彼の元へと向かった。

有栖院の《日影道》によって無事白雪は  
シヨツピングモールの外へと出られた。

「ありがとうございます、アリスさん」

「いいのよ、貴女の存在が知れたら余計な  
詮索をされる可能性があるしね」

と、アリスは白雪の顔を眺める。

「にしても、《不転》の妹の实力は初めて

見たわ……」

紡ぎ出す言葉が途中で止まった。否、  
止められたのだ。

何故ならば。

「一介の凶手風情が、姉さま呼び捨てに  
してんじゃねえぞ……!!？」

白雪から放たれた怒気に言葉を出すことを  
恐れたからだ。

「ッ……!!？も、申し訳なかったわ。



知らなかったのよ」

ヒリヒリとした怒気が静まっていく。

「……あつ、す、すいませんでしたツ!!？」

やだもうボクったら、恥ずかしいツ!!？」

ハツとした表情で赤面しながら白雪は顔を

隠した。

その様子を見て、アリスは確信する。

(やっぱり、本当だったのね。

多々良白雪は相当な姉狂いつて噂)

その傾倒たるや、かつて姉を傷つけようと

したという理由から多々良幽衣の実父を

殺害したという眉唾な話まで上がっている

ほどだ。

(こんなのがいるなんて、暁は本当に

やってけるのかしらねえ……?)

シヨップینگモールを《解放軍》が占拠した

事件。それを解決したのは紅蓮の皇女、

そしてFランクの騎士とまことしやかに

言われているが、実は解決する糸口を

姉狂いの狙撃手が作り出したことは

殆ど知られていない……。

## 多々良幽衣は妹から離れたい

貪狼学園の生徒であり《暁学園》の生徒の一人である多々良幽衣は慢性的な寝不足であった。それに関してはかつては彼女の能力の特訓が原因だったが、途中から妹の日夜問わずの接近を察知しなければならなくなったのが原因となった。

……それによって幽衣は雨粒一つ一つを見分けることのできる動体視力、目をつぶっていても気配を察知できる勘、更には的確な挙動を行える判断力を獲得できたのだが。

「アア……寝みい……」

くああ、と大口を開けながら幽衣は寮の自分の部屋の鍵を開けた。

(白雪がいないと、本当に安心する。

おかげでアタイもゆっくりリラックスできるよ) そう思いながら彼女は扉を開け……

「あ、姉さまおかえり!!? ボルシチとピロシキ、あと少ししたらできるから。

それまで姉さまは何してる? お風呂?

それとも……ボク」ボタンツ!!?

コンマ数秒で再び閉めた。

そして扉に背をもたれかけて、ずりずりと座り込んだ。

(落ち着け……。今のは白雪から送られてくる

大量のメールによるストレスでアタイが

幻覚を見たんだ……現実じゃない、現実じゃない)

「姉さま、早く入りなよー」

「ああッ、クソツ!!? 夢じゃなかった!!?」

幽衣は自分の見間違いであれば良かったのに、と心から思うのだった。

「……相変わらずテメエの料理は美味しいな」

「でしょ？ボクは姉さまの為ならなんでも

するよ。料理だってその限りじゃないしさ」

観念した幽衣は白雪が作ったロシア料理を

(無論睡眠薬が入ってないか何度も確認した)  
食べていた。

ただ幽衣は白雪の料理はかなり好きだった。

自分の味の好みを分かってくれている上に

白雪の料理の腕自体も高いからだ。

「というか、どうやって入ってきたんだよ!!？」

監視カメラとか色々あったろ!!？」

「あ、それはもう監視カメラの死角を抜けて

鍵はピッキングで開けたんだ」

「そんなことで凶手の技術を使うんじゃねえよ!!？」

技術の無駄遣い、ここに極まれり。

「入ってみて思ったんだけど……姉さまの

部屋結構汚かったねえ。ちゃんと掃除したけど」

余計なお世話だ、と幽衣は返しながら食事を

終えた。掃除に何かやったか、とかはもう

聞く気にはなれなかった。

白雪の突飛な行動に自分のツツコミが

追いつかないし寿命が縮みそうだからだ。

「姉さま、先にお風呂入ってきていいですか？」

「ああもう勝手にしろ勝手に」

風呂場からシャワーを浴びる音が聞こえる。

幽衣は白雪のことについて思案していた。

(いい加減、アタイへの愛が重すぎるって

気付いてくれねえかな……?)

……無理か)

白雪の幽衣に対する思い入れようは凄いものであった。

かつて、白雪を疎く思った幽衣がなんとか自分から離れさせようと幽衣に常人には難しい注文をしたのだ。

「自分の指を喰い千切れ」と。

ただ、幽衣はたった一つだけミスを犯した。

その時に「出来たら姉さんと呼んでもいい」とうっかり約束してしまったのだ。

その結果として、白雪は迷うこともなく自分の親指を喰い千切った。

喰い千切ってしまったのである。

(あんときやアタイもビビったよ……)

クソ、あんなこと約束しなきゃ良かった……)

しかし、約束していなくとも白雪ならやり遂げそうだとも思い、幽衣は考えるのをやめた。

「姉さまー。ボク出たから入っていいよー」

そう言つて、白雪がすっぽんぽんの状態で幽衣のところへと呼びに来た。

「服ウ!!?せめてパンツぐらい履けコノヤロー!!?」

「えっ、パンツ?」

そう言うと、白雪は迷うことなく自分が掃除した

時に持ち出したのだろう。

姉のパンツを荷物から取り出した。

「待て待て待て待て!!?その下着アタイのだよなあ!!?」  
「しかも今どこに履こうとした!!?」

「えっ……やだもう姉さまったら。決まってる

じゃないですか。姉さまのパンツは

頭か顔に履くものでしょう?」

「バツキヤロー……!!?」

その後、「姉さまの髪の毛のトリートメントを

したい」という理由でいつも入っている時間の

二倍近い時間をかけて入浴させられ、

学園生活について色々と話があった。

「……ところで、いつ帰るんだ?」

破軍といや武曲と同じように今年から

選抜戦始めるんじゃないか?」

お前のことだからやられるようなことは

ないと思うが」

「明日の朝イチで帰る。選抜戦は明後日から」

白雪は幽衣の髪をタオルで挟むようにして

水分を取りながら答えた。

「……寂しくない?」

「バカ。お前と一緒にすんなよ。」

アタイは一人でもやってけるから」

子供の頃甘えられるような機会がなかった故か

白雪はたまにこういう子供っぽいような

凶手らしからぬ言動をとることがあった。

幽衣は白雪のそういうところは可愛いとは思ってはいるのだが、いかんせん伝えられずにいる。

「子守唄歌ってあげようか？」

「いや、なんでそうなる」

「口ではそんなこと言ってるけど、

実は寂しいんじゃないかな、って」

幽衣は苦笑いしながらドライヤーで

自分の髪を乾かしてくれている白雪に

「勝手にやればいい」と答えた。

幽衣の寮には布団は一つしかなかったのので、二人で使うことになった。

若干暑苦しいものの幽衣はどうせ一時間程度しか眠れないだろうとたかをくくって目を閉じなかった。と、そこに。

「……Спи, младенец мой прекрасный,」

白雪が子守唄を静かに歌い始めた。

どうやら幽衣が眠れないと勘違いしたらしい。

(……ほつとくか。こんなのでアタイが眠れるわけないし、大体アタイは赤ん坊じゃないし。そのうち白雪が眠っちまうだろ)

「Баюшки—баю……」

幽衣はそう思って、白雪の歌うままに任せた。

「Баюшки—баю……。」

……ごめんなさい姉さま、うるさかったよね？  
しかし、幽衣からの返事はなかった。

「……姉さま？」

恐る恐る白雪が隣の姉の顔を確認すると。

「……すう……すう……。」

ものの見事に熟睡していた。

ちつとやさつとでは起きそうにない。

白雪は驚きつつも、

「……やばい、姉さまの寝顔超可愛い」と

危うく騒ぎかけた。

(……姉さまが望むならボクはなんでもする。

悪魔だろうと神だろうと、姉様が望むなら

殺してみせるよ)

それで、またこの寝顔を見られるのなら

本望だと。

多々良白雪は姉の寝顔を見ながら思うのだった。

小鳥のさえずりで幽衣は目を覚ました。

「ん……んう……。」

ふわあ、と欠伸をしながらぼけーつとした顔で起き上がり、なんとなく時計を確認した。

「……あ？9時？嘘だろおい？？」

休日だからまだいいものの平日であれば遅刻確実である。

どうやら、白雪の子守唄でまさかの熟睡をしてしまったらしい。

「いつもなら二、三時間しか寝られねえのになんでまあそうなるんだ……？」

部屋に白雪の姿はなかった。

どうやら帰ったらしい。机に置き手紙が置かれていた。

「どれどれ……？」と幽衣は置き手紙の内容を読み始めた。

『姉さまへ』

とても幸せそうに熟睡していたので起こさずにおきました。

もしそれが気に障ったら申し訳ありません。

冷蔵庫に昨日の残りが保存してあります。

なるべく早く早く食べて下さい。

お身体と美容に気を付けて。

白雪より』

それを読みながら幽衣はぷつ、と嘔き出した。

「全く、変なところで気を使うんじゃない

ねえよ、ホントに」

と、手紙の隅にあとがきがあるのに気付いた幽衣はそれも読むことにした。

『p, s



姉さまのパンツ一枚持って行きます』

「……………あ……………!!?」

し……………白雪イイイイイイイツ!!?」

朝の貪狼学園に、怒号が響き渡るのであった。

## 選抜戦

今日はなんだか、学園の生徒たちがざわめいている。まあ無理もないことだろう。今日から、選抜戦が始まるのだから。

「……ボクの初戦の相手は二年生の

竜崎、とかいうのだったかな……？」

マフラーに顔を埋めながらボクは相手の情報を確認した。

竜崎 大、破軍学園の二年生。Cランク騎士だ。

校内序列は9位の男性で固有霊装は

ナツクルダスター。

《重力使い》の伐刀者で、伐刀絶技は

《暴君顎門》。

「ぶっちゃけ……ボクにとっちゃ相性良すぎて

楽なんだよなあ……」

ボクの固有霊装は狙撃銃。

相手の能力範囲外まで出しまえば煮るなり焼くなりどうにでもできる。

くああ……と欠伸をしながらボクは試合場へ向かう。これからその竜崎と試合だからだ。

(にしても、喉乾いた……)

防寒具を纏っているこの姿だと異様に暑いし喉は乾くわ汗はかくわでまだ夏でもないのに大変だ。

これから夏となると考えると今から気が重い。

「ああ、嫌だなあ……」

控室にはエアコンがついていて、ボクは冷房を入れて試合の時間までゆっくりすることにしました。

ボクの前は前回七星剣武祭に出場した

《狩人》こと桐原静矢と、《落第騎士》黒鉄一輝の試合であり、客席は生徒で満杯であった。

一応、黒鉄はボクと一緒のクラスなので応援させてもらう……心の中で。

あんな人がいっぱいいるところで応援してたらボクは人酔いして吐く自信がある。

(大変だなあ黒鉄君。初っ端から七星剣武祭出場者と当たるとはなんて)

まあボクも校内序列一桁と当たるとはだからそう変わらないが。

ああ、なんて面倒なんだ。

こういう時は早く終わらせるに限る。

そして、とっとと帰るのが一番だ。

(最も早い手順で終わらせることにしよう)

やがて、白雪の試合の時間が訪れた。

『さあ、先程の《狩人》桐原静矢選手と《落第騎士》

黒鉄一輝選手の試合から若干観客の数が減ったように思えますが、張り切っついていきましよう!!?』

赤ゲートから姿を見せたのは校内序列9位、

竜崎 大選手です!!?』

そのコールと共に、黒髪の偉丈夫……竜崎が

姿を見せる。

『前年度の模擬戦では自身の能力と

強烈な攻撃力を持つ伐刀絶技、

《ディノサウルバイト暴君顎門》で驚異の勝率8割5分を

誇っているパワーファイター!!?」

今回もその伐刀絶技ノウブルアーツで勝利を

決めるのでしょうか!?!?」

続いて青ゲートからも相手選手の多々良 白雪選手が

姿を見せました!!?」』

竜崎が出て来たゲートの反対側から、防寒具を

纏う小柄な少女が観客の前に現れた。

『今年からこの破軍学園に入学した1年生!!?」

その実力は全く以て未確定です!!?」

さあ、両者がスタートラインにつきましたッ!!?」』

10m程の距離を置いて二人が向かい合う。

「いけーダイナソー!!? お前なら余裕だぞー!!?」

「捻り潰してやれー!!?」

『観客からのコールを受けて、竜崎選手が

《ティラノフアング古代の大牙》を顕現しました!!?」

しかしッ!!? 白雪選手それを見ても自らの霊装を

顕現する様子が見受けられない!!? これは

どういうことだろうか!?!?」

実況の言う通り、白雪はじつと竜崎を見つめ

霊装を顕現しようとしな

「ねえ、今からでも遅くはないから。

……降参しない?」

「あ? 何言ってるんだお前。するわけねーだろ。

アホが」

竜崎がそう言うのも当たり前だろう。

白雪はまだ実戦すら経験していない1年生。

しかしそれに比べ自分は学園序列一桁。  
負ける道理が見つからないからだ。

『さあ、今回は竜崎選手が上級生の格を

見せるのか!!?それとも1年生の白雪選手が  
大番狂わせを起こすのか!?!?

試合開始のコールが……今鳴りましたツ!!?』

「シャアアアツ!!?」

開始早々に竜崎は自分の周りの重力を倍加させ  
白雪の機動力を奪う。

(舐めた真似してる奴には少し痛い目に遭って

もらうぜっ!!?)

続いて竜崎は白雪に《ディノサウルバイト暴君顎門》を見舞おう

として……

姿を見失った。

先程まで自分の正面にいたというのに。

(なっ!?!?)

訳が分からない。どうやったら正面に、

それも10m先にいた敵が、

「遅い」

自分に気付かれず目の前に

現れるなどという芸当が出来るのだろうか?

竜崎は接近を許してしまった白雪を迎撃しようと  
するが間に合わず、腹に思いつきり

抜き手を叩き込まれた。

「がッ……!?!?」

その強烈な痛みに思わず重力倍加を解除して  
しまう。それによって白雪は奪われていた

機動力を取り戻し、次の瞬間魔力による

加速を使用して竜崎に高速の攻撃を仕掛ける。

『開始早々白雪選手ラツシユラツシユラツシユウウウウウウツツ!!  
? 竜崎選手たまらず防御に』

徹しますが構わず白雪選手攻撃を続けるツ!!?』

「おいおい嘘だろ!!?」

「頑張れダイナソー!!?」

観客から聞こえてくる応援に竜崎は、

(無理に決まってるんだろバカヤロウツ!!?)と

心の中で吠えた。

白雪とかいう対戦相手、中々に拳打の威力が

ハンパではない。魔力による強化も伴っている

だろうが、それを差し引いてもかなりの威力だ。

おまけに反撃に入れる隙が全くない。

(こいつ、ホントに1年坊か……!!?)

だがそうそう殴られてばかりでは上級生の

メンツがスタボロだ。

(校内序列一桁の底力、てめーに見せてやるよツ!!?)

「ウ、オオオオオオアアアアアアアアアアツ!!?」

『おおとつ!!? 竜崎選手、ラツシユを受けながらも

雄々しく雄叫びを上げました!!?』

さて、どうやって白雪選手の攻撃を

止めるのでしょうか!!?』

竜崎の雄叫びに顔を顰めながら白雪が

距離を取る。ようやく、竜崎に攻撃のチャンスが

訪れたのだ。

(さつきは不覚を取ったが、二度も同じ手は  
食わねえ。今度はてめーの姿を見失いは  
しねえぞっ!!?)

竜崎は白雪へ渾身の一撃を叩き込もうと  
走り出し、

再び白雪に懐に入り込まれて今度は首の後側面に強烈なパンチを撃ち込まれ、その意識を徹底的に破壊された。

『あ……圧倒的イイイイツ!!? 竜崎選手、

まるで手も足も出さず!!? 白雪選手のラビットパンチによつてKOされましたアアツ!!?』

白雪選手、竜崎選手に目もくれず踵を返してゲートへと戻つてゆきます!!?』

「マジかよ……ダイナソーが肉弾戦で負けた!!?」

「油断してたんだろ……そうとしか思えねえよ」

「やっぱり、今年の1年は化け物揃いだな……」

観客達が騒ぐ中、白雪は飄々とした様子でゲートの中へと姿を消した。

「あーあ、ちよつとばかりし相手がタフだった……」

そう言いながら白雪は首を回した。

本来ならばもっと早い時間で終わらせるはず

だったのだが、竜崎が思ったよりも体力が

あつたために時間がかかってしまった。

「伊達に序列一桁じゃない、か。」

まあ、頑張ったよ、彼は」

白雪は、今頃治療を受けているであろう

竜崎へ人知れず賛辞を送るのだった。

(にしても、昔「先生」が教えてくれた

ニンジャが使うっていうウオーク・ジツだったか。

効果は本物だけどネーミングがな……)

白雪は試合中に使ったウオーク・ジツが日本発祥で、  
しかも古流歩法「抜き足」と呼ばれていることを  
のちに知ることになるのだがそれはまた別の話。



## 接触

最近、黒鉄一輝の元に破軍の生徒が集まってきている。各々の霊装の刀や弓などの技術を高めるためらしい。

(黒鉄一輝……剣術だけでなく弓術や小太刀術も学んでいるようだね。ボクにとっては天敵だよ) 今までの選抜戦6戦全てにおいてボクが優位に立つことが出来たのは相手がなんらかの武術を学んでいなかったことが大きい。ボクの『初見殺し』は武術の達人の前では効果が半減してしまうからだ。

(しかしまあ……黒鉄君は甘いねえ……) そんなことばらすような真似しなくてもいいのに) 戦いにおいては自分がどのような選択肢を持っているのか、敵に知られないようにする方が有利だ。その方が敵に手の内を読まれなくなるから。これは長い間凶手をやってきたボクの経験からの話だ。

「……ねえ、白雪。アンタも行ってみたら? 最近みんなが行ってるっていう落第騎士の講習みたいなの」

黒鉄君の元に破軍の生徒が学びに来るようになって4、5日経った頃、ボクはそうルームメイトの少女に言われた。

「……なんでボクが。ボクより君が行った方がいいんじゃないの? 蜂谷さん」

「あたしはだってほら、選抜戦より夏コミだし。非力だし。……あ、夏コミに何か買ってこようか? 《白兔》さん?」

このルームメイト、魔導騎士になるためではなく

他の企業に楽に入るために破軍に入ったと聞いている。そのため選抜戦にあまり興味がない。ちなみに《白兎》というのは最近つけられたボクの二つ名。

選抜戦全てでラビットパンチで決めているのが理由だそう。

……正直言つて、あまりこの二つ名は好きとは言い難い。大体ラビットパンチは元々兎を殺すために使われた技で、そこからいくならボクにやられた連中が兎のはずなのだが。

「……ちつ……あ、今のは気にしないで」

「今一瞬すごい殺意が見えたけど」

「気のせいだよ……気のせい。夏コミの件は百合本買ってきて。R18指定のやつ」

「……あんたも、中々だねえ……」

失敬な。百合のどこが悪い。むさ苦しい男同士の絡み合いより遥かに良いと思うのだが。

それにしても講習の件だが、

黒鉄君から学ぶことはなさそうに思える。

しかし、黒鉄君の弱点を探るにはうってつけの機会と言えよう。

「……ぼちぼち、行くとしようかな……」

「夏コミの話？」

「違う……」

最近の気温は春のような陽気ではなくなり、熱帯みtainな日本の夏の暑さが

随所に感じられる。

(これからどんどん暑くなるのか……辛いなあ)

姉さまは大丈夫だろうか？ボクよりかはある程度暑さに強いと聞いているのだが、いかんせん心配である。何せ彼女、弱い所を他人に対して見せたがらないからだ。

眠りながら寝言で「ごめんなさい」と泣きながら呟いているところなんてたくさん見た。

だからこそボクは姉さまの元で姉さまの苦しみを軽減してあげたいのだが……。

『おい、見ろよ。《白兔》がいるぜ』

『あの霊装なしで6戦全て勝ったって噂の？』

まさかそんな訳ないでしょ』

『いや、俺一回彼女の試合見たけど、

殆どワンサイドゲームだったぞ？』

『嘘お!!？霊装なしで!!？信じられない!!？』

まあ、6戦全て霊装なしで勝ったとなればそりやあ噂にも登るだろう。

今年入学した《深海の魔女》や

《紅蓮の皇女》に比べれば幾分は劣るが。

そんな噂をあちこちで聞きながらもボクは黒鉄君が行っているという剣や弓の講習をしている場所へと到着した。

「ねえ、イツキ……」

ステラ・ヴァーミリオンは丁度一人の男子生徒を教え終えた黒鉄一輝に向かって話しかけた。

「ステラ……気づいた？」

「ええ……」と二人は目だけでその方向を  
確認した。

そこには、防寒具を纏った少女がベンチに座り、  
コーヒーマグの味がする豆乳を飲みながら  
こちらの様子を伺っていた。

「……」

それがただ見つめているだけならば二人とも  
それほど気にはしないのだが、その少女は  
二人へ向けて一種の殺気を放っていた。

およそひりつくような感覚が二人の背中を  
刺激する。

「これだけの殺気……あいつ、一体何者？」

ステラはそう言いながら少女の元に  
詰め寄った。

いつまでも殺気を放たれていてはおちおち  
鍛錬も出来ないからだ。

「ちよっと貴女!!?話したいことがあるなら  
ちゃんと話さないよ!!?」

そう言われて少女は、「……そう、じゃあ」と  
言って話したかったことを話した。

「ボクは噂の《落第騎士》の強さを見にきた。  
ただそれだけ」

「ボクの強さ?」

黒鉄が不思議そうな顔をして少女の方を見る。

少女はマフラーで隠された口角を吊り上げ、  
笑った。

「そう。《紅蓮の皇女》に《狩人》を倒した

無名のFランク。注目されない訳がないじゃないか」

(注目はしてたけど本当は行く気なかったん  
だけどね……)

少女は……白雪はそう思いながらも一輝に向かつてそう言った。

「大体同じクラスの人間の顔ぐらい覚えておいてくれよ、《落第騎士》」

「同じクラス……？……あっ!!？」

暫しの間考え込む様子をした後に一輝は自分が相対している少女の名を思い出した。

「多々良白雪さんか!??ごめん、思い出した!!？」

「……いやまあ、そんな話さないから忘れられても文句言えないけどね?」

「というか貴女、強さを見にきたってことは野次馬感覚で来たの?さっきのアレを出せるなら選抜戦にも出てるはずよね?」

「一応は」

「どの程度の戦績か、もし良ければ教えてくれないかな?」

「……無敗全勝」

一輝とステラは顔を見合わせた。

6戦もしていれば上位の生徒とも当たったはず。

それを屠る程度にはこの少女は強い事を理解した。……先程の殺気でなんとなく強いとは分かってはいたが。

「無敗って……だとしたらアリスみたいに噂に登っても仕方ないと思うけど。

貴女の噂は聞いたことないわね」

「まあ、アリスとかいう人だったか。

彼、イケメンだからね」

アリスと白雪は暁学園にて面識がある。

だが、一応知らない振りをして白雪は話に相槌をうった。

「もしかして……《白兔》って白雪さんのこと

「じゃないかな？」

「……ん。それだね、ボクの二つ名」

「《白兔》？何、それって？」

「ここで一輝は自分が知りうる《白兔》の噂の内容を話し、それを白雪が肯定した。

「霊装なしで全勝って……どんだけ強いんだよ!？」

「オーバリアクションで驚いているステラを

尻目に、白雪は一輝の方へと向き直った。

「で、本題に入るよ黒鉄君。

「……ボクと手合せしてほしいんだ」

「白雪の切り出した決闘。

「……分かったよ」

「一輝は、それを首肯を以って受け入れた。」

## 《落第騎士》との手合せ

破軍に点在するドーム型闘技場の一つ。

第二訓練場の中心に20、30mほどの間を空けて

黒鉄 一輝と多々良 白雪は対峙していた。

周りの観客席にはステラを含め数十名の生徒が視線を二人へ向けていた。

一輝に剣を教えてもらいたいもの、元々

トレーニングに来ていた者が大半を占めている。

(……全く、すごいプレッシャーだ)

白雪は体中にビリビリと電流が走るような感覚を覚えながらも、対峙している一輝を睨んだ。

やはり剣客のプレッシャーは一味違う。

だがしかし白雪も《不転》ほどではないにしろ名うての凶手。この程度ではびびらない。

「多々良さん。本当に霊装なしでやるのかい？」

「……ボクの技術がどこまで君に通用するのかわかりたいだけだから。破軍で一番近接戦が

強いのは君だとボクは思ってるからね」

それを聞いて、一輝は思わず苦笑いした。

この学園には前年度七星剣武祭ベスト4の

《雷切》や《紅蓮の皇女》などの強豪がいる中で彼女は一輝が最強だと言いつつ切ったのだ。

相当な買いかぶりだと思いつつも、

単純にそう思っていることに対して嬉しいとも

一輝は感じた。

「お互い、出し惜しみはなしにしよう」

「……そうだね」

そうして、《落第騎士》対《白兔》の模擬戦が幕を開けた。

まず、先に動いたのは白雪であった。

すっ、と体を沈めて魔力による加速と共に

一輝へと襲いかかる。

その速さは疾風の如く速く、更に《抜き足》の使用によつて一輝には探知できなくなっている。

白雪はそのまま一輝の間合いを詰め、打突を見舞おうとした刹那。

一輝の視線が自分を捉えていたことに気付き、全神経を総動員して彼の間合いから逃げた。

直後、白雪がいたところに白刃の閃光が走る。

《幻想形態》の使用なので怪我はしないものの、これがもし実戦であれば、そして白雪の判断がもう少し遅ければ彼女の首は今頃飛んでいた。

(あ……ぶなっ……)

初見でこれを破られたのは白雪も初めての経験ではないが、まさか破軍の生徒にこれを破られるのは想定外であった。

一瞬背中に噴き出した冷や汗を気にしながらも

白雪は一輝に向かってニヤリと笑う。

「……流石。これ避けたの君が初めてだよ」

「ぎっきの歩法……《抜き足》だね？」

ボクも前に一回同じようなものをやられたから対処法はわかっている」

(抜き足って言うんだ……ニンジャ・ウォーク・ジツではないんだね)

新しい発見をしながらも、白雪は再び一輝へと



《抜き足》を使用して襲いかかる。

『おいおい、また突っ込んでいくのかよ!?!?』

『今度こそ斬り刻まれちまうぞー!?!?』

野次馬から驚きの声、白雪の危険を案ずる声がかかる。

《抜き足》は使えないことは白雪も重々承知の上だ。

(だからこそ、使う意味がある)

破られるという前提があるなら、更に別の技術を以って突破するまで。

(《落第騎士》……これは見破れるかな!?!?)

(また使うのか、《抜き足》を)

一輝は懲りもせず再び《抜き足》を使用した白雪を自らの霊装《陰鉄》を構えながら思った。

考えられるパターンは二つ。

単純に《抜き足》しか使えないのか、

それともまだ他にも隠し球を持っているのか。

(彼女の様子から恐らく後者の可能性が高いな)

まだ彼女の論理思考を《完全掌握》出来ていない

一輝は今回も後手に回る。

白雪は再び一輝の間合いに入りー、

(ツーーーーー!!?!?)

次の瞬間今度は一輝が白雪の間合いから逃走した。

だが白雪が繰り出したのはただの抜き手。

観客は何故一輝が逃げたのか理解に苦しんだ。

『おいおい、なんで逃げちまうんだ?』

『だよなあ。あのままいけたぞ』

その中でたった一人、

(……今のは一輝の判断が正解ね)

ステラ・ヴァーミリオンだけが一輝の行動を理解していた。

白雪の攻撃を一輝が受けようとした刹那、ほんの僅かに一輝の動きが

鈍った。それによって一輝が防御するよりも先に白雪の攻撃が直撃すると一輝は理解して、彼女の攻撃が届かない範囲へと逃げる判断に変更したのである。

「……どうしたの? 顔色が悪そうだけど」

一輝の動きが鈍った理由を知っているのか、はたまた一輝の顔色から察したのか、白雪は一輝へ問うた。

(さっきの身体の不調は……!? 一体なんなんだ)

白雪が間合いへと踏み込んだ瞬間、目の前がぐらりと揺れ、強い偏頭痛に襲われた。

この状態では白雪の攻撃を防御するのは難しいと判断して逃げたのだが、彼女の間合いから逃れた途端に身体の不調が嘘のように消えた。

恐らくは彼女の異能か、または自分の身体の不調か。だが目の前の少女はそんなことを考えさせる暇は与えない。

「ちよこまかと……逃げないでよね!!?」

白雪が再度一輝へと襲いかかる。

今度は《抜き足》すら使用せずに。

だがその速さは先程よりもずっと速く、更に彼女が間合いに入ると必ず一輝を身体の不調が蝕むために、一輝は防戦を余儀なく

強いられてしまう。

『おお!!?《白兔》の方がなんか押しつけてねえか!!?』

『頑張ってー!!?《無冠の剣王》ー!!?』

激しく勝負を繰り返している両者。

観客の興奮のボルテージも戦いが長引くにつれて  
上がってゆく。

(……まずいな)

そう思ったのは、一輝ではなく白雪の方だった。

本来なら、この手段を用いてすぐに終わらせる

手はずだったのだが、終わらせるどころか

まず触れられてすらいない。

ぎりぎりのところで避けられているのだ。

側から見れば一輝は追い詰められているように

見えるものの、一輝の顔には焦燥の色などなく

攻撃がいなされていることを否応なく

理解させられた。

(このままだと《石化の魔眼》の

副作用で眼がやばい事になる)

石化の魔眼。それこそが

白雪が《抜き足》と共に使用していた技術であり

一輝を襲っていた身体の不調の原因である。

北欧の地域に伝わる魔術「ガンド」。

それは指先から相手の体調を崩す魔弾を

放つ技(この時対象を指差すため、人を

指で指してはいけない)という由来が生まれた

のでは、という逸話がある)なのだが、

石化の魔眼はそれを

眼から放てるように改良した魔術だ。

……無論魔弾ではなく眼が輝く形で、だ。

効果範囲は本来のガンドに比べ遙かに狭いが、その分発動までの時間は短縮され、範囲は狭まったとはいえ効果は変わりないと、一輝がふと、小さく呟いた。

「……なるほど、そういうことか」

口元に僅かな笑みを浮かべて。

「ツ!!?」

白雪が思わず立ち止まり、一輝を見た。

「白雪さん、今まで逃げ回っていてすみません。

……だけど、今理解した。だから今度は

僕が攻める番だ」

(石化の魔眼を破る方法を

見つけたのか!?まさか、ありえない!!?)

石化の魔眼は眼で見ることで

発動する特性上、逃げるのは難しい。

そして一輝には遠距離の攻撃法はない。

つまり、一輝は近接戦で白雪を攻められると

言っただに等しいのだ。

「だったら、見せてもらおうよ。」

黒鉄 一輝、君の実力を!!?」

模擬戦が開始されてから初めて白雪が

本気を出した。

《抜き足》と石化の魔眼の併用。

これを破ることは並大抵の伐刀者では不可能だ。

……だが、今彼女の目の前にいるのは

並大抵の伐刀者ではない!!?

一輝は迷わず白雪へと駆ける。

そして、彼が白雪の間合いへと入った刹那。

石化の魔眼によって

身体の動きを鈍らされ、その胸に渾身の一撃を

「……は？」

刹那、彼女が見たのは自分の横を通り過ぎる  
一輝の姿。

だが、先程まで彼は彼女の目の前にいたはず。

……いや、と白雪は理解した。

先程、目の前にいたのは残像だと。

直後、防寒具のフードを掴まれて白雪は

コートの上に叩きつけられた。

「第四秘剣————《蜃気狼》」

一瞬意識が飛び、再び白雪が目を覚ますと

鼻の先に切っ先が突きつけられていた。

「ダメだな、こりゃ」

ため息をついて、白雪は諸手を上げ降参した。

こうして、《落第騎士》対《白兔》の模擬戦は

《落第騎士》の勝利に終わったのだった。

## 対話

「……………模擬戦から数十分後。

白雪は一輝から飲み物をもらい、一休みしていた。

「……………ふう……………」

喉を潤して、一息つくると白雪は一輝を見やった。

「ありがとう。わざわざ手合わせに付き合ってもらって

その上水まで奢ってもらっちゃって」

「ああ、いいよ。ボクも学べるのが

たくさんあったし」

一輝はそう言いながら白雪へ質問した。

「そういえば手合わせの途中で多々良さんが

発動した魔術だけど……………あれは一体何？」

「あちやー、やっぱりバレてたか……………」

顔を手で覆ってため息をつき、それから

一輝へ白雪は質問の返答を返す。

手合わせの途中で発動した魔術の名は

《石化の魔眼》だということ。

相手の動きを束縛することのできる魔術で、

標的を見ることが発動できること。

使用し過ぎると眼に副作用が出るということのを

伝えた。

「《石化の魔眼》って……………」

何よそれ、そんなの聞いたことないわよ!!?」

「まあ……………ボクも教えてもらった身だからね」

「教えてもらった？」

一輝の言葉に頷きながら白雪は続ける。

「そう。かなり昔……………5、6年前だったかな？」

〃先生〃に教えてもらったんだ。

石化の魔眼もそうだし、体術とかも色々」と

「へえ……………そうなんだ」

「あ、あと日本にはTSUBAMEとかいう  
ありとあらゆる攻撃を回避する化け物が  
山に住んでるって聞いた」

「うん、どこのマンガかな、それ」  
そんな生物が存在していたら今頃世の中は  
大騒ぎになっている。

「……え、いないの？」

「いるわけないってば!!？」

「ええ……ニンジャも？」

「いない」

がつくりと肩を落とす白雪。

どうやら本気でいると信じていたらしい。

彼女はステラと同じく海外からの留学生と聞いて  
いたので、この辺りの誤解は世界共通なのかも  
しれない。

「ところで、シラユキが教わったって言う

“先生”って誰かしら？」

「言ったって誰だかわからないと思うよ。」

地元でもそうだったんだから日本じゃ尚更」

「……そう。残念ね。私もそんな魔術を  
教えてもらいたいものだけど」

心底残念なのだろう、ステラはしゅんとした様子で  
呟いた。

「……会わない方がいいと思うよ。」

先生は技術は確かに素晴らしいけど、人間としては  
唾棄すべき人物だから」

ステラに対して、白雪は諫めるように言った。

それが本当に“先生”という人物に対して心底  
軽蔑しているように聞こえ、一輝は驚いた。

人に対して余り興味のなさそうな彼女にそこまで  
軽蔑させる何かをその人物はしたのだろうか？

「今日はもうそろそろ帰らせてもらおうよ。

本当にいい体験が出来た」

「また手合わせできたらお願いします」

「あはは、気が向いたらね」

白雪は笑いながら……正確には上っ面だけ  
笑いながら一輝達と別れた。

心の中で思案しながら。

（今、先生は日本にいるんだよな。

刑務所だから会うことはないだろうけど）

「……日本某所、とある刑務所。

その地下奥深くに彼は禁錮刑に服していた。

「……そういうわけで今日本に私の愛弟子が  
来ているというのかね、《ベルセブ蟲使い》」

『ええ、その通りです。今は白雪……、

多々良 白雪と名乗っているようですが』

長身の青年に話しかけてくる声。

牢の中には彼一人しかいないというのに、である。  
もしも誰かがその声の発信源を見つけたなら  
必ず驚くだろう。

「しかし、君の能力は季節の縛りがあるにしろ  
非常に強力だね。こうして私の元に情報を  
伝えてくれるのだから」

『……私はあくまでも情報を伝えるだけです』

青年の耳元に止まっている蠅。

声はそこから発信されていた。



『《群雲》は完璧な仕事をしていますよ。

一人で世界中173ヶ所、

要人の動向の監視を行っているのですから」

「奴の仕事ぶりは分かったから、とりあえずは

今日本にいる白雪の目的について調べろ」

『……御意』

蠅が青年の耳元から飛び立つ。

青年は笑いながら、壁一面に書いた数式に

新たな数字を加えた。

「さて……今回は私を動かすに値する、

価値あるものはいるのだろうか？」

## 取材

破軍の選抜戦の回数が10を超えた頃。

ボクのルームメイト、蜂谷 由奈がボクにあることを頼んできた。

「取材？なんでさ」

「いやね、10回選抜戦があったじゃない？」

それで無敗のままの一年で取材を受けてないのってあんただけなのよ。一人だけ取材を受けてないのはちよつと仲間はずれにしてるように思えてね……」

ボクはマフラーの下からチョコバナナ味の

「豆乳を飲みながら、「断る」と言つてやった。

「なんでや!!？」

「だって蜂谷さんの言ってることは本当の理由とは思えないからね。それに面倒だし」

蜂谷さんの先程言ったことは理由の一つではあるが彼女を動かすにはそれはあまりにも「薄い」理由。

それに凶手の身としてはあまり、

目立つようなことはしたくはない。

まあ、同じ凶手の花京……じゃない、

有栖院はかなり目立ってはいるが。

「本当の理由言わなきゃ取材は受けないよ」

「あうう……分かったわよ……」

蜂谷さんはそういうと、一呼吸置いてから

本当の理由を述べた。

「あんたが寂しそうに見えるからよ……」

「寂しそう？ボクが？」

「そう。あんたいつも一人だし友達いなさそうだし

喋る相手いなさそうだし……だから、あんたの

たった一人の友達であるアタシがあんたのことを

他の人に知らせて、友達を作らせてあげたいのよ」

この言葉を意外だとボクは思った。  
蜂谷さんには悪いがボクと彼女との仲はそれほど  
深くはないと思っていたし、  
ボクに対してそんなことを思ってくれていたなんて  
初めて知った。  
流石に彼女の気持ちを無下にしてしまうのは  
人間としてはまずいと思う。  
だから、

「……わかった。そこまで言うなら、取材  
受けるよ」とボクは答えた。

それから2日後。

ボクは2人の女子生徒を前にしていた。

1人は蜂谷さん。

そしてもう1人が、同じクラスの女子、

加賀美さんだった。

「いや〜まさか多々良さんが取材を了承して  
くれるなんて、私としてもびつくりだよ」

本当に驚いた様子で加賀美さんがまくし立てる。

「クラス内だとなんとというか、『近づくなオーラ』を  
出してるから取材も断られるかな、って  
思ってたんだけど」

「まあ、心境の変化ってことで」

「えーと、じゃあ私から質問がいくつか」

そう言いながら懐からメモ帳を取り出す加賀美さん。  
ブン屋としてはかなり優秀な人材だと、直感的に

ボクは感じた。

「何故白雪さんはそんなに厚着をしてるんですか？」

「そりゃ、顔を見られるのが恥ずかしいに

決まってるから」

「は、恥ずかしい？」

「そう。恥ずかしい。ボクって恥ずかしがり屋

だからあまりこう顔を見せたくないんだよね。

例えるならそう……加賀美さん、貴女

赤の他人の前で裸見せられます？

見せられませんよね。ボクが言ってるのも

似たようなことなんですよ」

「へ、へえー……」

それからいくつかの質問を経て、ようやく最後の質問となった。

加賀美さんが眼鏡をかけ直しながらボクに尋ねる。

「どうして、今まで大きな大会に出場しなかったのに

今回の選抜戦に出ることにしたんですか？」

仕事だから……とは口が裂けても言えない。

だからこう答えることにした。

「今回の選抜戦は基本生徒全員が参加という形で、

ボクは普段暇だし、授業を免除してもらえるなら

やろうかなと思って参加してみたいんです。

それと少しだけ、自分の力量も確かめてみたかった。

……まあ、まさか無敗でここまで来られるなんて

思ってたなかったんですけどね」

顔で苦笑を浮かべながらボクはなんとなく違和感を覚えていた。

なんというか、もつと別の理由を言っていないような、  
そしてそれが一番の理由だと思えるような。

(あれ、何を言っていないんだ?)

別に言わなきゃいけないという訳でもないが、  
言わなきゃ言わないで腑に落ちない。

と、その理由が天啓の如くボクの脳裏に浮かぶ。

ああ、と理解すると同時に加賀美さん達に  
対して口を開いていた。

「あとは、……これが一番の理由なんですけどね。

好きな人が七星剣武祭に出るんです」

「出るって……それはもう確定で?」

「まあ、ほぼ確定じゃないかな?」

ボクはね、その人が大好きなんですよ。

鋭い目つき、常場戦場の心意気。

それでいて優しいその姿に、ボクは惚れたんです。  
だからこそ決めたんです。

その人と同じ場所に行きたいって。

そして、どちらが上かそこで決めようって」  
それからボクはつらつらとその人<sup>姉様</sup>について

丸々60分喋り続けた。

その間の記者二人の様子はよく覚えていない。  
ただ。

「あ、あのー。……申し訳ないんだけど

カメラの電池が切れちゃった……」

「にやはは……もうちよい聞きたかったんだけどね。残念だなー」  
その顔はかなり強張っていた。

後日、蜂谷さんから「取材の件だが倉敷蔵人と黒鉄一輝の盤外試合の一件でお流れになった」と言われ、謝られた。

「別に謝らなくてもいいよ。こつちとしても

楽しかったし。また今度あったらお願い」

「い、いやいや。こちらこそよろしく……あはは」

心なしか、その笑いはひどく凍てついたものに聞こえた。

と、ボクの電話の着信の通知音が鳴った。

呼び出し人の名前は、「平賀 冷泉」。

蜂谷さんに断ってから部屋を出たところで電話に出る。

『ああこれはこれは白雪さん。』

ずいぶんとご無沙汰しておりましたよ』

どこか人を小馬鹿にしたような、男の声が

電話口から聞こえてきた。

「……別に」

まだ声でしか知らないがこの平賀という男、なんとなくだが「先生」と似た感じがする。

「用件は？」

『実はですねえ、そろそろメンバーの顔合わせを

したいと思ひまして。場所と日時は追って連絡

しますから、ちゃんと来て下さいね。ウフフ』

「……分かってるよ」

電話を切りながら、ボクは近いうちに姉様に

会えることに心を躍らせながら部屋に戻るのだった。

## 招集：その1

週末の東京。ボクは駅でとある人を待っていた。

ホームに電車が止まり、自動ドアが開く。

そこからわらわらと出てくる人混みの中で、

ボクと同じく防寒具を夏に近い季節だというのに  
身体中に纏った少女の姿をボクは見逃さなかった。

そう、ボクの姉……多々良 幽衣の姿を。

「姉様」

「ギッ……!?くそッ、白雪エ……テメエ

待ってやがったな!?」

「もちろん。姉様と一緒に行きたかったからね」

にっこりと笑うボクを忌々しそうに見ながらも

姉様はボクの隣に来てくれた。

「ねえ、姉様。その……腕組んでもいいかな?」

「……勝手にしろ」

ボクは姉様と腕を組んで駅を出る。

ああ、なんと幸せなのだろう。

姉様と二人きりで街中を歩くことがこれほどまでに  
幸せに感じるだなんて……。

ボクは暫しの間天にも昇るような思いを

味わうのであった。

東京郊外。

ボクと姉様が所属している「暁学園」の建物は  
山をいくつか超えたところにあった。

ボク達はそこまで行くのに途中でヘリを使用し、

暁学園まで移動した。

「にしても、だ。クライアントは何考えてんだ？

へりなんざ使わなくても、陸路で行けんじゃ

ねエか陸路だよオ」

へりはクライアントである人物が用意したものだ。

その点に関してはボクも同意見。

目立つような移動方法を使用するなんて本当に

何考えてるんだと言わざるを得ない。

「へりに『風祭』ってあったね、そういえば」

「『十二使徒』かよ用意したのは？？」

十二使徒の一人、風祭がこの案件に噛んでいると

なると相当重要な依頼なのだろう。

そう思うとボクは気が引きしまった。

「緊張するね、姉様」

「アア？アタイはプロだから緊張なんてしねーっての」

「……姉様、かつこいいです」

さて、気が引きしまった状態のままへりは暁学園  
へと到着した。

ボクは姉様の他にもどんな手練れがいるのかと  
胸を膨らませながら地面に降りたへりから

第一歩を――――、

「はーっはっはっはっはっは！！う？よくぞここまで来たな

『白銀の狙撃者』に『不転』よ！

我が真名は常人には解せぬ故、ここでは



風祭凜奈とでも名乗っておこう!!?」

危うく踏み外しかけた。

なんだ、白銀シルバースノウの狙撃者って。

そんな二つ名持ってないぞ、ボク。

恐らく、目の前にいるライオンとメイドを

従えたあの小さな少女がボク達の仲間なのだろう。

にしてもだ。

……少々イタいのはどうにかならないのだろうか？

「そして隣にいるのが我が右腕、シャルロットだ」

「シャルロット・コルデーです。」

以後、お見知りおきを」

そして、隣にいる長身のメイド。

ボクは彼女を見るなり、思わず彼女の元へと

歩き出していた。

そして、コルデーの前に立つと。

「……よろしく、コルデーさん。」

ボクの名前は多々良 白雪。

お互い、似た者同士仲良くしていこう」

「……!!?ええ、こちらこそ」

熱い握手を交わした。

「? シャル?何かあったのか?」

その様子に凜奈は当惑し、

「ああ……類は友を呼ぶ、かよ……」

何故か姉様は顔を抑えていた。

「既に皆様お集まりしております。」

どうぞこちらへ」

「うむ、その通りだ。既に我ら《暁》の戦士は

揃っておる。貴様らが最後だ」

既に皆揃っているのならば、ここで立ち話を

している訳にもいかない。

「姉様、早く行こう」

「分かってるっての」

バリバリと後頭部を搔きながら姉様が歩き出す。

ボクもそれに続いて歩き始めた。

「あ、雛祭も来るんでしょ」

「風祭だっ!!?」

……あ、この人意外とイジリがいがあるわ。

あとで色々といじってやろう。

「よおーこそ、白雪さん、幽衣さん!!?」

ボクが今まで暁の連絡役を担当していた

平賀です。いやあ、会えて嬉しいですよ、フッフ」

「……どうも」

「……ギギ、白雪イ。テメエもしかしてだけど

苦手かそいつ?」

平賀と握手しているボクに姉様がそつと囁く。

無論、苦手だ。だって……。

「何処か『先生』と似た感じがする」

「……ハン、そうか」

おまけに、平賀だけではない。

暁メンバーの一人、紫乃宮 天音からも同じ感じが

するのだ。もう嫌で嫌で仕方ない。

唯一の救いは同志シャルロットとイジリがいの

ありそうな風祭がいることだ。

「ま、イカれた野郎の一人や二人ぐらい、

この世界じゃいたっておかしくはねエ。

我慢しろ」

「うん、我慢する。夏祭とかコルデーもいるし」

「……夏祭じゃなくて雛祭りやねエのか？」

「夏祭でも雛祭でもなくて、我の名は

風祭だーッ!!？」

「お嬢様、落ち着いて下さい。ジョークですよ、きつと」

やっぱりイジリがいのある人物だ、風祭。

「皆様、クライアントが到着しましたので、

こちらへ集まって下さい」

遠くから平賀の声が聞こえた。

クライアントは誰なのだろうか？

とりあえずボク等がやるべきことはただ一つ。

クライアントが望む結果を出すことだ。

「ギギギ……行くぞ、白雪イ」

「分かったよ、姉様」

ボクは姉様の声に応じ、共に暗い闇の奥へと歩き出すのだった。

まるで、ボク達の住む世界を表すような

昏い闇の奥へ。

## 招集：その2

「皆、今回は招集に応じてくれてありがとう。」

私が今回の依頼主こと、月影だ」

そう、優しい声でボク達暁のメンバーに話しかけた

男が、今回の依頼主、月影 漢牙。

日本国の総理大臣だ。

まさか国のトップが依頼をしてくるとは……よほどの  
目的なのだろうか？

ただ、ボクや姉様は凶手。

個人の思う事には深入りはしない。

その他のメンバーも彼の目的には興味はないらしく、  
月影に問うようなことはしなかった。

「今回の依頼にあたって、遵守してもらいたい  
ことがある。……誰も殺すな」

殺すな？まさか、聞き間違いか？

彼は殺し屋であるボク達に向かって「誰も殺すな」  
と、そう言ったのか？だとしたらそれは……。

「ツギツけんじやねエぞこの野郎!!？」

ヴオオオンツ!!?という音と共に、月影の目の前に  
あった木製のテーブルが両断された。

姉様の固有<sup>デバイス</sup>霊装「地擦り蜈蚣」による  
仕業だ。

「殺すなだア？誰に依頼してると思ってんだ。」

アア？アタイ等はなア、殺し屋なんだよ!!?

その所分かって依頼してんだろうなアツ!!?」

額に青筋を立てながら姉様はまくし立てる。

姉様にはプロの殺し屋としての想いがあるから  
こういうことが大嫌いなのだ。

ボクは姉様の所……《<sup>アップグレード</sup>黒い家》に

所属する前の所ではなんでも行っていたから

そういうことにはあまり抵抗はないのだが。

「……喧しいぞ、餓鬼。少し黙っている」

「アアツ!?」

そんな時、姉様の隣にいた和装の男……黒鉄王馬が姉様を制した。

「デメエ、やるってんなら今(こ)こで」

ブオンツ!!?という音と鋭く空気の斬れる感触と共に姉様の円筒帽子の角が落ちた。

王馬の手には霊装である野太刀が握られている。

「ツ、く……。クソがツ!!」

敵わないと悟り、姉様は霊装をしまった。

王馬の実力はこのメンバーの中ではトップだ。

おそらくボクと姉様の二人がかりでどうにか

互角に渡り合えるといったところだろう。

姉様の判断は間違っではない。

「……その白い餓鬼。少し付き合え」

「……え」

月影の話の途中で、姉様を制した王馬はボクを部屋の外へと連れ出した。

「さて、単刀直入に聞くが……貴様、あの時何をした?」

「あ、あの時って？」

「とぼけるな」と鋭い眼光で王馬はボクを見下ろす。

「あの時オレはあの餓鬼を殺す気で

刀を振るった。だが、結果は帽子の角を斬り落としただけ……。

メンバーの中で貴様だけがあの餓鬼と関係がある。だから聞いたんだ。……あの時、何をした、と」  
「どうやら、バレていたらしい。」

これから先、少なからずとも付き合う仲だ。能力程度は教えてあげてもいいだろう。」

「……参ったな。こればかりは教えたくは無かったんだけど。うん、そう。ボクがやった。」

君の刀の軌道を曲げたのはボクだ」

「曲げた……だど？」

訝しげな声を上げる王馬。

まあ仕方ないだろう。ボク的能力は非常に珍しいのだから。」

「概念干渉系《湾曲》。それこそがボク能力さ」

単純ながらこれは非常に多様な応用が利く。

弾道だって自在に曲げて狙いたいところに当てられるし、相手の攻撃だってさつきみたい曲げて強制的に外させることも出来る。

果ては光の反射を曲げて姿を消す芸当も可能だ。

「フン、小細工か。くだらん」

だがしかし、王馬はそれを一笑に付しボクの元から去っていった。

彼の力量ならばボク能力の応用程度分かるはず。それでも尚あの反応だったということは……。

「恐ろしいなあ。あいつ」

思わず、そんな思いが口を突いて出たのであった。

それから数分後。

ボクは姉様と風祭、コルデーと共に話をしていた。

「フハハハハ!!? 先程はよくも散々愚弄してくれたな

白の死神よ!!?」

「さっきと二つ名が違うんだが」

姉様のツツコミにも動じる事なく、風祭は

片目の眼帯に手をかけた。

「我が黄昏の魔眼を今、解放して……」

「どれどれ」

「ちよ、勝手に触れるな！我が黄昏の魔眼に!!?」

ボクは風祭の眼帯を掴んで、限界まで

引き延ばす。

それと共に風祭の顔色が青ざめていく。

「そ、それ以上はよせ……そんなところで

離されたら……目がマズイことに」

「離すって、こう?」と、ボクは眼帯を離した。

ボクの手を離れた眼帯は一直線に、

風祭の、

黄昏の魔眼へと向かって。

バチイイイインツ!!?

「ちよトアアアアアアアアアアアアアアアア!!!

イイツ→タイ←メガアアア→!!?」

同時刻、《連盟》日本支部。

昼間だというのに薄暗い印象を受ける建物。  
その駐車場で、二人の人間が話していた。

「んっふっふ。これで外堀は完全に、  
埋めることが出来ましたよお。」

ありがとうございます、《<sup>ベルゼブブ</sup>蟲使い》さん」

ひらひらと、写真を手に持ち笑う男が一人。  
それを冷ややかに見つめる男が一人。

「……フン。礼を言うなら学園に潜伏している  
仲間に言え。私はそれを渡したただけだ」

写真を持つのは樽のような肥満体の恵比寿顔の男。  
そしてもう一人はガスマスクに黒のコートという  
奇抜な格好をした痩躯の男。

「この仕事を終えたら貴様とおさらばか。  
なんとも寂しいな」

「こちらこそ、貴方がたには色々お世話に  
なりましたよお。いやあ、寂しいですなあ」  
その声色からは寂しいと思っっているような  
気持ちには微塵も感じない。

むしろ、喜んでるように聞こえる。

「それでは、私は用事がありますので」

「赤座」と痩躯の男は引き止めた。

「毎回くだいようだが伝えておこう……。」



失敗すれば……。

我々が、全力を以てお前を消す」

そうしなければ、自分達の情報が流出し、裏の仕事を受け持つ彼らにとぼっちりがくることになる。

「んっふっふ。分かってますよお」

そう言いながら赤座は黒塗りの乗用車に乗って、去ってゆく。

その後ろ姿を瘦躯の男は、ガスマスクの奥から鷹のような眼光で見送るのだった。

## 叱咤

メンバーの顔合わせから数日。

あれからボクは様々な情報を得た。

暁メンバーの一人、紫乃宮の能力《未来予知》により有栖院が裏切るという事態が発生することが分かったという事。

有栖院は裏切る瞬間まで泳がせておくという事。

その他メンバーの能力、身体能力、性格。

ボクにとって必要な情報はある程度得ることが出来た。

しかし、今のボクにはまだその情報を活用する機会はない。

その前にボクは選抜選手に選ばれなければならぬのだから。

そして今日、ボクは17連勝を記録した。

「白雪!!? あんたやるじゃない!!?」

ルームメイトの蜂谷が飛び上がりながら

まるで自分のことのように喜ぶ。

「まあ、運が良かっただけだよ。

それよりボクお腹空いちやった。何か食べに行こう」

「じゃあ17連勝を記念して、あたしが奢るよ」

「そうなの?じゃあ、お言葉に甘えて」

食堂のメニューの中で、高いとも安いとも言えない

カツカレーを注文して、ボクと蜂谷さんは

互いに向き合ってテーブル席に着いた。

「あんた未だに固有<sup>デバイス</sup>霊装なしで

「やってるんだって？」

「そ、徒手空拳でやってる」

「いい加減に固有<sup>デバイス</sup>霊装<sup>あり</sup>で

やったらどうなのよ？」

「いや、考えたんだけどね？ いかんせんねえ……

狭すぎるんだよ。フィールドがさ」

直径約100mもある選抜戦のフィールド。

だがボクにとつては100m「しか」ないのだ。

狙撃銃という固有<sup>デバイス</sup>霊装<sup>の特性上</sup>、

少なくとも500m程の広さが欲しい。

後障害物とか。

「狭すぎるって……あんたは何の固有<sup>デバイス</sup>霊装

なのよ？ 鋼線か何か？」

「教えない」

「教えなさいよ〜も〜。ケチー」

そんなこんなでギヤアギヤアボク達が

騒ぎあっていると、隣の席に誰か座る気配が

あつた。

見るとそこには、ファイアブロントの髪と

端正な顔をした少女がイライラした様子で

座っていた。

「……誰かと思えば、ステラさんじゃないか。

何をそうカリカリしてるの？」

「カリカリもするわよ」とステラは僅かな燐光を

辺りに放ちながら言った。

「……イツキが、連盟の日本支部に連れて

かれたんだもの……」

ステラが言うには、一輝と日本支部の局長は

親子関係ながらもほぼ絶縁状態。

おまけに親の方は一輝に魔導騎士の道を

歩ませたくないらしく、今までに

何度も邪魔をしてきたのだそうだ。  
前理事長と結託して彼を留年させ、  
学生を嚇けて彼をとことん負傷させ孤立させ、  
今回はステラと一輝の関係を利用して  
スキャンダルだのなんだのと騒ぎ立てる始末。  
挙句の果てに彼に対して査問を行う為に  
連盟の日本支部が監禁紛いの行為を  
行ってきたらしい。

「今回もその連中の仕業だと?」

「ええ、間違いないわ。この間の新聞に  
載っていたイツキのことだけど……」

「新聞見てないし、テレビも見てない」

「……まあ、いいわ。とにかく、

新聞やテレビで取り上げられたイツキの情報は  
でっち上げ。あいつらはなんとしてもイツキを  
引きずり落とす気なのよ。この魔導騎士の  
世界から」

話を聞いていた蜂谷さんが、震える声で  
ようやくといったように呟いた。

「……なんて、なんて理不尽なの」

そう、理不尽。彼は、黒鉄一輝は何も  
悪いことなどしてはいないのに、周りは  
彼を害す。これ以上ない理不尽だ。

だけどそれは「……」。

「確かに理不尽だけど、しょうがないね」

「ツ!?!?」

「な、あんた何言つて……」

驚いて声も出ない二人。

甘いんだよなあ。その気持ちは分かるけどさ。

「ボク達は魔導騎士……正確にはその卵だけど。  
魔導騎士が魔導騎士たる所以はなんだと思う、

蜂谷さん？」

「自らの運命を切り開き、力なき者を

守る……かな？」

「そう。魔導騎士は自らの運命を切り開き、  
霊装という“形”に変えて闘う人間だ。

イツキ君だってその一人。

彼だってそのことは分かっているはずだ。

今回の件で彼が騎士の道を閉ざされるような

ことになったとしても、それは同情に値しない。

所詮はその程度の人間だったって

事なんだよ」

運命に吞まれたという事は即ち、その人間には

魔導騎士になる資格などないという事だから。

「だからボクは彼のことは心配しない。

……大体ステラさん、彼はノコノコと連盟支部に

向かった訳じゃないと思うんだよ」

「なんでよ!!？イツキはアタシの為に連れてかれた!!？

アタシがイツキの足枷になってるのよ!!？

こんな大切な時期に、アタシが……!!？

こんな苦しい思いをイツキにさせるんだったら、

別れた方が……!!？」

刹那、ブチツという弾力のあるものが切れる音を

蜂谷は聞いた。

「なーにバカな事のたまつてんだこのガキがアツ!!？」

一輝にはなあ、査問に応じないって手も

あつたんだよ!!？おまけにそっちの方が苦しい思いを

しねーで済む!!？なのに、だ!!？なんで彼は

その選択肢捨てて苦しい方選んだと思う？

……ステラ、お前が中傷の的にされた事が

許せなかつたんだよ。

二人の関係をこんなゲスい思惑で穢された事が、

それだけ腹に据えかねたって事だ。

そんなことでさえ理解出来ないんだったら、  
今すぐに別れちまえ!!?」

普段の白雪からは想像もつかない暴言を受け、  
ステラは大きく目を見開き、そして  
伏せた。

「…………ごめん、アタシが馬鹿だったわ」

「はぁッ…………もういい。蜂谷さん、

悪いけどボクは先に帰るよ」

心底うんざりした様子で、白雪は席を立つ。

そのまま、すたすたと歩いていってしまった。

「あつ…………あの、ステラさんごめんね!?!?」

あの子普段はあんなこと言わないんだけど…………」

「大丈夫。おかげで踏ん切りがついたわ」

白雪の叱責のおかげで踏ん切りがついた。

『誰の前でも胸を張って好きだって言いたい』

自分の彼氏はかつて交わした言葉を

今まさに実践してくれている。

「アタシも、アタシの約束を守る」

それこそが、自分の出来る事だと思い、

ステラは決意を新たにしていたのだった。

## 最後の選抜戦

ようやく、ようやく最後の選抜戦の日が来た。最初はそれなりには楽しんでいたものの、8戦目辺りからは飽きを感じるようになり始め、退屈な気分を選抜戦の度に味わされるようになっていた。

しかし物事には必ず終わりというものがある。今日の選抜戦に勝ってしまえばもうこんな飽き飽きした気分を味わうこともなくなる。そう思うと何故か変な気分になってしまうのだが、何故だろうか？とボクは選抜戦の会場で疑問に思っていた。

「白雪、いつもの調子で頑張っていけば大丈夫だから!!？落ち着いていきなよ！」

「……うん。まずガクガクしてる足を止めてからそのセリフを言ってよ。こっちが落ち着いてって言いたくなる」

地面掘れるんじゃないかと錯覚するぐらい削岩機みたいに足ガクガクしてる。蜂谷さん緊張し過ぎだから。

そもそも試合するのはボクだから。

「あ、ああごめん……なんかあたしの方が緊張しちゃって……でも、あんたが勝つって、あたし信じてるから！」

「まあ、勝ってくるよ。いつもみたいに、ステゴロで、さ」

ボクがそう言うと同時に、選手入場を促すアナウンスが流れた。

もうすぐ、始まるらしい。さてと、行こうか。

七星の頂への切符、それを手に入れる為に。

『さあー先程はステラ選手、開始3秒という

選抜戦始まって以来の最速の記録を

叩き出しましたが……。

しかししかし!!?それまで選抜戦最速KO記録を保持していた人間を我々は忘れられません!!?

1戦目の竜崎選手から19戦目、葉暮牡丹選手までを悉く拳一つでKOしてきた《白兔》こと

多々良白雪選手が今、七星の頂への切符を

賭けて、リングへと上がりましたアアアアアツ!!?』

その実況の言葉と共に、今までと同じように

白雪はいつものあの姿でリングの中央へと

歩みを進めた。

『対するは昨年度校内序列6位!!?』

“伸縮”の概念干渉能力を使用した棒術で

相手を近付けることなく倒してきた、

3年、速雨 玲選手です!!?』

歓声が上がリ、白雪が出てきた反対側の

コートから、長髪をなびかせ少女が出てきた。

『白雪選手にとっては竜崎選手以来の

難敵ですが、はてさて速雨選手が先輩としての

威厳を見せつけるのか!!?』

それとも白雪選手が七星の切符を

手に入れるのでしょうかアツ!!?』



伏せがちだった顔を上げて、白雪は目の前の速雨を見た。

今までの選手は能力のみにかまけた強さだったが、この少女は違う。能力と技術、両方が揃っている。

「少しは、張り合いがあるかな?」

そう、白雪は挑発した。

口元に笑みを浮かべて、楽しげに。

速雨は顔にかかった髪をかきあげて、同じように、笑った。

「だといいわね。あなたにそこまでの力があれば、だけど」

そう、速雨が言うと同時に、試合開始の宣言が、成された。

『『Let's Go Ahead!!?』』

試合開始と同時に動いたのは、速雨だった。  
デバイス  
霊装《如意棒》を構えて白雪へと

真つ直ぐに向き直り打突を離れた位置から放つ。

《如意棒》はその名の如く大きく伸び、白雪の喉元を狙う。

「ッ!!?」

間一髪で首を曲げて回避すると白雪は速雨へと近づこうとする。

だがしかし、一步踏み出した途端、

足元を薙ぎ払われて転倒した。

『あぁつと!!?白雪選手、手も足も出さず転倒!!?』

速雨選手にチャンスが到来したアアアアツ!!?』

速雨はこの隙を逃さない。

白雪へと思い切り棒を振り下ろした。

「ちっ」

頭への一撃をなんとか回避すると、白雪は

今度は距離を置く。

否、置かざるを得なかった。

速雨は白雪を更に遠くへと追いやろうと

棒を操り、合間合間に急所を狙う打突を

放つ。

『白雪選手、どんどんとリングの際へと

追い詰められていくウ!!?』

速雨選手、完全に試合の流れを掴みましたア!!?』

(押されている?ボクが?)

白雪は伸びる棒の払いや打突を避けながら、

そう思った。

確かに、攻撃範囲の広い速雨に対して退がるのは

愚策中の愚策。

何の抵抗も出来ず、リングアウトか打ちのめされて

KOにされるのがオチだ。

だが、それは……。

(違うんだよなあ……攻める気が起きないんだよ)

並の伐刀者、それも近距離の霊装を持つ者のみに

限られた話!!?』

「あーあ、最後まで残った奴だから、

少しは骨があると思っただけだなあ……」

「……？」

白雪は、そう心からため息を吐くと、  
右手に自らの霊装を……、

この選抜戦始まって以来始めて、顕現した。

「だけどもあ、最後だからボクも少しは

本気でやらなきゃいけないよね？」

……頼むから、すぐにやられないでね？」

そう言いながら、白雪は顕現した狙撃銃の霊装……

《銀雪》の銃口を右手だけで持ち上げて

速雨へと向ける。

刹那、速雨の背筋をまるでムカデが這いずるような

悪寒が走った。

原因は、数十m先の白雪から放たれる……

異様なまでの殺気。

(何……？！？…なんなのこの殺気は？！？)

一瞬、速雨は怯えた。

今までに感じた事もなく、また向けられた事も

ないおぞましいまでの殺意に。

故に、白雪の先制攻撃に、速雨は対応出来なかった。

「穿て、《銀雪》」

その言葉と、激しい炸裂音と共に速雨は

左肩に大きな喪失感を覚える。

見るや、肩から先、左腕が《如意棒》を

掴んだままの状態で千切れていた。

「~~~~~ッ!!？」

激しい痛みと鮮血が肩から噴き出すと同時に

速雨はそれを抑え、

次弾を撃たれる前に白雪へと右手一本で

打突を放つ。

なんとしても彼女に撃たせてはならない。

そう速雨の本能が訴えているのだ。

しかし、その打突はあっさり避けられ、逆に今度は右腕を中程から穿たれる。

「ぐうううッ!!?」

ガラン、という音と共に《如意棒》が地面に落ちた。

それを見て、審判は続行不可能と判断し、両手で×の印を作った。

『試合終了オオオオッ!!?』

白雪選手、追い詰められたように見えたが逆に速雨選手を圧倒しました!!?

これで、白雪選手の七星剣武祭への出場が

確定しました!!?』

同時に、歓声と拍手がわき起こり、会場を包み込んだ。

「ほんと無様ね、私ったら」

両腕を失った速雨が自虐的に笑う。

「いや、速雨さん。貴女はボクが戦った中でも

一番強かった。また機会があれば是非

手合わせお願いします」

そう、白雪は速雨へ言ってから頭を下げた。

それから、彼女に背を向け、ある場所へと向かうのだった。

会場の外。

もう試合は行われる事はない為か人の姿は見えない。

……たった一人を除いて。

会場のドームの壁に寄りかかるガスマスクと  
黒のコートを纏う瘦躯の姿。  
ベルゼブブ  
蟲使いだ。

「……日本にいるとは聞いていたけど、  
こんな所にまで顔を出すなんてね」  
そんな彼に声をかけたのは、

「久しいな……《スノーホワイト》。」

いや……今の名前は多々良白雪とか言ったな？」  
白い長髪に青の瞳を持つ少女……。  
多々良白雪その人だった。

## 古巣からの勧誘

既に全ての試合が終了し誰もいなくなった  
第2ドーム。

そこに二人の影があつた。

1人は多々良白雪。そしてもう一人は《蟲使い》  
と呼ばれている男だった。

「いつもは東南アジアの辺りで仕事をしている  
あなたが、どうしてこんな所に？」

白雪の問いに、彼は答えることはなかった。  
代わりに、

「……その他人行儀な感じ、やめてくれないか？

昔みたいなのに、《ガウエイン兄さん》と呼んでくれ  
と言った。

「……もう昔のことさ。呼ぶ気はないよ」

「……そうか。まあお前も仕事でこんな所に

いるんだろうが……どうだ？この学校の生徒は  
白雪は、ふっと笑った。

そして壁にもたれかかるとその質問に答えた。

「はつきり言えば、弱い連中ばかりだよ。

でも……一人、強いのがいる。それも  
とびっきりのがね」

「……ほう？誰だ。そいつの名前は？」

「黒鉄 一輝……と言えば分かるかな？」

その言葉に《蟲使い》は腕を組んで、

「《雷切》と試合を今している奴か。  
お前が言う程だ。相当に強いのだろう？」

と言った。

「ああ。そうだよ」

「……つと。忘れていた。白雪。

お前、戻る気はないか？私達の所に」

「忘れていただなんてよく言うよ。」

そつちが本命だろうに」

《蟲使い》……否、ガウエインは白雪の前に立つと、いかに自分達の組織に戻った方が

良いかを並べ連ねた。

「いいか？《アツプグルント黒い家》は我々の組織とは違つて報酬が少ない。

それに、だ。お前が戻ってきて欲しいと思つている連中が何人かいるんだ。

今なら、お前が慕つている姉とやらも我々の組織に迎え入れてもいい。

どうだ、戻つてくる気はないのか？」  
更に、ガウエインは報酬の金額……

決して安いとは言えない額を……

提示し、白雪に戻るかどうかを考えるように言つた。

確かに、悪い条件ではない。

むしろ、良い条件と言えるだろう。

だが……。

「残念だけど、戻る気はないよ」

白雪は断つた。

何故ならば「……」。

「アツプグルント姉様は黒い家の殺し屋としての

プライドがあるから絶対にあなた達の組織には来ない。そして姉様がいかないのならばボクもあなた達の組織に戻ることはない。

ただ、それだけ」

白雪にとつて姉は生きる目的であり

慕うべき存在であり共にいたいと願う存在であり全てを姉という存在が支配している。

故に彼女は姉がどうするかを想定して答えを

出したのだ。

「……そうか。まあ心変わりという言葉もある。いずれまた会った時に、返事を聞こう」

「いつ来ても、ボクの答えは変わらない。」

姉様が考えを改めない限り」

それだけの問答を終えると、ガウエインは

白雪に背を向けて去っていった。

「そのいずれが、すぐ訪れる事を祈っているよ」

去り際に不穏な言葉を残して。

寮に戻ってくると、中で蜂谷がクラツカーを  
用意して待っていた。

「おめでとーっ!!??やったじゃない白雪!!?」

今夜はあれよ、パーティー!!?パーティーしよう!!?」

「そんな大げさな……」

苦笑しながらも蜂谷の差し出したお菓子……

「ジャパリパリグミ」とか「紅魔の里」とか

いったお菓子をもらいながら白雪はまんざらでも

なさそうな様子だった。

「とりあえずボクはいける所まで頑張ろう」

「駄目よ!!?せっかくなんだから、優勝目指して

ファイトしなさいよ!!?」

「……そうだね、というかファイトしろって

どういう事?命令形になってるじゃないか」

白雪には、もし決勝まで進めたら望む事が

一つだけある。

彼女の姉、多々良 幽衣とどちらが上か



決勝の舞台で決着をつけたい。  
ただ望む事はそれだけ。

白雪にとつて姉は自分の全てなのだから。  
その思いを胸に秘め、白雪は蜂谷と  
乾杯をするのだった。

その頃、都内の寂れたビルの一角にて。

「♪」

何者かが……恐らくは男だろう……が  
楽しそうに、誰かを待っていた。

「遅れたな。申し訳ない、ブルーノ」

「ヒヤヒヤ。いいって事サ」

《蟲使い》ガウエインを。

ガウエインは闇の中相手の姿を確認した。  
タキシードに蝶ネクタイ。

黒のシルクハットを被り、顔をすっぽりと  
覆う仮面をつけている。

「相も変わらずふぎけた格好だな」

「言うネエ。君だつて変な格好じゃないカ？」

「俺のことはどうでもいい。白雪のことだ」

ヘラヘラと楽しそうに、ブルーノは笑つて、  
ガウエインの話を聞いていた。

「あいつ、我々の組織に戻ることを拒んだよ。  
なんでも、姉は我々の組織に入る事はない  
だろうかららしい」

「へエ……。どうでもいいけどサ、

今日お客さんが来たんだヨ」

そう言いながら、ブルーノはガウエインに向かって何かを放り投げた。

ごろん、と床に転がったそれは、人間の頭部。

ガウエインは知っていた。

この頭の持ち主は《連盟》日本支部の連中の一人だと。

「フン……赤座め、私達を亡き者にする気

だったか。だがしかし、弱すぎたな」

「ちよつとー。倒したのボクなんですけどオ？」

「ああ、悪かったな」

「まあ楽しかったから良かったんですけどネー。

アハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ!!？」

そんなブルーノにガウエインは、

「いずれまた楽しめる機会を作ってやる」と

言った。

「どうせ、そのいずれはすぐに訪れるんでショ？」

「ハッ。バレてたか」

そして、ガウエインは外の夜景を見つめ、

握り拳を作ったのだった。

「待っていて下さい、先生」。

後少しの辛抱です……!!？」

姉様と!!?」

選抜戦が終わって数日。

ボクは姉様の住んでいる貪狼学園の寮に入り浸っていた。

「白雪、テメエなあ……」

「? 何、姉様?」

「いい加減に自分のいるべき場所に戻れよ」

それを聞くと白雪ははっ、と声を出して笑うと、

「ボクにとつてのいるべき場所は、姉様の

いるところだよ? だから今ここがボクの

いるべき場所」と言い放った。

「ええ……」

幽衣の方はというと、なんとしても妹を

どこかにやりたかったので、譲歩を

引き出す事にした。

「じゃあ、代わりにテメエの要望を出来る範囲で

聞いてやるから、それで手打ちにしよう」

「本当!? じゃあね、じゃあね……」

幽衣の提案に嬉しそうに口端を歪めて悩む白雪。

どうせ彼女のことだ、簡単な事だろう。

幽衣はそう白雪を見ながらほくそ笑み、

「じゃあ姉様の生パンツハスハスしたい」

「却下ツ!!?」

次の瞬間大慌てせざるを得なくなった。

「冗談だつてば、冗談」

「テメエが言うど冗談に聞こえねえよ!!?」

「もー、姉様ったら可愛いんだから」

そう言いながら白雪は軽くえいえい、と

幽衣を小突いた。

「怒った?」

「怒ってねえよ」

それはそうと、と白雪は幽衣に提案を返した。

「姉様に何かして欲しいって言ったら……」

「そうだね、 “アレ” がいい」

「アレ？」

「そう、アレ」

白雪は不思議そうな顔をしている幽衣を見ながら、くすくすと笑うのだった。

翌日。

二人はショッピングモールにいた。

うきうきした様子の白雪とは正反対に、

幽衣は眉をひそめていた。

「おい……まさかだが、テメエもしかして」

「そのもしかして。服買いに来たんだ。」

姉様とボクでお揃いの」

幽衣の手を取り、白雪は微笑む。

天使のような悪魔の笑顔を見ながら

幽衣はため息をついた。

服屋にて。

「うーん……このワンピースも捨てがたいなあ。」

でも……やっぱこっちの方がいいや」

青系統の色のワンピースと白のパーカーを

交互に見比べ、時折幽衣の方を見ながら  
白雪は熟考していた。

「早くしてくれよ……。もう何分になる？  
アタイにも色々やる事があるんだが」

「だーめ。服つてのは時間かかるものだよ？」

「このぐらいでへばらないで」

「こういう時の白雪は誰が何と言おうと

てこでも意地を曲げない。

何より、彼女の顔は真剣に集中したもので  
ものを言うのが憚られるのだ。

その顔を少しだけ美しいと感じた自分がいる

事実、幽衣は思わず舌打ちした。

(クソ……。なんでこんな事感じたんだアタイは？)

「……。よし、これでいい。姉様、待たせて

ごめんね。あと試着だけしたら終わりだから」

白雪が真剣な表情を緩めてにへらと笑う。

幽衣は持たされていたホットパンツを白雪の頭に  
載せると、「さっさと行くぞ」と白雪を促した。

試着室の前に来て、唐突に幽衣は白雪の方へと  
向き直った。

「一応言っとくけど、アタイが着替えてる

途中で試着室の中に入ってくるなよ？」

「絶対に？」

「絶対に、絶対に!!？入ってくんじゃねエぞ!!？」

幽衣はそう言いながら白雪の選んだ

服を両手に持ち試着室に入ってしまった。

「絶対だからな!!？」

入る直前にも白雪に注意して。

幽衣は入った後も白雪の気配を探っていたが、やがてその気配が遠ざかっていくのに安堵して、いつも着ている防寒着を脱ぎ始める。コートを脱ぐと、華奢な手足が現れる。

「白雪の野郎、何考えてんだか……」

「呼んだ？」

「ツ!?」

振り向くと、白雪が試着室の仕切りから顔を覗かせていた。

「テメエ人の話聞いてたのかア!?」

覗くなって言ったよなアタイ!!」

「いやでも言うじゃない。」

押すな押すなは押せの合図だって」

「いやそういう事を思ってた訳じゃねえよ!!」  
すまなそうな顔をして白雪は、

「あ……ごめん」と謝った。

買い物を終えて、

二人は駅前まで来ていた。

幽衣の姿はというと、白雪の要望から服屋にて買った服を着ていた。

「つたく。夕方まで付き合わせやがって。

これで、少しの間離れるんだな？」

「うん……ちよつと寂しいけど、そうする」  
しゅんとした様子でおれる白雪。

その様子がおかしくて、思わず幽衣は白雪の額をデコピンするイタズラをした。

パチン、という快音。

「痛っ!??・何するの姉様!!?」

「ギギギ、テメエの顔見てたらなんとなく  
いじめたくなつてな。こんぐらいガマンしろ」

むー、と頬を膨らませた白雪は姉に向かつて  
デコピンの仕返しをした。だがそれは、

「《トータルリフレクト完全反射》」

幽衣のノウブアルアーツ伐刀絶技に防がれる。

「ずるいつ!!?」

「ギギギ!!?・やれるもんならやってみな白雪ィ!!?」  
刹那、幽衣の頬に手が添えられると、

白雪の唇が幽衣の唇に重なった。

「……………ツツツ!!?」

その事態に幽衣は流石というべきか、  
すぐに白雪を突き放した。

「な、何してんだよテメエ!!?」

「ふふっ、姉様がいじめるから……」

ボクもちよつと、姉様をいじめたくなつちやつた」

少女なのに妖艶な笑みを浮かべる白雪。

「……………でもしばらく会えないから、

これで手打ちね?今日はありがとう、姉様」

そういうと、白雪はじゃあね、と幽衣に

手を上げると、彼女の元から去っていった。

「……………ったく。何考えてんだか。あの馬鹿妹は」

幽衣は小さくなつていく白雪を見つめながら、  
薄くふつと微笑むのだった。

## 教師役

「……」目覚ましのアラームが鳴る。

その音に顔をしかめながら幽衣は起き上がった。

白雪が去ってから数日になる。

今日は《暁学園》としての行動を起こす前日だ。

それ故か、《暁学園》に集まるように昨日、

《道化師》平賀玲泉から連絡があった。

同時に既に白雪と《血塗れのダ・ウィンチ》

サラ・ブラッドリリーは到着しているとも。

(あいつ……《暁学園》に泊まっていたのかよ。

まあ、妥当な判断と言えるかもしれねエが)

自分もそろそろ行かなければ、と幽衣は

身支度を整え始めるのだった。

前回来た時とそう変わらない時間をかけて、

幽衣は解放軍リベリオンの車で

《暁学園》へと到着した。

「……よう。《血塗れのダ・ウィンチ》」

「……ん」

そこで彼女を待っていたのは、

《血塗れのダ・ウィンチ》ことサラ・ブラッドリリー

だった。

「お出迎えかア？(´▽`)苦労なこって」

その幽衣の言葉に、サラは「……違う」と返した。



「私がここに居るのは、約束を守る為」

「約束？何の約束だ？」

「あなたの妹に賭けで負けたから約束した。

あなたの絵を描かなきゃいけない」

「……テメエも、大変だな」

「……賭けに負けたから」

幽衣は同情するようにサラにさういとうと、

《暁学園》の中へと入っていく。

否、入ろうとした。

「多々良 幽衣とかいうのは、お前か？」

背後からの声に幽衣が振り向くと、

そこにはガスマスクを被った黒いコートの

男がいた。

そして、その奇抜な格好を幽衣は知っていた。

「テメエは……確か解放軍の……」

「ガウエインだ。」

正確には、解放軍が雇っている傭兵集団の

方に所属している」

「……ケツ、《KORT》の連中かよ」

KORT。

それは解放軍が生まれてから

中期にかけて戦争に利用した傭兵集団の名だ。

彼らは全員が全員《連盟》基準としては

Bランク以上の実力を持ち、

参加した悉くの戦争で組した国家に

勝利をもたらしたと言われている。

だがその栄光も、暗殺の需要が増え始めると

《黒い家》にその座を

追われる事になり、今や彼らが活躍する

機会は少なくなってしまう。

「そのKORTがなんでこんな

所にいやがるんだ？戦争屋のくせによオ」  
「戦争屋とは人聞きの悪い。」  
我々は今回この計画の「教師役」として  
呼ばれたんだ。だから、私に対して口に  
気をつけるんだな、お嬢さん」  
その言葉にイラツとしながらも、幽衣は  
《暁学園》の入り口へと今度こそ入って  
ゆくのだった。

一方その頃、白雪もKORTの人間と  
接触していた。

「久しぶりだアねエ白雪イ。  
何年ぶり？何年ぶりかネエ？」

4、5年？そんぐらいになるのかナア？」  
《奇術師》ことブルーノ。

ニタニタと目を細めながら白雪を睨め付ける。  
「ブルーノ兄さん、その癖変わらないね。」

ボクは毎回それが嫌だって言ってるのに  
あなたは聞きやしなかったね」

「ヒャー。そりゃア失礼失礼。  
でもサア、白雪が去ってからオレちゃん  
寂しかったんだぜ？」

演技たらしく泣く振りをしながら、  
ブルーノは白雪にそう言った。

「だから、戻って来て欲しいって？」

……嫌だね。ボクはKORTに  
戻る気はない」

姉以外、誰がなんと言おうと。

それだけは曲げる気はない。

そう、かつてガウエインの前で言ったように。

白雪はそう言い放った。

「……白雪イ。テメエそんな事考えてたのかよ」

ブルーノとは正反対の方向から白雪に

かけられた声。

その声に白雪は振り向いた。

「てつきり、KORTコルトに戻るって

思っちゃまった。悪い」

「姉様……!!？」

自分と瓜二つの姿。

白雪が愛して止まない存在、多々良 幽衣の

姿がそこにあつた。

「……にしても、変な格好してる奴だな」

「ありやまー。オメーが言うのかア？」

確かに真夏なのに防寒着を纏った少女と

よくあるマジシャンの格好をした仮面の男が

話しているのはかなり異様な光景であつた。

「ガウエインの奴から聞いたゼエ。

オメーのおかげで白雪がオレ達の所に

戻って来てくれないんだって？」

「そうなのか？」

「そうだよ」

白雪の言葉を聞いてブルーノが杖の

固有デバイス霊装を顕現する。

「だーかーらーよーオ？オメーをぶちのめせば

白雪を取り戻す事が出来るんじゃないやねエかなーって

オレちゃん思いついた訳ヨ」

杖の先端を幽衣へと向けながら、

「頭いいよなアオレちゃん。惚れ惚れしちゃう」

などと自画自賛しているブルーノ。

「馬鹿かテメエは？そんな事して白雪が

テメエらの所に戻る訳がねエよ」

幽衣はそうブルーノを嘲ると、睨みつけた。

「……でもよオ。アタイはテメエらの傲慢さが

気にいらねえ。……だからその馬鹿な

提案に乗ってやるよ」

そういうと幽衣は自らの固有霊装、

《地擦り蜈蚣》を顕現する。

「アタイら黒い家が上だつて事、

そのチンケな脳みそに叩き込んでやるよ」

「ヒヤハハハハハハハハハハハハハハハハ!!?」

馬鹿かオメーは!!?オレ達KORTが

最強だつて事を教えてやるヨオ!!?」

もはや衝突は免れないと思われた刹那。

「……教師役とあろう者が、何をやっている。

大馬鹿者が」

その怒声と共に、隻腕の老人が現れた。

解放軍の幹部の一人、

ヴァレンシユタインだ。

「ミスター……」。

オレちゃんの闘いに口出さないでよネエ」

「恥を知れ痴れ者が。」

そいつはこの計画に欠かせない人材だ。

貴様はこの計画をおじやんにする気か?」

ブルーノとヴァレンシユタインは睨み合つて

いたが、やがてブルーノが舌打ちして

自らの固有霊装をしまう。

「ちえっ。あーあーわかりましたよオ。

止めます止めます」

やれやれと肩をすくめてヴァレンシユタインの

傍を通り越してブルーノは去っていく。

「……全くあの男は。いつもあの調子だから扱いに困る。すまなかった。」

私の監督不足で嫌な目に遭わせたな」

「……ケツ。あの野郎にキツイの一発

食らわせたかったんだがなア」

そう言い放つてから幽衣は白雪の元へと歩き出す。

「姉様……ごめんなさい、ボクのせいで

迷惑かけて」

「いや、テメエは悪くねエよ。」

悪りいのは、さっきの野郎だ」

そう、幽衣は白雪に言い聞かせてから

ブルーノが去っていった方向を

睨み続けるのであった。

## 計画前夜

ブルーノと幽衣との間で諍いが起こってから  
数時間後。

《暁学園》の“生徒”は全員集合していた。  
彼らを前にして、ヴァレンシユタインは  
全員を見据えながら話を始めた。

「既にこの場にいる全員が知っているだろうが……

この計画に携わっている同士、有栖院が  
裏切るとの情報が入った」

そう言いながら、ヴァレンシユタインは  
とても残念そうに、口元を歪める。

事実、彼は未だに信じられなかった。

彼が育ててきた暗殺者の中でも、

有栖院は特に目をかけていた存在だからだ。

「飼犬に手を噛まれましたか……心中、

お察しします」

ガウエインが彼の顔を見て事情を理解したのか、  
哀れむようにヴァレンシユタインを労った。

「ですがまあ、紫乃宮君のお陰で

有栖院君の奇襲が必ず行われるという事が  
分かっているのですから、

我々もそれに合わせて奇襲を行えば良い」

そう言う《血塗れのダ・ウインチ》こと

サラと、《道化師》平賀玲泉に目をやり、

「例えば……そう、“木偶”を使ってみるのは？

サラさんと平賀君の能力ならば簡単な事でしょう」

「フッフ、木偶ですか。なるほど、ボクの

《地獄蜘蛛の糸》と、サラさんの

能力で偽物を作り、それで裏切り者の

有栖院君を騙すと……そういう訳ですね？」

その通り、とガウエインは平賀を指差して彼の答えに丸をつけた。

「……ところで、有栖院君はどうしましょうかね。その場で殺すのが一番いいのですが。」

どうしましょうか、ミスター・ヴァレンシユタイン」

「……奴の始末は私が付ける。」

生徒の不始末は教師であった私が

蹴りをつけないければならないからな」

ヴァレンシユタインはそう言うのと、

計画の手順について話し始める。

「さて、今回の作戦だが、標的は破軍学園。」

念のため教師を一人引率させたいのだが……

ガウエイン、貴様に頼めるか？」

「謹んでお受け致します。私の仲間ですが、

ブルーノには引率は任せられませんので」

その言葉に、奥で椅子に座りつまらなさそうに

していたブルーノがガウエインの方を見やり、

「酷い事言うネエ。オレちゃん傷付いちゃう」

と言った。

だがしかし、その言葉とは裏腹にケタケタと

ブルーノは笑っていた。

「というかサア、誰かオレちゃんと付き合ってよ。

暇で暇でしようがないやー」

その言葉に、なんと王馬がブルーノの方を

見やり、「オレが付き合ってやろう」と

言い放つ。

「おろ、いいのオ王馬ちゃん？」

やる前に大怪我したって知らないよオ？」

「単に肩慣らしがしたいだけだ……。」

それよりも自分の心配でもしたらどうだ？」

「ひよー、かつこいいネエ。

オレちゃんそういう人大好きよ?」

「……気色悪い事を抜かすな」

ブルーノは椅子から立ち上がると、

王馬を伴って外へと出て行つた。

「……あのバカ、身の程知らずにも程があるだろう」

「だが、仮にも教師役の人間。

そう簡単に死ぬほど弱い人材ではあるまい?」

「……まあ、確かに簡単に殺せる輩では

ありませんが」

ガウエインはそう言つてブルーノの背中と

王馬の背中を交互に見やり、ため息を

つくだのであつた。

計画の手順の確認も終えて、白雪と幽衣は

同じ部屋に泊まっていた。

「つたく……きつきつからオウマとブルーノの

野郎、ガンガンやっててうるせエなア!!?」

その幽衣の言葉と同時に、ズンツ!!?という

地ひびきが二人の身体を揺らした。

そう、ブルーノと王馬は先のやりとりから

3時間以上もの間殺し合いを続けているのだ。

おまけに彼女達のいる部屋は一番そこから

近いので、時折ブルーノの喧しい声が聞こえてくる。

『ちよッ……死ぬ死ぬ!!?』

死んじやう!!?そんなの食らつたらオレちゃん

死んじやうからアッー!!?』



「……本当、喧しくて寝られないね」

やれやれとばかりに白雪は肩を竦めて、  
幽衣に同意を示した。

「テメエも災難だな。切ったと思った

腐れ縁がこんなところで復活するなんて  
思ってたかっただろ」

「うん。もう会う事なんてないって、

そう思ってたんだけど。

やっぱ甘かったなあ、ボクは……」

幽衣は白雪のその様子を見てにへら、と笑うと  
「まあ今回の件、とつとと終わらせて

帰るぞ。アタイもあいつらとは長くは

付き合いたくねエ」と言った。

「……うん、そうだね。

ボクはそろそろ寝ようかな。

愛してるよ、姉様。おやすみ」

そう白雪は幽衣に告げて、寝室へと

向かっていった。

「ああ。……おやすみ、白雪」

幽衣は白雪の背中に、小さくそう呟いた。

## 計画決行

「……夜が、明けた。

それは計画の始まりを告げる合図でもあった。

《暁学園》の生徒の面々は教師役のガウエインが  
運転する車で破軍まで行く手はずとなっている。

「さて、と。皆乗ったか？」

「俺ちゃんがま「ブルーノ、貴様はダメだ」

「……ええ……そりゃあないでしょう？俺ちゃんが

いれば百人力……いや、千人力になるはずだよ？」

「……貴様の役割を忘れたのか？ブルーノ、これが  
最後の忠告だ。……付いてくるんじゃないぞ」

その言葉に心底がっかりした様子でブルーノは  
肩を落とし、とぼとぼと背を向けて去っていった。

「全く。奴を同行させたら何をしでかすか

分からないからな……」

その姿をガスマスクの奥から睨みながら、  
ガウエインがやれやれとばかりに呟いた。

「ギギッ……あいつも連れてつてもいいぜアタイは。

ま、どうなるか責任は持たねエけど」

その彼の様子を可笑しく感じたのか、幽衣が  
からかうような口調で野次を飛ばした。

「いや、いや。本当にそれは勘弁だ。

というか君も早く車に乗ってくれ。

計画に遅れを出す訳にはいかないからな」

ガウエインはそう言つて、速やかに車へと乗り込んだ。  
それに続いて幽衣も後部座席に座ろうと

ワゴンのドアを開ける。

が。

「……ここはもう満席」

「フッフ、タタラさん残念ながら後部座席は

「全て埋まっていますよ?」

「……」

後部座席にはサラ、玲泉、王馬が座っており満席の状態であった。

更には前の座席にも天音が座っていて座れない状況になっている。

「アハハ、ご愁傷様だね♪」

「……チツ、五月蠅エぞアマネエ!!?」

悪態を吐きながら仕方なく幽衣は後部座席の後ろにある荷物を載せるトランクに乗り込む為ワゴンの背後に回ってドアを開けた。

「やあ、姉様。今日はいいい日だね。」

天気はいい、体調も良い、席も同席と来た訳だし。

まあ何はともあれ早くこっちn」

ボタンツ!!?という音と共にコンマ数秒で

幽衣は開けたドアを閉めた。

そして大きく息を吐いて、

「……マジかよ……」と小さく呟いたのであった。

……幽衣達を乗せたワゴンが走り去ってゆく

その後ろ姿を、ブルーノは貼り付けたような笑顔で

浮かべながら《暁学園》の建物の屋上から眺めていた。

「へやハハハ。真面目<sup>ガウエイ</sup>クンは生徒を連れて

遠足に洒落込みましたかア。はてさて、

どうなるか見物デスネエ。そうは思いませんカ、

ミスター・ヴァレンシユタイン?」

「……最初会った時と変わらず、貴様は楽しむ事しか考えていないようだな、ブルーノよ」

《解放軍》<sup>リベリオン</sup>の法衣を風に靡かせながら

ヴァレンシユタインがわずかな不快感を示す。

「あら、ミスター？人生つてのは楽しまなきや  
損するものですよミスター？」

私、こう見えてもマジシャンですから、  
楽しい事には目がないんですよ」

そう言いながらブルーノは屋上の端、  
足を滑らせでもすれば15m下の地上に  
叩きつけられるであろう所に、

片足……しかも爪先立ちでクルクルと回り始める。

「ああ〜、なんと素晴らしい事でしよう!!？」

この計画に、どのようなでんぐり……じゃなかった、  
どんでん返しがあるのでしようか!!？」

しかし残念ながら、私《比翼》様の執事として  
ここに留まらないといけませんので見られません!!？」  
感情のおもむくまま、ブルーノは喋り続ける。

近くにヴァレンシユタインがいる事も、自身が  
危ない所に立っている事にも気づかない様子で。

その姿を見て、ヴァレンシユタインはかつての  
自分の弟子の一人の姿を想起した。

小さい子供ながら、その心は悪魔の如く  
狡猾で邪悪であった一人の伐刀者の姿を。

「……おや、ミスター。どうかしましたか？  
顔色が優れない様子ですが」

「……いや、なんでもない。とにかく、ブルーノ。  
貴様は自分に課せられた仕事にのみ専念しろ。

分かったな？」

それを聞いてブルーノは貼り付けたような笑顔のまま

「……ええ、ええ。しかと承知しました」と  
慇懃にぺこりと会釈した。

ヴァレンシユタインはその笑顔に目を向ける事なく、

踵を返して屋上から去っていく。  
一刻も早く、あの笑顔を忘れ去る為に。

「……キーキツ、という少しのブレーキ音と共にワゴンが破軍学園、その校門の前に停車する。」

「運転席からガウエインが降りるのを合図に《暁学園》の生徒達がワゴンから降り立つ。」

「ああ……死ぬかと思った……」  
「やけにげっそりとした様子の幽衣がぼそりと呟く。」

「百合百合してたもんねー、後ろで二人共」  
「天音の軽口にも反応する気力すらないようで、目の下の隈もいつもより濃く見える。」

「一方白雪の方はというと。」  
「あゝ、生き返るわあゝ」  
「何故か肌は艶々としていてこちらは気力が有り余っていた。」

「後ろで何をやってたかは知らないが、計画に支障をきたす様な真似はするなよ？」  
「……ああ、分かっているッての……。」

「アタイは殺し屋だ。きつちりと、仕事はこなす……」  
「ガウエインの問いに幽衣は息も絶え絶えになりながらも答える。」

「……本当に大丈夫か？」  
「ああ……大丈夫だ。強いて言うなら……。」

「姉様、大丈夫？具合が悪い様だったら

ボクがおんぶしようか？なんなら足蹴にでも」

「……こいつを出来るだけ、アタイから

離してくれ……」

ガウエインは幽衣に同情する様な視線を

一瞬だけ向けてから、

「……善処しよう」と答えた。

そして、《暁学園》の面々を見据えると、

「……さて、《暁学園》の生徒諸君。

《前夜祭》の幕開けだ」

計画の実行を、《破軍学園》の襲撃開始の合図を、

ここに宣言した。

## 大阪にて

……《暁学園》の面々が計画を開始した頃、  
神宮寺黒乃は大阪、武曲学園にいた。

《七星剣武祭》に関する事案を他の学園の校長と  
共に取り纏める為である。

だが、彼女は浮かない顔をしていた。

《七星剣武祭》の事案は全て円滑に  
纏まった、というのである。

「くーちゃん、どうしたのさ？」

なんか浮かない顔しちやってさ。

あ、もしかしてアレの日？」

「はしたないぞ、寧々」

ペシン、と軽く隣にいた寧々の頭を叩く。

寧々はわざとらしく「ぐわー、やられたー」と  
頭を抱えてうずくまった。

「私が気にしているのは赤座の一件だ……」

なんで私があのかのクソ野郎に関する事で頭を

悩ませなければいけないんだ？」

「……そうだねえ。ま、あの古狸が今まで

良い思いをしてきた分の“代償”を払わされたん  
だろうけどさ、黒坊の件のすぐ後でやられたのは

困ったものさね」

その言葉に黒乃は思わず頷いた。

選抜戦の一件の後、赤座は全てを失った。

地位も権力も……命すらも。

一輝が《雷切》に勝利してから数日後、

赤座はとある街の路地裏で死体で発見された。

その死体はその殆どを蛆や蠅に喰われ、原形を  
留めない状態であった。

赤座であると分かったのも死体の近くにあった

財布から発見された免許証からだった。  
故に警察も誰がどのように殺したか、いや  
どのようなにして死んだかすらも判断出来ずに  
「変死」として処理せざるを得なかった。

「おかげでマスコミに変な疑いを持たれた。

まあ、《侍局》の方も疑いを持たれていたがな」

「あっちの方が黒い噂は絶えないからねー。

因果応報だよ、ざまーみろだ」

「……私が気にしているのは赤座が

死んだ事じゃない。もっと別の事だ」

黒乃の言葉に寧々は不思議そうな顔をして

彼女の顔を見た。

「へえ。じゃあくーちゃんが気にしてる事って

一体何？」

「……まだこれは誰にも言っていない事だったが」

と黒乃は前置きしてから数日前、自身が見たものの  
事について話し始めた。

「黒鉄と《雷切》の試合が終わった後の事だ。

監視カメラの業者から電話があったと教師の  
一人から伝えられてな。

「……数台の校内の監視カメラが壊れたらしい、と」  
「監視カメラが数台？ たった一日で？」

「ああ。しかも、その壊れた原因も異常だった」  
教師からの伝言を受けて、黒乃はその現物を  
確認しに行った。自身の能力……

《時間操作》によって元の状態に戻す為だ。

「その壊れた監視カメラを見た時、一瞬だけ



本当に度肝を抜かれかけたよ」

そう言つて、黒乃は一拍置いて、そして再び口を開いた。

「……蟲だ」

「……蟲？」

「ああ、蟲だ。蟲が、羽虫も芋虫も毒虫も関係なく、狂つたように監視カメラに

纏わり付いていたんだ」

想像して寧々はうへつ、と声を出した。

「何それ、凄く気持ち悪いじゃん!?」

「ああ、おかげでその日夢に出てきたよ。

……いや、私が本当に戦慄したのは修復した映像を確認した時、*「奴」*が映っていた事だ。

……悪名高い傭兵集団《KORT》が一人、

《ベルゼブブ蟲使い》の姿がな」

「……ツ!!?」

その名を聞いて寧々が一瞬身を強張らせた。

《KORT》のメンバーは全員が全員、

正視の魔導騎士程度ならば軽く数十人を

屠れる程の強さを誇る。

寧々や黒乃も過去に《KORT》のメンバーと対峙した事がある。

その際二人以外にも《連盟》の騎士も数名いたもののそのメンバーに全員惨殺。

結果として寧々の師匠である《闘神》南郷寅次郎が彼を撤退させるまで二人が「足止め」をする

という形になったのであった。

そんな化け物の様な連中が破軍学園内にいたという事実で寧々は、

「……笑えねー冗談だぜ」

思わずそう口走っていた。

「私がそんな冗談を言う人間だと思うか？」

無論、黒乃はそういう人間ではない。

だが寧々が思わず冗談か？と聞いてしまう程に  
事態は悪かった。

「……恐らく《蟲使い》の目的は赤座の暗殺か

何かだったんだろう。だが……」

「それ以外にも目的がある、かもしれないねえ。

今日本にいるんだろう？ “あの男”がさ」

重々しい空気の中、黒乃は苦々しくその言葉に  
頷いた。

「《K O R T》が奴の解放の為に動く事は

充分あり得る話だ。だが奴がいるのは

造られてから誰一人として脱獄を許さなかった

死刑囚の伐刀者専用の刑務所……。

その上看守は7割が凄腕の伐刀者、

いくら《K O R T》のメンバーとはいえ、そう簡単には

脱獄させるのは無理だ」

「……でも、ウチらが殺りあったあの男。

アイツ並のが来たら流石に無理さね」

「そう簡単にあんなのがいてたまるか。

アレは間違いなく《魔人》の域に入るぞ」

事実、黒乃と寧々が戦ったそのメンバーは

《K O R T》の中では五指に入る実力者であった事が  
後に判明している。

「とりあえずは、《連盟》に報告すべきだあね。

もしも黒坊やステラ姫がそいつらと相対する事にな  
ったらどんな事になるか……」

と、その時であった。黒乃の携帯が鳴り出す。

黒乃が電話を繋げるやいなや教師の切羽詰まった  
声が携帯から漏れ出た。

『た、大変です校長!!? 校内に侵入者が……!』

その言葉だけで黒乃と寧々は血相を変えた。

「侵入者だと？ 一体誰で、何人いる!?？」

『私が確認しただけでも3名!!?』

その内1人はウチの生徒です!!?』

「な、……なんだとツ!?？」

そいつの名前は分かるか!!?』

『は、はい！特徴的な服装なので名前は

よく覚えています。名前は、多々……ぎやが!??』

教師の蛙の潰れた様な声と共にゴキツ、と

電話越しからでも聞こえる程大きな異音が響き、

続いてドサツ、と倒れる音が聞こえてきた。

「ツ!!?おい、大丈夫か!??返事をしろ!!?」

電話口からは教師の声は返ってこなかった。

ただその代わりに、

『……先程の男性ならば、私の足元で

眠りこけていますよ?』

別の嘲る様な返事が返ってきた。

「貴様……さては《KORT》のメンバーか!??」

『おっと。流石に一度校内に侵入すれば

分かりますか。……いかにも、私《KORT》の

メンバーの一人、《<sup>ベルゼブブ</sup>蟲使い》ガウエインと

申します。以後お見知り置きを』

電話の向こうで銃声や悲鳴が聞こえる。

どうやら生徒や教師が襲われているようだ。

その事に臍を噛みながら黒乃はガウエインを

問い詰める。

「貴様らの目的は何だ!??」

『簡単な事です。』

我々がここにいて、ということはいずれここに

戻ってくるであろう大事な大事な《七星剣武祭》の

メンバー達はどうなるのでしょうかねえ。ククク』

「……!!？」

ガウエイン達の目的は一輝達《七星剣武祭》の  
選抜メンバーであると分かった途端、

黒乃は駆け出していた。

最早一分一秒が惜しい。少しでも早く

破軍学園に戻らなければ。

寧々も後ろから慌てて追ってくる。

ガウエインはというと電話越しに

黒乃達の様子を見抜いたように、

『おやおや……忙しそうですね。』

ならば私もお暇させて頂きましょう』と

言い放ち、通話を終了した。

だが、既に黒乃はガウエインが何を

言っているのかは余りにも急いでいて

気づく事すらなかったのであった。

## 《KORT》始動

肉を裂き、切り刻む感触が幽衣の手に  
伝わる。

それと同時に自らの霊装、《地擦り百足》で  
背後から斬り裂いた男子生徒がうつ伏せに  
倒れ込む。

「……ケツ、肩慣らしにもなりやしねエ」  
プツ、と唾を吐いてから一言そう呟く。

《幻想形態》での殺傷であるため生徒や教師には  
誰一人として死者は出ていない。

ただそれが幽衣にとっては、

「こんなタルい仕事は初めてだ」と思わず  
吐き捨ててしまう程にフラストレーションを  
溜めさせていたのであった。

「まあそう言わず、《七星剣武祭》が始まれば、  
いくらでもその刃で切り刻む事が出来るんだから  
今は我慢したまえ」

幽衣にそう言ったのはガウエインである。

両方の拳にガントレット型の霊装《玉虫籠手》を  
顕現させている。

《玉虫》の名が示す通り、その霊装は  
玉虫色の金属で出来ており、  
色鮮やかな光を放っていた。

その輝きに眉をひそめながら幽衣が  
返事を返す。

「うるせえ。黙って仕事してろ」  
「愛想ないねえ」

と、ガウエインの耳元で声が響く。

声の主は白雪。《道化師》平賀玲泉が

《暁学園》の面々に託した《糸》からの

連絡であった。

『もしかして聞こえる?』

「ああ、聞こえるよ白雪。何かあったのか?」

『へえ、ちゃんと聞こえるんだね、これ。』

……あ、そうじゃない。遠くからバスが来てる。

多分破軍の面子だと思う』

「了解。屋上で待機してくれ」

そう言っただけで連絡を切ると、ガウエインは

自らにも託された糸を使用して他の面々にも

連絡を回すのであった。

……その頃、《暁学園》内。

その一室で世界最強の伐刀者、

《比翼》エーデルワイスは目を閉じて瞑想していた。

彼女は別に日本に用事があつて来た訳ではない。

自らの家に帰る為の中継地として訪れただけであり

後数時間もしたら日本を去る。

……否。正確には去る、はず”であった。

「……気分はどうだ?《比翼》よ」

扉を開けてヴァレンシュタインが入ってくる。

《剣聖》と呼ばれた彼であつてもこの事態に

気付く事は未だ出来ていない。

いや、気付けたとしてもこの事態は止めることは

出来ないだろう。

既に事態は止められない所まできているのだから。

……しかしそうだとしても、この事態を

そのままにしておく訳にはいかない。

故にエーデルワイスは、ヴァレンシユタインに話すことにした。

「……すごぶる好調です。ですが、恐らく

この後この国は大きく揺れる事になるでしょう」「  
「だろうな。この計画を考えた者も

それを狙って……」

「いえ、この計画の事ではありません。

《K O R T》によって、この国は大きく  
動揺するでしょう」

その言葉にヴァレンシユタインはピクリと  
反応した。

「《K O R T》が、だと？あの中がどうやって

この国を脅かすと言うのだ？」

エーデルワイスは天井を見上げ、物憂げな  
表情でその答えを言った。

「……《K O R T》創始者、《神代の魔術師》

アンブローズ・エムリスの解放によって、です」

「……！……！！？」

その名を聞いて、ヴァレンシユタインは  
思わず言葉を失った。

アンブローズ・エムリス。

その名は伐刀者の世界では二つの意味で  
知られている。

一つは伐刀者の魔力や魔術に関する学問、  
《魔術学》において革新的な発見をし、

「彼が生まれていなければ伐刀者の歴史は

50年遅れていた」とすら評される程の天才。  
そしてもう一つは、……世界最強の傭兵集団と  
名高い《K O R T》の創始者としてである。

二つのうち後者の意味は余り知られておらず、  
したがって今日この名前を伐刀者に聞いてみると

大体が「あー、そんな名前の人がいたっけ」といった薄い反応を返される。

だがしかし、後者の方の彼は裏の世界では今なお大きな勢力の一つである。

《KORT》を従え、世界各地に熱心な支持者を持ち、そして裏の世界で最大の勢力を誇り

《解放軍<sup>リベリオン</sup>》の創始者である伐刀者、

《盟主》と関わりを持つ。

故に《盟主》の死した後は彼が裏の世界を牛耳るであろうと言われていた。

……だがしかしそれは数年前までの話。

今現在彼は秘密裏に反《解放軍<sup>リベリオン</sup>》を

掲げる《連盟》に捕縛され、刑務所に囚われている。

《KORT》のメンバーはその彼を解放しようとしているのだ。

「馬鹿なことを……!!? 《解放軍<sup>リベリオン</sup>》に

反抗する気か!!? 今すぐにでも止めに……!!?」

「それは最早無理でしょう」とエーデルワイスは

その言葉を斬って捨てた。

「既に《KORT》はエムリスの解放の為に

動いています。正確に言うならば、今頃は

エムリスの囚われている刑務所を

襲撃している頃です」

「何? 誰が向かったのだ? ガウエインか!!?」

その言葉に首肯して、エーデルワイスは先程

自らが感じ取った気配の主を答えた。

「いえ。貴方の他にいた《狂笑<sup>メフェイス</sup>》ブルーノ。

彼の気配が先程消えました。

恐らく、計画の遂行の為に動いたと思います」

「ツ……!!? 痴れ者が、だから私はああいった

手合いが大嫌いなのだ!!?」



「それだけではありません」とエーデルワイスは  
ヴァレンシユタインに向かって、  
彼女はこう言った。

ブルーノやガウエインの他にも《KORT》の  
メンバーがこの近くに潜んでいた、と。

「私を感じ取れた限りで2……いえ、

3名がここから移動していくのが分かりました。

先程言った《狂笑》ブルーノの他に、

《悪食》アマイモンランスロット、

そして《群雲》レギオンアグロヴァル。

恐らく十中八九、エムリスの解放は

成功するでしょう」

その言葉に、今度こそヴァレンシユタインは

声一つ出すことも出来ず、顔を蒼白に変えたので

あった。

—————日本、 ■■■ 県 ●● 山頂。

そこには人知れず刑務所が存在した。

死刑囚の伐刀者専用の収容所、

4階建ての中に約200名の死刑囚を収容している

この建物は、いつもは閑静と佇んでいる。

……そう、いつもならの話だ。

今この建物の中は。

「ぐ、あああああああアツ!!?」

「ひっ、がッ……死にたくねえ……

死にた……ぐべあ!?!?」

「何やってんだ!!? 他の階にも早く連絡回せ!!?」  
怒号と狂乱が支配し、死体があちこちに転がる  
地獄と化していた。

「時計のはーりがチクタクタック鳴れば、  
鳩がホー、と鳴いて戸を開けるー」  
その中を陽気に歌を歌いながらゆつくりと  
歩く男が一人。

目と口以外を覆う白いのっぺりとしたマスクを  
被り、黒の燕尾服にこれまた黒のシルクハットの  
奇妙な出で立ち。

「てっぺんさして、真下をさして、  
あちらこちらをチクタクチクタク、  
少しも休まず針は周る」

《メフェイスト狂笑》ブルーノの姿である。  
いつものように貼り付けたような笑顔を  
浮かべ、ゆらり、ゆらりと血に染まった廊下を  
歩いている。

と、看守の連絡を受けて上の階から降りてきた  
数名の伐刀者が剣や弓の霊装を顕現した  
状態で降りてきた。

「上の階からは囚人を収容しているエリアだ!!?  
絶対にここから先は通すなア!!?」

「止まれエ!!? 止まらんと撃つぞ!!?」  
廊下の横いっばいに並び、遠距離武器の霊装を  
構えながらブルーノへ向けて警告した。  
だが、

「皆様!!? 私はしががない奇術師でございませす!!?  
奇術師ですから、ここで一つ皆様を  
驚かせる手品でも行ってみせませす!!?」  
そう言つてブルーノは両腕をバツ、と広げ、  
それから恭しく一礼をした。

「不肖ブルーノ、これから行うのは  
簡単なマジックでございます!!？」

皆様にはお手数をおかけしますが、  
何か手頃なものをお貸し頂けますでしょうか!!？」  
尚もブルーノは前進し続ける。

看守達とブルーノとの距離、約20m。

「くっ……どうせハッターだ!!？」

それにこの人数なら怖がる事はねえ、

やっちなえ!!？」

それは誰の言葉であつただろう。

その言葉を皮切りに、一斉に殺意の込められた  
魔弾と矢が放たれた。

その数実に15発。

普通の人間ならば、全身を撃ち抜かれて  
死ぬはず。

だが彼らは見誤っていた。

自分達の目の前にいるのが、世界屈指の

強さを誇る傭兵団、《K O R T》の一人だと……!!？」

「《縋<sup>マ</sup>り付<sup>ン</sup>く駄<sup>モ</sup>々<sup>ト</sup>子<sup>ニ</sup>》」

その言葉と共に、ブルーノに向かって放たれた

15発全ての魔弾と矢が中空で

停止した。

「……は？」

その呆れたような理解できていないような

反応が看守達の中から湧き出す。

一方ブルーノは、

「どうでしょうか?皆様、お楽しみに

なられたでしょうか?」と言って看守達の方へ

耳を傾け、それからその口端を一層

吊り上げて一言。

「それでは、このマジックに使う為に

皆様にお貸ししてもらいましたもの……  
全……お返……しますよ」

そう言つて、ブルーノは右手の親指と中指を  
引っかけて、高らかにぱちん、と鳴らした。

刹那、その中空で留まっていた全ての  
弾丸と矢が呆然としていた看守達に

一気呵成に襲いかかったのであった。

## とある少女の追憶

「……私と彼女、多々良白雪との

出会いは、多少変わってはいいたが

普通と言えるものだった。

ただ、最初に会った時にもう意気投合している  
という訳ではなかった。

学寮の何もない部屋の中、もう春だというのに  
異様な程に防寒着を着込んだ少女を見て、

最初に私が思った事は、

「これからこの子と上手くやっていけるのか」と  
いう心配だった。

西洋人形のような端正な顔立ちでありながら、

その顔には何の感情も読み取ることが出来ない。

初めて話しかけた時も、彼女からは

「そう」や「はあ」などといった気のない

返事しかもらう事が出来なかった。

その時は本気で部屋替えを申し出ようかと

悩んだが、少しの間彼女の様子を見て、

それから決めようと判断した。

彼女と同じ部屋でいようと決意したきっかけは

それからほんの数日後のことだった。

その日私は、中学の時の友達から一緒に毎年

通っていたコミケの「戦利品」……同人誌とか……を

郵送で受け取った。

ただの同人誌なら別に問題はなかったのだけど、

友人が送ってきたのはよりにもよって

R-18指定の百合物。

百年の恋も冷めるL.Vの代物を送ってきたのである。

中学の時から若干ながら「そっち」側の人間なのは

知ってはいたが、流石に私もそっちの人間、  
という訳ではない。

その後私は用事があつたので、少しの間  
寮を離れていた。

その時とんでもないミスを犯していた事を  
知らずに。

端的に言うと、そのR―18指定待った無しの  
同人誌を寮のテーブルの上に置いたままに  
してしまったのである。

寮には彼女白雪がいるというのに。

その事に私が気づいたのは寮を出て2時間程  
経った頃だった。

私は慌てて寮へと戻った。

あんな物見られたらどんな誤解を招くか  
分からない。

なんとしてもその事態だけは回避しなければ。

そう思いながら、私は自分の寮部屋の扉を開けて、  
目の前の光景に目を剥いた。

部屋にあるテーブル。

そこに腰を下ろして彼女が……白雪が

そのテーブルに置いてあつたであろう  
同人誌を読んでいたのである。

だけど、彼女の様子がいつもと違っていた。

彼女の真っ白な肌は少し紅潮し、

蒼い瞳はまるで宝石のようにキラキラと  
輝いて、僅かながら荒い息を吐いていた。

「……あの……白雪さん？」

私が声をかけると、白雪はビクツ、と  
体を震わせて、私の方を向いた。

その顔はいつもと変わらないように見えた  
けど、僅かな焦りが出ているように思えた。

「っ……えと、あの、その……」

彼女は俯きながら顔を先程より赤くして  
もじもじし始めた。

……あれ、と私は思い当たった。

さっきの白雪の様子って、まさか。

そう思い、私はその「まさか」を確かめる  
事にした。

「えーと、その本なんだけどね」

白雪がこちらへと顔を上げる。

「……面白かった？あたしの友達を送って

きた物なんだけどさ」

「……いや、それほどでもなかったよ」

「そう？じゃあこれ捨ててもいいわよね？」

「……え」

ほんの少しだけ彼女の目が驚愕に

見開かれる。

「いや、あたしそっちの趣味はないからさ。

友達には悪いけど、捨てようと思うのよね」

そう言いながら私は彼女の元へと近寄って、  
手を差し伸べた。

「だからさ、貸してくれないかなその本。

あ、それとも……まだ読みたい？」

その言葉に白雪は再びピクリと体を震わせる。

その見開かれた目には逡巡の色が濃く見え、  
ひどく迷っているように見えた。

……やがて、彼女は絞り出すような声で、

「……やだ。まだ読みたい」と言った。

やはり、彼女は「アレ」か。

私は確信を持って、彼女にこう言った。

「あのね、白雪さん。

もしかして……あなた同性愛者？」

その言葉に、今度は白雪は迷う事なく首肯した。

「……あ、あたしは別にそういう事は気にしないからさ。その本も欲しいならあげるよ」

「……本当に？いいの？」

私が笑いながら好きにしていよいよ、と言うと、私につられたのだろうか、彼女も少しだけ微笑んだ。

その笑顔を見て、私はこの子となら上手くやっていけるかもな、と漠然と感じた。

「ねえ、白雪さん。今度どこか

遊びにでもいかない？」

「構わないよ。……それと、白雪さん、って言うのはやめてほしい。

なんかこそばゆいからさ」

そう言っ、彼女は再び本を読み始めた。

うん、彼女は感情が表に出にくいだけでそんなに変ではない。

「姉妹でのシチュだったらもつと良かったんだけどな」  
「……変ではない、と思う。」

だけど。



どうして。

彼女はこんな事をしたの。

なんで先生や他の人達を撃つたの。  
分からない。何故こんな事を。

私は屋上の地面に横たわったまま、

狙撃銃の霊装を持っている白雪を見上げた。

「なん、で……。白雪……？」

《幻想形態》で腹を穿たれたらしく、

血は出ていないが酷い鈍痛が走っている。

白雪は、意外そうに私を見下ろして、

「へえ……《幻想形態》でも気を失わないなんて

思ったよりタフだね」と言った。

その様子はいつもと僅かに違う。

生き生きしていると言った方がいいか。

白雪は再び銃を私へと向けた。

今度は頭に。

「今度はちゃんとやるからさ」

そう言っつて、彼女は笑った。

まるで、たわいもない悪戯を

咎められた少女のように、屈託のない

笑顔を。

夕日に照らされながら。

「ごめんね？・蜂谷さん」

刹那、頭部に走った衝撃を最後に、

私は何も分からなくなった……。

## 高らかに讃頌せよ

……ぼたり、と血が滴り落ちる。

静寂の中、コツ、コツと規則正しい  
硬質な音が響く。

人知れず存在していた刑務所。

その中はもう地獄ではなかった。

ただの、屍が入っている大きな箱と化していた。

看守も、受刑者も関係なく。

だが、屍のみが存在している訳ではない。

刑務所を歩いているブルーノがその中の  
一人であった。

床や壁に夥しい返り血が飛び散っているのにも

関わらず、何故かその身には血の一滴も

付いてはいない。

……やがて、彼は刑務所の最奥、

史上最悪の犯罪者、その一人であり

ブルーノが所属する《K O R T》の首魁、

アンブローズ・エムリスを収容している

小さな牢の元へと辿り着いた。

その牢は彼を収容するにあたって

並の伐刀者では破壊することは出来ない

厚さ1 m余りの特殊金属の扉で閉ざされ、

南京錠などの古いタイプから最新のものでは

30桁の番号を入力するデジタルロックまで

5重の護りが仕掛けられていた。

その牢を見てブルーノは、

「……小虫一匹も入れる気は無さそうですネエ」

といつも通り、笑顔を貼り付けた状態で

言い放った。

だが、彼の目的はこの牢の中にいる

エムリスを解放することにある。

故に。

「《穢<sup>ブラッディ・アリアンナ</sup>れた清らかなる糸》」

彼は自らの霊装を顕現する。

「さあ、紡ぎましよう……。」

《不<sup>ア</sup>実<sup>ラー</sup>の機織<sup>ニエ</sup>り》!!?」

そして、自らの手で霊装の糸を手繰り、引き、絡めて、何かを紡ぎ出してゆく。

こう言うと時間がかかっているように聞こえるがしかし、彼がそれを全て編み出すのには5秒とかからなかった。

目視すら難しい程細い糸で彼が紡いだのは、長く薄い両刃の剣である。

しかも糸で編んだのにも関わらず、それは実物の剣と遜色ない出来映えであった。

ブルーノはその剣を片手に持ち、特殊金属で作られた扉にその切っ先を突き刺した。

音もなく、すつ、と切っ先は扉にその剣の根元まで差し込まれる。

剣を器用に扱いながら、ブルーノは人一人が余裕で通れる位の円を描いた。

そして、剣を解いてあるべき形に戻しながら扉から数歩離れる。

と、ブルーノが円を描いた内側の部分はずつ、と押し出される。

そのまま綺麗な切れ口を露出させながらずらず、と押し出された扉の一部分は地響きを立てながら外へと転がった。

そして。

「まったく。《鋼線使い》なのに

剣の扱いが達人なものですね、ブルーノ君」

呆れに近い賞賛と共に、

閉じ込められていた者が、

《神代の魔術師》、アンブローズ・エムリスが

扉に開けられた穴をくぐって姿を

現した。

彼の見た目は案外若かった。

見る人によつては20代後半と判じる人も

いるかもしれない。

刑務所に收容されていたというのに

その格好は白衣にシャツ、下は

黒のスーツパンツとまるで研究者の

出で立ちであった。

しかも温和そうな顔立ちに銀のフレームの

眼鏡と、それが更に研究者……というか

若い教師感をどこことなく醸し出している。

エムリスはショートの茶髪を直しながら

「ブルーノ君。外の状態を見る限り、非常に

無差別に暴れ回ったようですね。

はつきり言つてやりすぎです。問題の解決には

多少の犠牲は必要ですが、しかし

過剰な殺戮はかえつて問題を

ややこしくしますよ」とブルーノを

叱責した。

「ドクター……ああ、申し訳ありません」

エムリスははあ、とため息を吐いて

「《KORT》もやはり、時代遅れの

存在となつてしまったのでしようかね」と

呟いた。

「……なあ……」





その場に屹立していた。

2 mをゆうに越しながらも瘦せぎすの彼が  
屹立しているその姿は、立ち枯れた木を  
想起させる。

その顔は絞首刑を執行される人間が被るような  
黒い布袋ですつぱりと覆われ、

服装は上半身は何も着ず、下半身は

インドの僧の服装……いわゆる袈裟を  
着ていた。

「……」

彼は喋る事もなく、ただ自らの

主人を捕らえようとする者を防ぐ為に  
待っていた。

限界までその気配を殺し、事前に

相手に察知される事のないようにして。

ふと、彼の肩に小鳥が止まる。

だが彼は顔を向けることもしない。

それが害意を持たぬ事を知っているから。

小鳥もそれが分かっているのだろう、

彼の肩から離れようとしなかった。

だが……飾り気のない害意が、

無邪気な殺意が彼の背後から放たれた。

故に、小鳥は彼の肩から羽ばたいていく。

ざわり、と木々が騒ぐ。

彼はその殺意に萎縮することもなく、

ゆらりと背後を振り返った。

「おつかれ様ア、ランスロットちゃん。

立ちんぼで大変だったろうに」

殺意の発信源はブルーノであった。

その後からエムリスが姿を見せる。

「ランスロット君。久しぶりですね。

何年ぶりでしょうか？7、いや8年ぶり  
ですかね。変わらない様子で安心しました」

「……」

ランスロットはエムリスの言葉に

返事を返す事はなかったが、その身から  
発散されている雰囲気からはエムリスに  
対する害意は見当たらなかった。

「さて、こんな山奥で長居はしてられません。  
私にはまだまだやるべき事が残っています。

……行きましようか。《暁学園》に。

久しぶりに愛弟子の顔も見たいですしねえ」  
そういうとエムリスは歩き出した。

自らのやるべき事を行う為に。

《KORT》という災厄を引き連れて……。



悲観せよ、己が運命を

「はああああああああ!!?」

その頃、破軍学園では、黒鉄一輝を筆頭とする  
選抜メンバーの面々が、《暁学園》の裏切り者  
有栖院の協力を得て、他の《暁学園》の面々を  
霊装で打ち倒していた。

……正確に言えば、《暁学園》の面々を模した  
“人形”を、だ。

「……簡単に引つかかるなんて馬鹿だねあいつら」

「まあその方が楽で良い。先に有栖院の始末だ」

破軍学園の屋上、そこで《蟲使い》ガウエインと  
《白き死神》多々良白雪は彼らを見下ろしていた。

姉の幽衣を含む他の《暁学園》の面々は

メンバーの一人、サラの能力で姿を隠して

一輝達の近くに潜んでいる。

「……OK。狙いは心臓?脳天?延髄?」

それとも……全て?」

「どれでも良い。ただし、確実に仕留めろ」

白雪はゆつくりと頷いてから己が霊装、《銀雪》を  
顕現させると、その銃口を有栖院へと向けた。

有栖院の裏切りによって《暁学園》を打ち倒す事が  
出来た破軍の生徒達は安堵していた。

「ふう……後ろからやられたらどうなるかと  
思ったの」

「何はともあれ、これで彼らの目的は潰えました。

七星剣武祭に邪魔が入る事もないでしょう」

「それを聞いて安心したわ。ね、一輝。

……一輝？どうしたの？」

そう、ただ一人、黒鉄一輝その人を除いて。

(おかしい)

一輝がそう思ったのは有栖院の協力によつて

自らの兄、王馬を斬つた時である。

(僕の知っている王馬兄さんなら……)

こんな簡単に倒されるはずがない)

自らの前に倒れている王馬を見下ろしながら、

一輝はその違和感を感じていた。

だがそれだけではない。

(それに……危険は排除した。

暁学園の生徒は倒した。そのはずなのに、

……先程から重圧感が変わっていない)

何か嫌な予感がする。

その違和感を伝えようと一輝が口を開いた刹那。

「……………有栖院の心臓が撃ち抜かれた。

「……………は？」

それは誰の言葉だったであろう。

有栖院自身か、はたまた他の誰かの声か。

だがそれは重要な事ではなかった。

何故なら、直後に有栖院の総身を弾雨が

襲いかかり、貫き、抉つたからである。

「かつ……………あ」

有栖院は僅かな呻きを上げ、その場に

倒れ込む。

突然の事に誰もが黙り込んだ。

「アリスツ!!?」

その中で一人だけ、一輝の横から珠雫が飛び出す。だが、今度こそ一輝は行動を間に合わせる事が出来た。

珠雫の襟首を掴んで、引き戻す。

一瞬の後、何も無い空虚から風圧と共に斬撃が降り落ち。

……《暁学園》の面々が再び姿を現した。

「なっ……!!?さつき倒したはずじゃ!!?」

「残念。先程貴方達が倒したのは我々の

『人形』です。我々から出た裏切り者有栖院の

行動を失敗させて、始末を……いや、この場では

殺しませんかね?まあとにかく、貴方達は

ものの見事に罠に引っかかってくれた訳ですよ

まるで愉しそうに、平賀が語る。

有栖院の裏切りは想定内であった事。

それは《暁学園》の一人、紫乃宮天音の

能力で分かった事を。

「……平賀。その裏切り者を本校へと

連れて行け。ここは私が引き受ける」

その背後から、2人の人間が降り立つ。

その内の一人の顔を、一輝達はよく知っていた。

「多々良さん……!!?」

「アア?呼んだか?」

その言葉に、姉の幽衣の方が反応する。

「いや姉様じゃなくてボクの方だから。

……改めて、こんにちは黒鉄君。

それとも……さようならというべきかな?」

マフラーの上からでも分かる程口端を上げ、

白雪は笑った。

それは、幽衣とガウエインを除く全員が

初めて見たー！ー！ー、  
嗜虐に満ちた笑みであった。

「……ッ、シラユキ、あんた……!!？」

その顔を見て、ステラの表情が忿怒に染まる。

白雪とは一輝との手合わせから

何回か能力の特訓を一緒に行った仲であり、

一概に浅い仲とは言えなかったから。

この裏切りは彼女にとっては到底許す事の

出来ないものだった。

その表情を見ても白雪は笑った顔を崩す事なく、

淡々とした様子でステラの瞳を真つ直ぐに

見つめていた。

「ああ、ステラさん。この事を知った時、

絶対にそんな顔すると思ってたよ。

君はどこまでもまっすぐだからね」

それを聞いて、ステラはギリッ、と歯を

食いしばった。

「……白雪、長話もほどほどにしろ。

時間を食う事程嫌な事はない」

ガウエインはそう白雪を窘めてから、

隣にいた平賀に素早く耳打ちした。

直後、平賀が素早く動く。

《幻想形態》での攻撃により気絶している

有栖院の元へと駆け寄ると抱き上げた。

「フフ、では後は頼みますよ。ガウエイン先生」

「言われるまでもない」

その僅かな問答を交わして、平賀は有栖院を

抱えたままその場から離脱した。

「ッ……待てッ!!？」

当然、一輝達が黙っている訳がない。

有栖院を取り戻す為に平賀へ突撃しようとし、

「……………《翠バズの烈風》ツ!!?」

ガウエインの伐刀絶技ノウブルアーツによって

その足を止められた。

彼らの前に、突如として大量の……それも大型のものばかりの……飛蝗がまるで暴風の如く

吹き荒れる。

だが、それも一瞬の事。

次の瞬間には、ステラの妃竜レイヴァアティンの罪剣から

放たれた高熱でその暴風圏に穴が開いた。

その穴から一輝が突入し、数瞬間の後に突破する。

「ツ!!?」

そこで彼が見たのは……目の前で自らの霊装を振りかぶる自らの兄、王馬の姿。

「……散れ」

「くっ!!?」

強襲の一撃。これに一輝は守勢に回らなければ死ぬと予感し、全力で守りの姿勢を取ろうとした。

「イツキ!!?」

だが王馬の一撃は、ステラに止められ、

一輝にかすり傷すら負わせる事はなかった。

「まずいわ!!?……いつらシズクを素通しにした!」

きつと行った先に罫があるんだわ!!?」

見ると、蟲の暴風圏をいつのまにか突破したのか、珠雫の姿が平賀の消えた方向に小さく見えた。

「一緒に行ってあげて!!?……ここはアタシが

なんとかするから!!?」

「……すまない、ステラ!!?」

一輝は一瞬躊躇したものの、ステラの

真剣な表情に押され、珠雫を追って戦線離脱した。

ステラはそれを見送ってから王馬へと目をやり、

「オウマ。ずっと視線を感じていたわ。

アタシと戦うのがお望みなんでしょう!!?」  
と  
言い放つ。

先刻戦った“人形”。あれは本物を完全に  
模倣したものだった。

ならばあの時の視線もまた、本物の感情を  
模倣したものでしょう。

それならば————。

「受けて立つわ!!?《風の剣帝》!!?」

ステラはそう宣言して、最愛の人に酷似した  
敵に向かって突貫していった……。

## 車内にて

某県北、川沿いにある県道。

そこを走る車の中で、エムリスは何者かと電話で話していた。

「……ええ。今回不運にも殺さざるを得なかった  
ブレイザー伐刀者の犯罪者235名と看守421名。

のべ656名の事後的処理は我々《KORT》にお任せ下さい。……駄目、ですか。

はい、そう思っても仕方のない事でしょう。なら別方向から支援させて頂きます。

……そう、支援です。そう例えば、金銭的支援とか口の堅い葬儀屋の斡旋などですかね」

恐らくは高い地位の人間とでも話をつけているのだろう。エムリスは真剣な表情で相手と会話していた。

「欧州のアスホール公国に葬儀会社がありまして、僕はその会長……シリヒップ・デンプマンと知り合いでしてね。彼に僕の名前を付けてこの事を伝えてくれれば問題なく葬儀を済ませてくれます。

……住所はアスホール公国のシモキタ。電話の番号は114—5148—1019です」

そうして、僅かな問答を交わしてから、エムリスは電話を切った。

それから、一息ついて車のシートに寄りかかる。「さて……この国は発展の進度が凄まじい。

僅か4年と5ヶ月収監されていた間に、このような地方にまで県道が作られている。

……成る程、アメリカ、中国に次ぐ経済大国と評価されるだけありますね」

「……ええ、全くその通りだ。ドクター」

それに反応したのは隣の運転席にいるブルーノ。  
ただその表情は、仮面越しからでも良く分かる程  
無機質で、つい最近まで浮かべていた笑顔が  
何処かに行ってしまったようだった。

「この国はかつての世界大戦で破壊された

都市機能を他の国よりいち早く回復させ、  
その後のアジアやアフリカでの紛争に伴う  
軍需によって発展してきた。

戦争によつてここまで発展出来たと言うべき  
でしょうね……」

「ブルーノ君……いつそんなにこの国について  
詳しくなつたのですか？」

「さあ？いつ調べたかは忘れましたよ、

僕は……いや俺か？それとも私？

……まあいいでしょう。

しかしまあ、この国の人間は少々呑気すぎる。

欧州で毎週のようにテロが起こり、  
紛争地域では地獄すら生温い事が  
起きているのに彼らの大半はそれを  
知ろうともしない。何故か？」

「そこまで言つてブルーノはごぎん、という  
異音と共に首を90°に曲げて、  
エムリスを見やった。

「自分には関係のない事だと思つて  
いるからですよドクター。  
自分にとつてどうでもいい。

一人や二人死んだとしても生活には何の  
影響もない。

そんな事を言っておきながら、いざ自らに  
関係のある事と分かると馬鹿みたいに  
なんとかかしろと声高に主張し、騒ぎ立てる!!？



僕は、そんな馬鹿を殺したくてたまらない。  
そしてここにはそんな馬鹿が沢山いる。  
なら……殺すしかねえよなあこれはアア!!?  
キキ、ギャハハハハハハハハハハ!!?」  
エムリスは彼の言葉に対して何も言わず、  
ただ彼の目を見つめていた。  
その表情は穏やかで、とてもブルーノが  
話している過激な内容を聞いて出すような  
表情ではなかった。

「この世は不平等だ!!? アンフェアだ!!?」  
才能のある人間は数多くいれどその力を  
他の人間の為に使う者はごく少数、  
後は自らの欲の為に使うだけ!!?  
ヒヒハハハハ……俺は違う。

俺は馬鹿にはならねえ、欲に溺れもしねえ……  
ただ不幸な人間を。……俺の力で  
喜ばせてやりたいだけだアアアアアアアツ!!?  
キヤキヤキヤキヤアアアアアアアツ!!?」  
言うなり、ブルーノはアクセルを限界まで  
踏み込んだ。

当然ながらエンジンは唸りを上げ、  
エムリス達の乗る車は暴走を開始した。  
幸運というべきか道路には現在エムリス達  
以外の車は走っておらず、ぶつかる心配は  
なさそうだった。

だがしかしこのまま暴走させる訳にはいかない。  
エムリスの行動は迅速であった。

「ランスロット!!? ブルーノ君を押さえつけて!!?」  
刹那、グワツとブルーノの背後から骨張った腕が  
飛び出し、ブルーノの首を絞め上げた。  
背後の席で狭そうに座っていたランスロットが

エムリスの指示を受けてブルーノを  
押さえつけたのだ。

「ギャハツ、ガガ……ガハハヒヤハハハハ!!？」  
尚もブルーノは笑うが、一瞬だけ足がアクセルから  
離れた。

そしてその一瞬をエムリスは見逃さなかった。  
素早く片足を突っ込み、ブレーキを思い切り  
踏みつける。

直後、キイイイイイツ!!?という甲高い  
擦過音と共に車は急停止した。

いつのまにか車は、市街地の手前の  
丁字路まで来ており、車が急停止したほんの  
1秒後、黒髪の少年と小柄な少女が乗った  
バイクが高速で通過していった。

もしあのまま暴走していたら、先程の  
少年達は車に轢かれて死んでいたであろう。

「……危ない所だった……また罪のない人間を  
殺す事になる所だった……」

「カツ……クカツ……」

見ると、隣のブルーノは首を絞め上げられて  
気絶していた。ランスロットが手加減してくれた  
おかげで、後数十分もあれば回復するであろう。

「しばらく彼に運転は任せられませんね。

僕がやるしかないか……」

ただ、エムリスは未だ高鳴っている心拍を  
収める為にしばしの間休息した。

……先程自らの前を通った少年と少女が、  
これからエムリス達が行くべき《暁学園》の  
本校に向かっていた事など思わずに……。

## 穿て銀雪

「天壤<sup>カル</sup>焼き焦<sup>サリ</sup>がす竜王<sup>テイオウ</sup>の焰<sup>サラ</sup>……アアツ!!?」

「月輪<sup>グハツリン</sup>割り断<sup>サ</sup>つ天龍<sup>テンリウ</sup>の大爪<sup>キ</sup>イ……ツツ!!?」

ステラの光と熱の奔流と、王馬の荒れ狂う風の剣が、十字を描いて激突する。

辺りの空気はそこを中心にして吹き飛び、光と熱が辺り一面に広がる。

他に戦っていた破軍の生徒も暁の生徒も分け隔てなく全力の魔力で己の身を守る。

そうしなければ熱風に吹き飛ばされ、高層ビルから落ちたよりも速い勢いで

地面へと叩きつけられるからだ。ステラと王馬以外、誰も彼もが

吹き飛ばされないようにするのが必死であった。

……ただ1人、多々良白雪を除いては。

白雪はなんら変わらない様子で、

交錯している二つの巨大な剣を眺めていた。

なぜ、強烈な熱風に吹き飛ばされないのか。

それは彼女の能力……《歪曲》の力によるもの。

空間を歪曲させ、熱風の及ばない間隙を

作り出して、白雪はその中に入り込んでいるのだ。

(とんでもない魔力だ。これだけで何人分の  
伐<sup>ブレイザー</sup>刀者の魔力になるのか……)

共に優劣のつけ難い優秀な伐<sup>ブレイザー</sup>刀者。

だがそれを知っていても白雪は今この瞬間、

どちらが勝つか分かっていた。分かりきっていた。

(二人とも学生としての域は遥かに超えている。

だけど、……王馬の方が強い)

そして、彼女が思っていた通り、

綺麗な十字が、軋む。

ステラ・ヴァーミリオンの方へと。

ゆっくりと、しかし確実に。

「ぐっ……ぎッ……ッ!!？」

ステラの表情に苦痛の色が浮かぶ。

彼女は自分の膂力に過大な自信があったであろう。

だけど、それは王馬の前には意味はない。

白雪は知っていた。かつて《暁学園》に

留まっていた際、王馬の能力を調べていた

時に、偶然にも知ることの出来た

王馬の身体の異常性を。

(ステラさんの膂力じゃ、彼の重過ぎる

身体から放たれる膂力には敵わない)

もはや完全に拮抗は崩れ、後少しでステラへと

烈風の剣が振り落とされる。

そして――。

「ステラさんッ!!？」

まさにその一瞬、横から破軍学園の生徒会長、

東堂 刀華がステラを救い出した。

斬る標的を見失った月輪割り断つ天龍の大爪は

地面へと叩きつけられ、その背後の学園諸共

吹き飛ばした。

「ありがとうトー……ッッ!!？」

詰まったような声に白雪が顔を向けると、

そこにはステラが刀華の雷により

脳のブレーカーを落とされた光景があった。

刀華は気絶したステラを選抜メンバーの

葉暮桔梗と、偶然にもついてきていた妹の牡丹に彼女をなんと投げ渡した。

「逃げて下さい!!? 貴方達選抜メンバーは、ここで負けてはいけません!!?」

「は、はいっ!!?」

恐らく彼女達には何が何だか分からなかっただろう。だが、刀華の言葉に突き動かされ、

葉暮姉妹は気絶したステラを伴って

逃走した。

「……我々が逃がすだけでも?」

そのガウエインの言葉と共に多々良幽衣と

風祭凜奈が逃げた三人を追いかけてしようとするが、

「させるかツ!!?」

「行かせないよツ!!?」

生徒会の砕城と兎丸がその行く手を阻む。

「……私達が行かせるとでも?」

意趣返しのように、刀華がガウエインを睨みつけて

顕現した《鳴神》の切っ尖を突き付ける。

それを見たガウエインはしまったといわんばかりに額を押さえて、

「……ツ……クククツ……クハハハハハハハツ!!?」

ハーツハハハハツハハハハハハハハハハツ!!?」

……笑った。可笑しくて可笑しくて

たまらない笑い方で。

「別に行かなくてもいいんですよ。」

こちらとしては。というか同じ学園の人間として、早々に気づくべきではないのですか!?!?」

その言葉に、刀華は気づく。

この場にたった一人、長距離を射程範囲に捉えられる人間の存在を。

だが気付いた時にはもう。

「《オペリチニキ塵殺の猟犬》」

凶弾は放たれていた。

凶弾は放たれた。その数20と4。

それを食い止めんと刀華は雷撃を放ってそれらを撃ち墜とそうとするが、

なんと弾丸は一発一発が生きているかの如く飛び回り、雷撃を回避していく。

それもそのはず、白雪の放った弾丸は《歪曲》の概念を纏っている。

白雪がその気になれば弾丸で曲芸飛行を行える程に、自由自在に軌道を操れるのだ。

逃れられる術としては因果干涉系の能力が挙げられるが、

「アハッ♪」

「くうっ!?!?」

その能力者は紫乃宮天音に邪魔されて今はそれどころではないようだ。

「ダメ、間に合わな———!!?!?」

刀華の叫びも虚しく、24発の猟犬はまっすぐに獲物達目掛けて殺到し———。

「……ねえ、一輝君取り逃してるけど

いいの？僕達のオーダーは破軍の

完全な敗北でしょ？彼を残してたら

完全な敗北じゃないと思うんだけど」

「「……あっ」」

白雪の指摘に、王馬以外の面々が

はたと気づく中、ステラを連れた葉暮姉妹の

総身を《幻想形態》で貫いたのであった。

## 終焉

……空気が、張り裂ける。

《玉虫籠手》と《べにいろあげは紅色鳳》の

衝突によつて。

互いに手心など毛頭ない完全な「殺す」一撃。  
周りの地面は吹き飛ばされ、石は砂と化す。

「……流石は《夜叉姫》、と言うべきですかね」

「お世辞はいいんだよクソ野郎。とつとと死ね」

《夜叉姫》西京寧々と、《暁学園》の面々を背後に

《蟲使い》ガウエインが各々の霊装を構えて

向かい合っている。

何故、このような状況となったのか。

それはほんの数分前に遡る。

「……だからア!!?アタイは逃げたクロガネを

追うべきだつて言つてんだよ!!?」

「いいや、その必要はないと先程から

言っているのだがな」

「ガウエイン蟲王よ、貴様も傭兵稼業をしているのなら

オーダー神の宣告を完全にこなす事の重大さを理解して

いるだろうか?取るに足らん人間でも追うべきだと

我は思うが?」

《暁学園》の面々は、刀華を始めとする生徒会、

それに逃げたステラと葉暮姉妹も残さず仕留め、

先程戦線を離脱した黒鉄一輝を追うかどうかに

ついて議論していた。



「だから……ああ、クソ!!?なんでこんな時に  
肝心な事が思い出せないんだ!!?」

「いい加減にどつちにするか決めろよ!!?」

「ここでチンタラ待つてるか!!?それとも

さっきのガキを追うかどつちかをよオ!」

段々とエキサイトしていく2人を尻目に、

時々口を出す凜奈を除いて全員遠目に

それを見ていた。

「大変そうだねー。別にボクとしては

どちらでもいいんだけどさ。

あ、一輝君が苦しむ所は見たいな♪」

天音が2人の様子をニコニコと笑いながら

眺めている。

「なんか、子供みたいあの2人……」

「いい加減に誰か止めろ。うるさくて

構わん」

王馬が喧しそうに顔を顰めながら

そっぽを向く。

「む、ならばここはこの我に任せよ!!?」

……おい2人共、いい加減に……」

凜奈が王馬の言葉を聞いて意を決し、

幽衣とガウエインを止めようとしたが。

「喧しいんだよこのロリッ娘!!?」

「ろ、ロリッ娘……!!?この我がロリッ娘……」

何故か息のあつた暴言に呆気なく鎮圧された。

ロリッ娘であるのは事実なので否定は

出来ないが。

よろよろと後退して幽衣とガウエインから

離れた凜奈を従者のシャルロットが介抱する。

「お気確かに。確かにお嬢様はロリッ娘ですが

最近のロリッ娘は一部の人間に需要があるので

落ち込む事はありません。私もその一人なので、  
更に言うところリツ娘のロリツ娘に欠かせない  
ロリツ娘たる所以は……」

「もう止めて!!? 凜奈のライフはゼロだよ!!?」  
なまじシャルロットに悪気がなかった分だけ、  
凜奈は傷付いた。

何気ないロリツ娘への賛辞が、凜奈を傷付けた。

「もう良いもん。……おうち帰る……」

「あー、泣いちやった。」

本当に誰か止めなよ」

白白雪がそう言っただけで、

「……」

議論している2人を除いた全員が、

白雪をじつと見つめていた。

「……え、僕? 冗談だよ、僕あれ止められる

気がしないんだけど」

「構わん、行け」

「遺骨は拾ってあげるからさ、アハハ」

死ぬの前提か……とため息を吐きながら

白雪は重い足取りで2人の元へと歩いていった。

2人は未だ激しく言い争っている。

白雪は幽衣の背後へと素早く近づくと、

「はむっ」

その片耳を甘噛みした。

「びゃあああああああー……」

突然の事に幽衣は驚き、へなへたと脱力して

へたりこむ。

しかしそこは生まれながらの凶手。

すぐに立ち上がって、白雪の首根っこを

掴んだ。

「デメエ何考えてんだ!? 変な声出しちまった

だろうが!!?へんなちよつかい出すなよ!!?」

「ごめん。でもさ、……姉様、これ結構

ハマるよ」

「何言ってるんだよお前はアアアアツ!??」

訳が分からないとばかりに幽衣が

頭を抱えて叫ぶ。

「大体女同士で愛し合うなんて可笑しいだろ!!?」

「あつ今姉様、僕を含め世界の同性愛者を

敵に回したね?容赦しないよ僕は」

白雪と幽衣が取っ組み合いを開始する中、

議論から解放されたガウエインは

疲れたようにため息を吐いていたが、

ふと、顔を上げた。

「……何か、来る」

王馬もそれに気づき、顔をその方向へと

向ける。

その方向の空から、何者かが高速で

向かってきていた。

日本では知らぬ者のいない伐刀者……

《夜叉姫》西京寧々の姿が。

……そして冒頭に戻る。

「いやいや全く、少しばかり予想よりも

お早い到着でしたね」

ガウエインが寧々の霊装を己が霊装、

《玉虫籠手》で受け止めたまま話を始める。

「……皮肉にしか聞こえないねえ。」

とりあえずは、なんでこんな馬鹿騒ぎしたのか聞かせてもらいたいものさね」

「ではこうしましょう。代わりに、

……今すぐにも黒鉄一輝をこちらへと連れてきて欲しい、というのは」

刹那、ぎしりと空気が音を立てて

張り詰め――

「たかだか20そこらの若僧がいつぱしに

大人ぶってんじゃねえよ」

《暁学園》の面々を異常な重圧が襲った。

「「……ツ!!？」」

寧々の伐刀絶技《地縛陣》。

突然10倍近い重力を叩きつけられた

《暁学園》の生徒達は耐え切れず

地面へと這い蹲る。

だがしかしそれでもガウエイン、王馬は

顔色一つ変えず体勢を維持し、

這いつくばっていた白雪が《歪曲》の異能を

以って立ち上がった。

「……何故私の歳が分かる？」

「そんなら分かんないや強くなれねーよ。」

さて、今からためーら潰すけど遺言は？」

明らかにイライラした様子で寧々は

片方の鉄扇を開く。

「遺言とは違いますが、今この場で

闘ったら……貴女は無事でも背後の彼女達が

無事では済みませんよ？」

背後のステラや刀華を見やりながら

ガウエインが受け止めていた寧々の霊装を弾いた。

それに伴い空気が険悪となる。

と、ガウエインの持つていた携帯から着信音が聞こえてきた。

「はいもしもし……ええ……良いのですか？」

では速やかに対応します、はい」

ガウエインは早々に通話を終了させると、背後にいた王馬と白雪に対して

「もう良いとの事です。私としても

スポンサーの意向に逆らいたくはない。

早々に退散しましょう」と言い放った。

「貴女はどうされますか？我々を

逃がすか、それとも殺すか。

どちらにしますか？」

寧々は、少し考えてから自らの霊装を

だぼだぼの袖の中へと隠した。

殺しにかかれればこちらも相応の代償……

生徒達の命を払う事になるからだ。

それは教師の身である寧々からすれば

避けたい事態であった。

「……うちがたまたま教師であった事に

感謝しなよ、餓鬼共」

「理解感謝します」

この一言を以って、《暁学園》の計画、

その《前夜祭》は終了の幕を下ろした。

ガウエイン達は素早く夕焼けの中、

破軍学園の校門の方へと向かっていった。

それを見ながら寧々はぽつりと呟いた。

「スポンサー」、ねえ……こりゃ

面倒な事になりそうだぜえ、くーちゃん」

ひどく苦々しい表情で、天を仰いで。

## 《比翼》と魔術師

「……」

とある山中。エムリス達は《暁学園》の建物手前まで来ていた。

エムリスは物思いに耽り、ブルーノは後部座席で未だ昏倒し、ランスロットはエムリスの隣でじつとしていた。

「……ん？」

と、車の行く先から一人の女性の姿が見えた。

夜闇に薄ぼんやりと輝くその姿を形容するならば白き輝きと形容した方がいいだろう。

まるで欧州……北欧神話に聞く戦乙女ワルキューレを

想起させる出で立ちの女性が、両手に

一対の剣を携えてこちらへと歩を進める。

それを見た刹那、エムリスは直感した。

彼は戦場に身を置いた事は数える程しかないものの、その感覚は忘れる事はなかった。

そう、……殺気を。

断、という音。

それと共に、車がすらりと正中線から二つに割れ、女性の……、

《比翼》エーデルワイスの横をすり抜けて奔り、闇の中へと消え、

やがて遠くから爆発音と光が届いて来た。

「……」

刹那、闇から何かが振り抜かれる。

「ッ」

エーデルワイスは苦もなくそれを







「《連盟》の勝つ確率が32.1452%、  
そして《連合》の勝つ確率が77.8648%」

「……成る程。よほどの事がなければ

その戦争、《連合》の勝利となる訳ですか」

そう言いながら、エーデルワイスは

エムリスに対し僅かな畏れを抱いていた。

彼は誰にも求められてもいないのに、

どちらが勝つのかという、

まるで無双ゲームの攻略者の如く

そこに介在する失われるであろう

少なくない人間の命に対する興味など

持たず、ただ淡々と籠の中で演算を行い

続けてきた。

まともな神経の人間ならおかしくなるだろう。

事実。

彼はまともな人間ではなかった。

「……長過ぎる寿命だ。

僕はこの戦争でもう二度も

対戦を経験することになる。

第二次大戦、そして次もまた。

そう名付けるならば……《第三次対戦》で」

エムリス・アンブローズが《神代の魔術師》と

呼ばれる所以の一つ。

彼は、あまりにも長命で、不老であった。

約百年も前の戦争を経験しながら

その身体は今も尚20代の頃で変わらない。

普通の人間からすれば遠い過去……そう、

まさに《神代》から生きてきた人間である。

「ああ、またこんなことになる」と知っていれば

不老不死の研究などしなかったものを……」

重い溜息を吐いてエムリスは天を

仰いだ。

「……先刻、星の様に輝かしい『未来』が見える人間を私は見ました」

「……………ほう。『あの領域』に至っている

君が言うなんて珍しいじゃないか？

一体、どんな人間で、どんな名前なのかな？」

その言葉を聞いてエムリスが興味深そうに

エーデルワイスを見た。

別に戦いたい訳ではない。

彼は殺戮を好む倒錯者ではなく

一般の常識を持つ厭戦主義者である。

……少しその思考がズレているという点を

除いて、だが。

「黒鉄 一輝。……まだ学生の身でありながら

私に傷を負わせた少年です」

その時になって初めてエムリスは、

エーデルワイスの左手の甲に一文字の

傷があるのに気付いた。

「まさか。……フフ、成る程。

ガウエインからの報告を聞いた時は

取るに足りない人間と思っていました

僕は少々見誤っていたようですね。

興味が湧きました。彼の全てを知りたい」

「私はもうこの国から出ますが、

貴方はこれからどうするのですか？」

その言葉を聞いて、エムリスは

期待に満ちた笑みを浮かべて、それを

行動で示した。

「聞いたでしょう、アグロヴァル!!？」

彼を、黒鉄一輝を調べなさい!!？」

彼に関する情報を、人間を、全てです!!？」

命令を下す。闇に潜むエムリスの懐刀、  
《KORT》が1人《群雲》<sup>レギオン</sup>に。  
かつて誰もその姿を見た事のない、  
最強のアサシンに。

「無論、私はここに残ります。」

その少年……黒鉄一輝を調べ尽くすまでは「  
エムリスはそう言って、エーデルワイスに  
別れを告げ、闇の中へと消えるのだった。」

## 感謝

白雪達が破軍学園襲撃を終えた夜の事。

「まず、君達に伝えなければならぬ事がある」

エムリスは《暁学園》へと戻ってきた

白雪達へ向けて告げた。

「残念なことに、《剣聖》Mr. ヴァレンシユタインが

帰国することになった。諸事情でね」

それに幽衣は眉をひそめ、奥に佇んでいる

ランスロットとガウエインに注意を向けながら

吐き捨てるように言い放った。

「……ア？もしかしてその『諸事情』ってのは

テメエらの闇討ちで半死半生になって

帰国せざるを得なくなったって訳じゃねエよな」

その言葉を聞いて、ため息を吐いて

エムリスは面倒そうに天を仰いだ。

「いや、いや。彼を仕留めるのにわざわざ

闇討ちなど悠長な真似などする気はないよ。

面倒だしね。帰国するのは別の理由さ」

そこまで聞いて、今まで《暁学園》へ戻ってから

一言も口を開かなかった白雪がぼつりと呟いた。

「……彼が帰国するのは勝手だ。

でももしそうなたら誰が代わりに

監督役を務めると思う？……父さんだ」

その通り、とエムリスが白雪を指差して

その言葉を肯定した。

「これからはヴァレンシユタインに代わり

この僕、エムリス・アンブローズが監督役を

務める。以後宜しく頼むよ」

その宣言は、この計画の主導者が

《解放軍<sup>リベリオン</sup>》から《KORT》へと

移った事を明確に示していた。

「なっ……。テメエら何を考えて……？」

……って白雪テメエ今何て言った!!??

「父さん」だって!!??

「ん?……ああ。言っただけだったっけ」と

白雪はエムリスへと一旦顔を向けてから、

「エムリス・アンブローズはボクの父だ。

血の繋がりはないけどね。いわば

養子って事さ」と軽々と、事もなげに

言い放った。

僅かな驚愕が《暁学園》の面々へと波紋する。

「そういう事は、あまり話さない方がいいと

僕は思うが……。いいのかい?

と言っでももう言ってしまったがね」

「大丈夫だと思う。ここに居るのは

物欲のない人間しかないし」

白雪の言う通り、幽衣や王馬、サラ等は金には

無欲であり、凜奈は財閥の令嬢なので

金には困っていない。

よってエムリスが所持する莫大な権利には

誰も興味がないのである。

「そうか」とエムリスは言葉を切り、

幽衣の方へと向き直った。

「……多々良 幽衣君だね?

すまないが、少し話す時間はあるかな?

無論、二人きりでね」

「……チツ……」

幽衣は舌打ちしたものの、素直にエムリスに

従って建物の屋上へと向かった。

「……それで？アタイに用でもあんのか？」

いつもよりも何割増しで機嫌の悪い幽衣。

何故か。簡単な事だ、目の前にいる

エムリスが嫌いなだけである。

今まで苦勞した様子のなさそうな顔、

教養のある言動、理知的な性格……

およそ彼の全てが幽衣の勘に障った。

「僕の行動が何か君を怒らせたなら謝りたい。

ただ、僕は白雪の事について感謝の気持ちを

伝えたかっただけなんだ」

そのエムリスの言葉に、ピクリと幽衣は

反応した。

「はっ、わざわざそんなことでアタイを

呼んだって訳か。くだらねえな」

「確かに君にとってはくだらない事だろう。

だけど、僕にとつてはこれは感謝しても

し足りない程の事なんだよ」

そう言ってから、エムリスは語り始めた。

「……最初彼女を拾ったのは、

《剣聖》だった。北歐の紛争地域で、

瓦礫の山の中で泣いていた赤ん坊を

拾ったのが始まりだ」

当初、ヴァレンシユタインはその赤ん坊を

自らの手で育てるか、あるいは《黒い家》<sup>アップゲルント</sup>へ

預けるかを考えていたらしい。

エムリスはその頃どうしていたかと言うと、

「その頃僕は《解放軍》<sup>リベリオン</sup>の幹部を

辞める為に他の幹部の賛成を得ようと奔走していたよ」

当時、幹部を辞めるには他の幹部5名以上から推薦を貰わなければならないという謎の規則が存在していた。

エムリスはその才能故に、その推薦を得ようにも得られなかったのだ。

「なんで辞めようと思ったんだ？」

「僕がいなくとも《解放軍》<sup>リベリオン</sup>は上手くやっていけると判断したからさ。その頃丁度後1人の推薦があれば辞められるという時、ヴァレンシユタインと会うことが出来た」

すぐさまエムリスはヴァレンシユタインに推薦を頼んだ。

ヴァレンシユタインは僅かに逡巡したものの、結果的にはそれがある一つの条件を付けて了承した。

「それが、白雪をテムエの元で育てる事だったという事か？」

「そういう事だ。彼女は僕が見てきた中でも

麒麟児と呼ぶに相応しい子だったよ」

白雪はエムリスの教えを完全に理解し、

様々な戦闘技能を身につけ幾多もの戦場を

駆け抜け、一等級の傭兵へと成長していった。

……ただ一つの問題を抱えて。

「……僕は彼女の育て方を間違えた。

君も最初彼女と出会った時に分かったはずだ」

「……感情の欠落、か。

確かに、あの時のあいつは人じゃねエ。

いかに効率よく標的<sup>ターゲット</sup>を仕留められるか、

その技術だけを教え込まれた機械だった」

今でも幽衣は想起できる。

人を人と思わず、「不要」と判断すれば  
容赦なく切り捨てる機械人形。オートマタ

その濁りきった双眸を。表情のない白い顔を。

「僕の教え方がいけなかったのか、

僕以外の人間に任せたのがいけなかったのか。

激しく後悔したよ。自らの手で、人ではなく

人形を作ってしまったことに」

エムリスは両手を握りしめて悔しそうな声を

上げ、それから幽衣を見た。

「……だけど君と出会って、彼女は変わった。

人間へと変わる事が出来たんだ」

「……ハッ。よせよ、アタイはあいつと

殺し合いをしただけだ」

そして、白雪と約束をした。

いずれどちらが上か決めようと。

その約束はこの《七星剣武祭》で果たそうとも

幽衣は決意していた。

「君がいなければ、いずれ白雪は狂気に

囚われていただろう。本当に、本当にありがとう」

エムリスは、幽衣へと深々と頭を下げた。

自らの過ちを正してくれた恩人へと。

「僕の娘……白雪の事をよろしく頼むよ。

これからも迷惑をかけるかもしれないが、

末永くお幸せに」

そう言つて、エムリスは屋上から去つていった。

幽衣は滅多に言われた事のない感謝に

むず痒い気分となっていた。

「ケツ、アマチュアの人間が何を言っただか」

そう言いながらも幽衣はこの感覚を覚えて

おこーとーおこーとー。



「……あれ。最後アイツ何て言った？」

「……………白雪の事をよろしく頼むよ。

これからも迷惑をかけるかもしれないが、  
末永くお幸せに。」

そのエムリスの言葉は、まるで娘を嫁にやる  
父親のようであり……………」

「……………ッ??」

その時、幽衣はエムリスがとんでもない  
誤解をしている事に気付いた。

「あ、あの男何勘違いしてんだよッ??」

アタイと白雪は交際してねエぞ☒

何かこのまま行くと結婚する流れじゃねエか!!?」

幽衣は自分と白雪がバージンロードを歩いている  
様子を想起して、ゾツとした様子で慌てて

誤解を解きにエムリスの後を追うのだった。

## 《KORT》の人間

《七星剣武祭》まで残り4日と迫った日の事。  
破軍学園の理事長、神宮寺黒乃は黒鉄兄妹を  
自らの部屋へと招いた。

「すまない」

開口一番、黒乃は二人にそう詫びた。

「そんな、理事長が謝るような事じゃないですよ」  
「ええ。ですが驚きですね……まさか裏にいたのが  
この国そのものだったなんて」

珠雫の言葉に黒乃は苦々しい表情で深く頷く。  
《暁学園》の襲撃後、その理事長と名乗る人物が  
表舞台へと姿を現した。

日本の総理大臣、月影 漠牙である。

彼は己が権力を持って《暁学園》に対する責任追及を  
止め、結果として《暁学園》は何のペナルティもなく  
《七星剣武祭》へと出場することに相成った。

一方で破軍学園の面々は一輝、ステラ、そして  
有栖院から出場権を譲り受けた珠雫以外は  
全員が棄権。その他の学園でも棄権者が相次いで  
いるらしく、今回の大会は波乱の幕開けと  
なりそうであった。

「まさか月影先生がこんな事をするなんて……」

まだ信じられん」

「先生は月影総理を……存知なのですか？」

「私が学生だった頃の理事長だった。」

優しかったあの人が、一体どうして……」

黒乃はそう言いながら頭を抱えた。

2人はその姿を見て黒乃に心の底から同情した。  
裏切りを受けるのは誰であろうと心に傷を  
受ける事だ。しかもそれを行ったのが

信じていた人間ならば尚更のことである。

「……すまん、お前達には関係ない事だったな。」

「とりあえず《七星剣武祭》が始まる前に一つ、注意してほしい事があって呼んだんだ」

黒乃は冷静を取り戻してから真剣な表情で

2人を交互に見やった。

「破軍襲撃時、ガウエインと名乗る人物がいただろう」

その言葉に、一輝はピクリと眉を寄せた。

知っている。ガスマスクと黒のコートを纏う

異様な風体の男。

「はい。彼は自らを『教師』と名乗って、戦闘には

参加しませんでしたか……」

「アレが戦闘に参加していたら、

間違いなく全員やられていた、と言いたいのか？」

その黒乃の言葉に首肯する一輝。

「……無理もない。奴は《KORT》の人間だ。」

むしろ無事だった事を喜ぶべきだろうな」

「《KORT》……!!?あの最恐の傭兵集団ですか!?!?

なんでこんな所に……!!?」

「ここからは、一部の人間にしか知られていない

話になるが」と黒乃は前置きして話し始めた。

「……数年前、《連盟》は1人の

凶悪な犯罪者を捕らえる事に……表向きは

捕らえた事になっている……成功した。」

彼の者の名は、エムリス・アンブローズ。

年齢100を超え、世界に強大な影響力を持つ

怪物。

彼は高齢でありながら、過去に自身のみに

施した不老化の技術によって20代の体を持ち、

傭兵集団《KORT》を束ねる長でもある。

《連盟》は当時最新鋭の設備を持っていた日本の某所にある刑務所に彼を幽閉。いずれ彼を処刑するはずであった。

「……だがしかし、奴は解き放たれた。」

《KORT》の総意として。

ガウエインとは別の奴らにな。

そして今奴は……《暁学園》の教師として日本にいる」

「ツ!!?」

「あと数日で《七星剣武祭》が始まる。

その時は《KORT》の連中に対しては

絶対に気をつけておけ」

その言葉には、重圧感があつた。

「……もし、もしもです。」

奴らと戦闘になったらどうすれば良いですか」

「逃げろ」と黒乃は言い放つた。

「今日本にいるのはエムリスにガウエイン、

《狂笑》ブルーノと《悪食》アメイモンランスロット。

ブルーノとガウエインは数人がかりでなら

なんとかなるだろう。

……だが、ランスロットとエムリスと万が一戦闘になるようであれば「戦う」という選択肢は真っ先に

捨てろ。そして逃げろ。目の届かない所まで、

息が切れるまで全力で走って逃げろ」

そう黒鉄達に忠告しながら、黒乃はかつての

光景を思い出していた。

黒乃の幾千もの弾丸を、寧々の鉄扇による斬撃を、ありとあらゆる異能の力を

その身に受けながら一歩たりとも退く事のなかった  
《K O R T》きつての怪物……ランスロットの姿を。  
黒乃は自分の攻撃を悉く受けて、尚も  
進む事を辞めなかった彼の姿に恐怖を刻まれた。  
今だからこそ分かる。

あの時の自分と寧々ではアレには到底敵わないと。  
そして……彼の最強の《ブレイザー伐刀者》、

《比翼》にも匹敵する力を持つていたであろう事を。

「……だが、奴らが干渉してくる事などほぼ

ないだろう。《K O R T》に關しての事は我々

大人が対処する問題だ」

故に、黒乃は決意する。

彼らに自分の様な恐怖を与えさせる事はさせないと。

もし《K O R T》が干渉してくるようならば、

この命を懸けて守り抜いてみせると。

「お前達は何も考えず、

七星の頂を目指して走り抜ける!!?」

「はいっ!!?」

「……その頃、《曉学園》では。

「だーかーらーっ!!?アタイは白雪とは

付き合ってねエツてば!!?いい加減にしるよ!!?」

「冗談が上手な事で。車の中でもイチャイチャ

していた癖にどの口が言うのやら」

ガウエインがため息を吐きながらやれやれと

ばかりに口を開く。

「おや、それは本当ですかガウエイン？」

「これが噂の『ツンデレ』とか言うものなのですかね」

「違う、違うって!? マジで違うから!!?」

「だが幽衣の反論は聞き入れられない。」

唯一ランスロットだけが反論を聞いてはいたが、

悲しいかな彼は喋る事が出来ない。

「……」

「これは赤飯炊いてお祝いですかねエツ!?」

盛大に《K O R T》の皆で呪ってあげましょうよ

彼女達の結婚を!!?」

「ちよ、本当に……あ、おい、白雪!!?」

「テメエからも何かアイツらに説明を……!!?」

「困り果てた幽衣は通りがかった白雪に

誤解を解くように頼んだが。

「?なんで本当の事言ってるのに説明しなきや

いけないの?ボク達愛し合ってる仲でしょ?」

「にべもなく断られた。」

「えっ、ちよッ……!? 待つ!? 白雪、待て!」

「行くな行くな行かないで下さい頼みますから!!?」

「せめて、せめて結婚だけは延期の方向で

調整するように頼んでええええええええええッ!!?」

「幽衣のその心からの叫びは、周りの山中に

響き渡る事になったのであった。」

Let's party!!? その1

「白雪」

幽衣は真剣な表情で白雪を見た。

「何、姉様」

白雪も同じく真剣な態度で話を聞く。

幽衣は意を決して、重い口を開き「……」。

「頼むから、アタイが何かするまでは

問題起こすんじゃないぞ」

《七星剣武祭》の出演者が集まる

パーティ会場、そこに向かう途中の

エスカレーターの中で白雪に忠告した。

「大丈夫だってば。姉様の側に近寄る不貞な

クソを始末する位しかしないよ」

「それが問題なんだよ!!? 大体テメエ、

こないだ《KORT》の連中の誤解を解くのが

遅れたせいでどうなったか知ってんのか!!?

今日本に来てねエ他の《KORT》の連中にも

誤解される羽目になっただろうがツ!!?」

そう、幽衣が白雪と付き合っているという

誤解はあの後白雪が解いてくれたものの、

その時には既に《KORT》が1人、ブルーノに

よってほぼ《KORT》全員に誤解が伝わって

しまったのである。

何よりも幽衣が許せないのは、その時の

ブルーノが「大草原不可避」等と下らない事を

宣って結局謝りもしなかった事だった。

「すいません何でもしますから許して」

「ん？今なんでもするって言ったよなア？」

なら、と幽衣は白雪の鼻先に指を突きつけて

「絶対に、アタイがしたい事を終えるまでは

何もするんじゃないぞ」と言い放った。

「……うん。わかった姉様。約束する」

白雪が頷くと同時、エスカレーター扉が

開き、パーティ会場に到着する。

「ならいい。ここ最近イライラしてんだ……。

せつかくの休みだ、発散させてもらうぜエ……!!？」

そう言いながら幽衣は口端に笑みを浮かべ、

白雪は覚悟を決めたようにきゅつと手を握りしめ

それぞれ董色と群青色のドレスの裾を靡かせて

パーティ会場へと歩き出した。

一方その頃、

七星剣武祭の舞台、湾岸ドーム近くの

廃ビルにて。

「吹き荒れろ《翠<sup>パ</sup>の烈風》ツ!!？」

ビル中を大量の虫が暴風の如く吹き荒れる。

だが、その暴風を悉く斬り裂いて一つの影が

飛び出す。

「ヒヒッ……ヒヤハハハハハハハハハッ!!？」

《狂笑》ブルーノ。

両手に己が霊装の糸で作り上げた剣を携え、

その暴風を作り上げた張本人……ガウエインへと

斬りかかる。

ガウエインはその行動を予想していたかのように

ブルーノの斬撃を籠手型の霊装で弾く。



しかしブルーノはけたたましく笑いながら、  
ガウエインを切り刻まんと高速の斬撃を繰り出す。  
その剣捌きは鋼線使いとは思えない程に疾く速く  
ガウエインは防戦を余儀なくされる。

……だが彼はいくつもの死線を越えてきた  
傭兵集団《KORT》の1人。

このままにいる訳がなかった。

「……き、ヒヒッ」

瞬間、ブルーノは感じ取った。

360。全方位からの殺意を。

その殺意の形は……蟲の弾丸。

ガウエインは《翠バズの烈風》で

操っていた蟲に魔力を纏わせ、ブルーノに  
撃ち放ったのだ。

「蜂の巣にしてやる。踊れピエロ」

ガウエインに操られた蜂や甲虫は

己が毒針や角をブルーノの全身に突き立てんと

一斉に襲いかかり……。

「《真紅バルフレイ・バリアの繭》」

ブルーノが両手の剣を解いて作り上げた

真紅の繭に阻まれた。

だが、蟲の弾丸を防いだ代わりに

今度はガウエインの攻勢を許す事になる。

「シイイイイイイイツ!!?」

渾身の右ストレート。

裂帛の気合いと共に放たれたそれは、

繭に衝突すると同時に周りの空気と

コンクリートを破碎する。

それだけでは終わらない。  
先程のお返しとばかりに拳をこれでもか  
とばかりにつるべ打つ。  
拳が衝突する度に周りが砕け、破れてゆく。  
いずれ勝負はガウエインの勝利。  
……そのはずであった。

「……キヒッ……キヒッ……」

声が、ガウエインを噛む音が響く。

刹那、ガウエインは後先考えず後ろへ下がった。  
感じ取ったのだ。このままではキケンだ、と。

……そして、その直感は的中する。

ドン、と先程コンマ数秒まで

ガウエインがいた所の床から紅い槍が  
床を砕き高々と突き上げられた。

あのままでいたら串刺しであっただろう。

「……あくアア。あと少しだったのになア」

笑いながら、糸で編んだ槍で開けた穴から  
ブルーノが現れる。

彼は、繭を作ったのちに、床を糸で切って

下の階へと移動し、下から奇襲を行ったのだ。

「ヒヒッ、キヒヒヒヒヒヒヒッ!!」

下卑た笑い声を上げながらブルーノが

槍の穂先を下げ、身体を斜に構えた。

ガウエインもそれに応じて拳を握る。

「……そこまで」

しかし、両者は戦いを眺めていた

自分達のリーダー、エムリスの一声で

霊装を消した。

「素晴らしい戦いだった。僕がいない間も

2人とも力を磨いていたようだね」

「身に余る光栄です」

そう、先程の戦いは只の手合わせ。

2人とも殺す気など毛頭ない戯れだったのだ。

「……白雪君も、私がない間にどれほどの力をつけたのでしょうか。《七星剣武祭》が楽しみですね」

「……ええ、全くその通りです」

ガウエインは、エムリスに同意しながら、ある思いを燻らせていた。

（多々良 白雪……。《KORT》唯一の例外、我々に劣る雑種風情が……粹がるなよ）

……白雪に対する、憎悪を。

（貴様の命日は、あと少しだ……!!?）

## Let's party!!? その2

白雪は、破軍学園時代のルームメイト、蜂谷由奈と向かい合っていた。

何故そんな事になったのかと言えば、それは少し前、白雪の姉、幽衣がパーティ会場で問題を起こして出て行かざるを得なくなった所まで遡る。

…幽衣は、自らの思惑通りに行かなかった事をイライラした表情で…時折壁を蹴り上げながら廊下を歩いていた。

身体中から殺気が立ち昇っていて常人が見たなら逃げ出したくなる様子だが、

「姉様可愛いよ姉様…ハアハア」

「寄るな触るな近付くな暑苦しい!!?」

白雪にとつてはそんなもの気にも止めなかった。

精々、姉がいつもより少しだけイライラしているだけという印象しかない。

「ああもう、今日はオフだったのに!!?クソツ!!?」

あのスカした野郎に止められるわ白雪は

ボデイタッチしてくるわ!!?やってられるか!!?」

スカした野郎、というのは《七星剣王》こと

諸星雄大の事である。

「姉様、悪かったよ身体中弄ろうとしたのは」

「今度からやったらその首刎ねるぞ」

「分かった。やったとバレないようにやるよ」

「馬鹿かテメエはツ!!?」

もしもそうなら暫くは眠る事すら出来ない

状態に陥る事必至だ。

どうしてくれようかこの少女、と幽衣が頭を抱えた時だった。

「……ん？」

白雪の声に前を見やると、そこには1人の少女がオドオドした様子でこちらを見ていた。

幽衣は知らないものの、白雪の方は知った顔らしい。

「白雪……知り合いか？」

「うん、まあ……破軍にいた頃、少しだけね」

それを聞いて、幽衣が僅かに口端を吊り上げたのを白雪は知らなかった。

「キキツ。少しの間話でもしてやったらどうだ？」

どう考えてもテメエを待ってたに違いねエ」

「うーん。そうかなあ……。まあ取り敢えず

話でもしてくるよ。先に部屋戻ってて」

その言葉に幽衣は「これで安心して休める」と

心の中でほくそ笑みながら了承した。

幽衣が立ち去るのを見送ってから白雪はその少女、蜂谷を見やった。

そうして冒頭のシーンにもどる訳である。

最初に口を開いたのは、蜂谷の方であった。

「久しぶり、だね。白雪」

「ふふ、どうしたのさ。忘れたのかな？」

僕に撃たれた事をさ」

白雪は酷薄な笑みを努めて出した。

努めて、というのはいつもならずぐにでも出せるはずのその笑みが、何故か浮かんでこなかったからである。

「忘れてはいないわ。……でも、その時の

あんたの顔が、あたしにはどうにも……」

「その顔が見たくってまた来たの？」

マゾじゃないの？」

白雪のそういった類の笑みは、

大抵標的を殺す時にしか出ないようなものだ。

蜂谷がその笑みを見たいというのなら、

彼女かあるいは別の誰かが白雪の拷問を受ける

必要がある。

……だが、蜂谷の返事は白雪にとって

予想だにしないものだった。

「違う。その逆よ。……あんな笑顔見たくない。

あんな……悲しげな笑みなんて」

「……？」

何と言ったのか、と白雪は自らの耳を疑った。

白雪は過去に姉や他の人から「イイ笑顔してる」

と言われたことはあるが、「悲しげな笑顔」と

言われたのは初めてのことだった。

蜂谷が顔を伏せる。

「うん。あんたは分からないだろうけどね。

あの時のあんなの笑顔は、

取り繕っているけど痛ましい笑顔だった。

本当の白雪が何をしてるかは知らないけど……。

これだけは言わせて……これ以上……これ以上

自分の心を殺すようなことはやめて……!!？」

蜂谷が伏せていた顔を上げた時、白雪の胸は

これまで感じたことのない類の痛みが走った。

蜂谷は泣いていた。珠のような涙を流し、

嗚咽を繰り返していた。

それを見た途端、どうしようもなく白雪の身体は

凍りつかされ、言葉一つ紡ぐことも指一本

動かすことも出来なかった。

……何故、そんな顔が出来る。

自分を殺そうとした相手に。何故その相手を  
想って泣くことが出来る!!?

自分にはこの生き方しかないのだ。

他に、他に何か道があるというのか!?!?

そんな心からの想いが、白雪の喉で違和感となって  
凝り固まっていた。

彼女がそれを嚙下しようと四苦八苦しているうちに、  
蜂谷はいなくなっていた。

何か話したのか、それとも無言で去ったのか

白雪は覚えていない。

ただ、彼女が自分に何かを握らせたことのみは  
辛うじて覚えていた。

恐る恐る、その手を開く。

中のぐしゃぐしゃな紙には、

今日の11時、大阪の某所にて待つ。と

書かれていた。誰かに頼まれたらしい。

白雪は筆跡から、そのメッセージを書いたのが

ガウエインであると理解した。

(そうとも。僕には、この生き方しかないんだ)

白雪はそう思いながら、しかし覚束ない足取りで  
ガウエインが指定した場所へと向かうのであった。

そして……それが、白雪と幽衣の運命を

大きく変えることとなるのは、その時の白雪は  
知るよしもなかった……。

## 対ステラ戦、開始

「……………」その少女は暗闇の中で目を覚ました。ぐるりとあたりを見回す。……誰もいないようだ。彼女はこの部屋の中に誰もいないことを確認して舌打ちをする。

それが何に対してなのかはわからない。ただ、その舌打ちには彼女の焦燥が示されていた。そうして少女は、早々にこの部屋を出るべく身体を起き上がらせた「……………」。

《七星剣武祭》の初日は大波乱の幕開けであった。

Cブロックでは、昨年度優勝者《浪速の星》

諸星雄大が《無冠の剣王》黒鉄一輝に接戦の末敗北するというとんでもない番狂わせが起き、

そして、遅刻者が出たことによりCブロックの後の試合になっていたBブロックでは。

そこで遅刻者……《紅蓮の皇女》こと

ステラ・ヴァーミオンがなんと対戦相手の

鶴屋美琴に加え、Bブロックの生き残り全員と

戦うという《七星剣武祭》始まって以来のハンデ戦を申請したのだ。

運営委員会は喧々諤諤の議論の末にこれを

了承。これによつて、1対4というありえない

試合が、開始されるのであった。



「……《紅蓮の皇女》も剛毅なものですね。  
仮にも裏社会の人間達を相手にハンデを  
申し込むなんて」

観客席の一番上、そこでガスマスクを着用した  
奇妙な格好の男、《蟲使い》ガウエインは  
ため息を吐いた。

彼がここに来たのは、隣にいるエムリスの  
護衛としてだ。

エムリスは自らの娘、白雪が愛している幽衣の  
力がどれほどのものなのか見るために  
ここに来たのだ。

「いや、むしろそれだけの實力があると  
見るべきですね。私が見た限りでは、彼女の才能は  
まだまだ開花していません。

幽衣さんもどれほどなのか楽しみですが、  
《紅蓮の皇女》の實力も気になりますね」

その時、実況と人々の声が試合の開始を告げた。

「『『Let's go ahead!!?』』」

試合開始、ほんの数秒前。

「よオ、リンナ。……少し話してエことがあるんだがちよつといいか  
?」

「なんだ《不転》よ。くだらぬ戯言ならば我はこの耳には入れぬぞ  
いや、と幽衣は首を振りながら凜奈にこう囁いた。

「テメエ、ツキカゲのおっさんが好きなんだろう？」

「な!?!? なーなな、な、何を言ってるの!?!? 私は……」

途端に真っ赤になった凜奈の口を塞ぎ、今度は耳元で凜奈に囁く。こういう時凜奈の従者であるシャルロットは怒りに震えそうなものだが、今回はなぜか怒りもしなかった。

「見りや分かるさ。それはそうとリンナ。

……今この《七星剣武祭》で一番の障害はなんだ？」

「えっ？それは……あの《紅蓮の皇女》かな？」

「そうだ、その通りだリンナ。そこでテメエが

あの猪武者をぶっ倒したらあのおっさん喜ぶだろうな？

なんせ一番の障害となる奴が消えるんだからさ」

「……よ、喜ぶの？月影のおじさまが？」

「アア、間違いなく喜んでくれるだろうなア。

倒したらテメエはこの計画のMVP、

ツキカゲのおっさんに称賛されるだろうさ」

凜奈はそこまで聞いて、自らが月影に称賛される様子を夢想した。

それは彼女に本気を出させるにはあまりにも

大きすぎる対価であり……。

「くく。……くくはははははははははは!!？」

分かったぞ《不転凶手》!!？この《聖戦》、

この我が一番槍を勤めようではないか？

他の者の手を出す暇も与えぬ内に倒してやるわ!!？」

そう高らかに凜奈が宣言すると同時に、試合開始の合図となる言葉が会場内に満ちた。

「『『Let's go ahead!!?』』』」

そして、その言葉を待っていたと言わんばかりに

凜奈が黒獅子……「スフィックス」の背中に乗って突撃していった。

その背中を見ながら、幽衣はほくそ笑んでいた。

「ギギッ……。豚もおだてりや木に登るって言葉あながち間違いでもないらしいな」



彼の獣の重量は約250kg。それが魔力による加速を伴って激突してくるとなれば致命傷は免れない。

……だが。

「……けど、当たらなきゃ意味ないでしょっ。」

ステラは吐き捨てるようにそう言い放ち、

半歩引いて事もなげに獅子の突進を回避した。

そうして、隙だらけとなった凜奈とスフィンクスに

背後から己が霊装、《レイヴァアテイン妃竜の罪剣》を高々と

振り上げた直後。

「……………《あしそぎ足殺》」

片足を背後から何者かに振り払われた。

当然体幹はぐらりと揺れ、追撃など出来なくなる。

攻撃の機会は失われ、敵に反撃の時が訪れる。

「今度は逃さぬッ!!?」

疎めエエツ!!? 《キングスプレッシャー獣王の威圧》!!?」

再び獅子の咆哮。しかし、今度のそれは

《停止》の概念を纏っていた。

それによりステラの身体は縛られ、決定的な

チャンスを晒すこととなる。

そして……………。

「《キングスチャージ獣王の行進》ツ!!?」

彼女の身体を、強烈な一撃が襲った。

先程述べたように、ライオンの体重と魔力による

加速が合わさった突進。

並みの少女の体重しかないステラは当然

易々と吹き飛ばされる。

そしてリング上で数度バウンドしても尚勢いは

止まらず、そのまま場外、観客席の真下の壁に

突っ込み、その壁を轟音と砂塵と共に崩落させた。

その様を、先程《あしそぎ足殺》を放ち、

凜奈に攻撃のチャンスを与えた少女……。  
幽衣はどこか冷めたような目で見つめていた。

## 時間稼ぎ

「……」ホテルから走り出た少女は、夏特有の照りつく日差しに嫌悪感を覚えながらタクシーを止めた。

タクシーのドアが開き、中に入ると同時に一言、「湾岸ドームへ」

少女は普段の彼女にしては珍しく焦っていた。タクシーの運転手もその様子をなんとなく感じ取ったのだろう、すぐさま車を発進させた。その時、車内に付けられていたラジオの実況が、《紅蓮の皇女》が《魔獣使い》をKOした事を甲高い声で叫んでいた。

「……」その頃、湾岸ドームでは。

「……ふう。こんなものかな。まずは、一人」

もうもうとリング上に煙がたゆたう中、ステラは悠々と《妃竜の罪剣》を下ろした。

彼女はつい先程、伝家の宝刀である伐刀絶技、

《天壤焼き焦がす竜王の焰》を連続で放つ離れ業をやつてのけたのである。

そもそも《天壤焼き焦がす竜王の焰》そのものが先程敗れ去った凜奈の最強の手駒である

シャルロットが全魔力を以って創り出す最硬の守りである《千弁盾花》と相打ちする程の代物。

それを何発も放てるのだから、どれほどの強さかはつきりと先の攻防で観衆は理解した。

彼女は、ステラ・ヴァーミリオンはこの変則試合で







目前に幻影を作り出す技である。

「多々良さんにあの技を見せたのはほんの数分前。そんな時間で真似出来るものじゃない。どうやって……」

困惑する一輝。しかしそれは、彼の反対側の席にいるエムリス達にとっても同じだった。

「馬鹿な……《猪突》、《猪突》だと!?」

あの技は我々《KORT》以外門外不出だぞ!? どうやって身につけた!!?」

《猪突》。一見ただの突き技に見えるが、その実は全く違う。

《猪突》の一番の特徴は加える力をたった指一本程の面積に集中させることだ。

そのため、側から見れば中指の関節のみを突き立てるように見える。

力が一点に集中するため威力は凶悪の一言。

魔力のこもったものとなれば厚さ5cmの鋼板をも易々と貫く程だ。

「……白雪は彼女に贈り物をしたわけですか」

そのエムリスの一言で、ガウエインは得心が入った。成る程、白雪は《猪突》を覚えている。

幽衣が白雪からその技術を盗んだと考えれば

ごく自然ではないか。

「ふふ、成る程。俄然面白くなってきましたね。

幽衣さんがどれだけ白雪さんから技術を盗んだか  
とことん見物させて頂きましょう」

エムリスはそう呟いて、幽衣の一挙一動を見逃さぬべく身を乗り出した。

こうして周りが騒いでいる間にも試合は

刻々と続いているのだが、趨勢は幽衣の優勢で進んでいた。ステラも《レィヴァアティン妃竜の罪剣》を駆使して立ち回るが、幽衣は小柄を生かしヒットアンドアウェイを繰り返していた。ただ、ステラは纏っている魔力のおかげで、最初に食らった《猪突》以外口クナダメージを負っていないかった。

「アンタ、舐めてんの……!!? 霊装なしで闘うなんて、妹譲りじゃないの!?!?」  
「違えよ。テメエにやこれ拳一つで

充分だからなア。ギャギャギャギャツ!!?!?」  
多々良のその言葉には真実味があつた。それを立証するように、実況が告げる。

『えー、多々良選手は先程の試合でも同じように相手選手を徒手空拳のみでKOしていますね』

『恐らくよほどの相手でなければ霊装は出さないでしょうね。ひよつとすると

徒手空拳のみで優勝するかもしれないよ?』  
『そうなたら何の大会なんだ、って話になりそうですがねえ』

ステラはようやく、目の前の少女を敵と認識したがそこで、幽衣は平賀の方を向くと、

「ヒラガア!!? 出来たかア!?!?」と叫ぶ。  
平賀がそれに手を上げて肯定すると、幽衣は笑みを浮かべた。

「ギギツ。どうやらここまではらしいなア、《紅蓮の皇女》。まあ精々頑張つて足掻きなアツ!!?!?」  
その言葉と共に、会場に影がかかる。

次の瞬間、リング上に大量の瓦礫が降り注ぎ、組み合わさり、巨人の形を成す。

「タタラさん、お待ちせ致しました。」

それでは始めましょうかステラさん。

この《デウス・エクス・マキナ機械仕掛けの神》で!!？」

作り上げる際に入っただろう。

巨人の中から会場中に嘲笑うような平賀の聲が  
高らかに響き渡るのだった。

## フエイカーファクターファイター

「……湾岸ドームへと続く道路。

タクシーは一路その道を疾走していた。

車内に取り付けられたラジオは、

《道化師》平賀玲泉がステラ・ヴァーミリオンを

滅多打ちにしている様を生々しく実況していた。

それが少女を尚更にイライラさせた。

そもそも彼女の気性も荒い為に、車内には

刺々しい空気が蔓延している。

何かあればドカン、といきそうな空気であり、

「お、お客さん？大丈夫か？」

それはまさしく運転手の不用意な一言で。

「……やかましいぞクソがアツ!!？」

とつとスピード上げて湾岸ドーム行けッ!!？」

爆発した。

それと同時にずっと伏せられていた少女の顔を

間近に運転手は見るようになった。

「なっ……!!？あんだ、その顔は……!!？」

だが、運転手の問いは腹の底から響く振動と騒音に

よって掻き消されてしまう。

その激音は、遙か遠くから遠雷の如く辺りの

廃ビル群に轟いたのだった。

「……ヤレヤレ、これ、は……失敗して  
しまいましたネエ」

焼けた地面に大の字に倒れながら、平賀は  
ぼそりと呟いた。

平賀は、切り札を使ってステラを拘束し、

一方的に攻撃し、勝利まであと少しという  
所まで来ていた。そのはずだった。

だがその切り札が……伐刀絶技《操り人形》を以って  
鶴屋美琴を人質とすることだったのだが、それが  
文字通りステラの逆鱗に触れた。

そして……その結果がこれだ。

無事な所などないほどに焼け、壊れ果てたリング。

その全てが、ステラの所業であった。

伐刀絶技《暴竜の咆哮》により、リング上全域が焼き払われたのだ。

今この瞬間、平賀は漸く理解した。

「……この少女を、試合という「枷」から  
解き放つてはならなかったのだ、と。」

「参りましたよ。やはりあなたはボクン」

バギャリ、という音と共にステラの足が

平賀の顔面を人としてはやけに硬質な音と共に  
踏み砕いた。

……事実、平賀の身体は人のものではなかった。

樹脂と鉄くずを使って造られた、精巧な人形。

《解放軍》の《人形師》が操る

人形の一つでしかなかったのだ。

それを知ってか知らずか、ステラの目には

白けたような気色が映っていた。

そうしてステラは周りを見回す。

リング上にはステラ以外立っている者の姿は見えず

観衆は誰もがステラがこの試合の勝者だと思った。

だがステラはため息をついて、こう言い放った。

「……いい加減に出て来なさい。」

アタシがこんな簡単な騙し討ちに気付かないと

思ってるの？」

恐らくはリング上にいる、何者かに。

観衆は困惑した。

先の《暴竜の咆哮》バハムートソウルは余りにも

その範囲が広すぎる為に会場にいた運営委員が障壁を張って押し留めなければならぬ技。

その証拠に、《幻想形態》で放たれたそれは

平賀どころか審判まで巻き込んでしまっている。

そんな技を食らって耐えられる者がいるものか。

観衆は誰もがそう確信していたのだ。

だが……意外な所から、その答えが現れた。

「……ギハハツ。バレちまったかア。なら、

仕方ねえな。出て来るとするか」

リング上の土がモコモコと盛り上がる。

その中から現れたのは「……」。

「生き残るのは達者ね。タタラ」

「褒め言葉か？それは」

多々良幽衣であった。彼女はなんとリングに

穴を穿ち、その中に逃げ込んで《暴竜の咆哮》バハムートソウルを

免れていたのである。

「まったく危ねえつたらありやしねエ。

テメエ本当にあの時の甘ちゃんか？」

「それはこっちのセリフよ、タタラ」

「……アア？」

どういう意味だと訝しんだ幽衣に、ステラは

単刀直入に告げた。

「あなたこそあの時の少女なの？」

もう演技はよしたら？タタラ ユイ。

それともこういうべきかしら。

……タタラ シラユキとね」

その言葉に幽衣は一瞬驚いた顔をして……、

次の瞬間、嘲笑うような表情を咲かせた。

「……キ、キキ。ギャハハハハハッハッハハハハ!!?」

テメエの目は節穴かア!!? いや、頭の方が空っぽなのかもなア!!? バアカ!!?

ギャギャギャギャギャギャギャギャ!!?」

会場中に幽衣の嘲笑が響き渡る。

その様を一輝達は……いや、一輝を除いて

驚きの表情でリング上の多々良を見つめていた。

「やつぱり、か……」

「お兄様、分かっていたのですか!!?」

「可能性の一つとして考えていただけだよ。

僕の《蜚気狼》を真似出来る状況を考えたんだけだ」

一輝の中での有力説は二つ。

一つは過去に一輝の《蜚気狼》を見た白雪から

幽衣が教わった。

あるいは……。

「白雪さんが幽衣さんに化けて試合に出場した、と

考えるのが妥当だと思ったんだ。何より、彼女の

雰囲気パーティーの時の幽衣さんとどこか違う。

おかしいと気づけたのはついさっきだけだね」

だが、リング上にいる多々良が本当に幽衣なのか

判定出来る方法はない。試合が終わってない以上、

強制的な介入は出来ない。

その時であった。彼女が会場に現れたのは。

「白雪イイイイイイイイツツ!!? テメエふざけてんじやアねエぞオオオオオオオツツ!!?」

まさしく、大音声。

誰だ今の声はと観衆達はその出所を注目する。

「……………」そこには。

『な、……………なな、なんとリング上と!!? 観客席の!!? 最上席に!!? 二人の多々良幽衣選手が立っているうううううツ!!? 一体どちらが本物の多々良選手なんだアアアアアアアツ!!?』  
最上席にいる方の幽衣は顔を真っ赤にしてリング上にいる幽衣を睨んでいる。  
もう一方の幽衣はというと、何の感情もなく、強いて言えば「あー、来ちゃったか」といったような雰囲気があった。

「観念したら?。」

ステラの言葉に、多々良は軽く頷き、頭を手をやり、黒く長い髪を引き剥がす。

その下から現れるのは白銀の長髪。

続いて紅い目のカラーコンタクトを外して観客達に蒼の双眸を晒す。

そうして最後に顔に施したメイクを落とし、

彼女は「……………」、「多々良 白雪」は改めてステラと向かい合った。

「……………これでいいんだろう?。」と言いながら。



## 背徳の刃

白雪が行動を起こしたのは、大会前日の夜まで遡る。

その夜、白雪は寂れた摩天楼のビルの屋上にいた。「やあ、白雪。2日も待たせるとは酷いなあ。こちらはずっと待っていたんだがねえ」

「……早く本題を話したらどう。下らない話だったら帰るよ」

かつての仲間、ガウエインからの呼び出しを受けたからだ。

あまり乗り気でない白雪に対し、ガウエインは「まずは何も言わずにこれを見ろ」とスマホを白雪に投げ渡した。

その映像を見て、白雪は絶句した。

「なん、だ……これ……!?」

映像の中身は、森が燃えていく様子を遠くから撮影したものだ。ただの火事だったなら、白雪も何の反応も

しなかっただろう。

だが、その燃え方が異常であった。

木々が、燃え上がる暇もなく灰となり

消えてゆくのだ。相当な熱量がなければ出来ない所行である。

「……ステラ・ヴァーミリオンが成した事だ」

ガウエインの言葉に、白雪が顔を上げた。

「ンン、分かるとも。何故、どうやって彼女がこれほどの力を得たのかが分からない。

だが分かる事がある。彼女は恐らく、

この大会を制する程の力を得たという事だ。我々《暁》を含めて、蹂躪するだけの力が」

「……それで、僕に何をして欲しい？」

暗殺？残念だけど、今彼女は……」

「違う、違う。君には多々良幽衣に紛して

大会でステラを殺して貰いたいのだよ」

その言葉に、ブツツ、と音を立てて白雪の

頭の中で何かが切れた。

「デメエ……!!？僕だって凶手である手前、

手段は選ばないつもりだがそこまでする気は

ねえよ……それに姉様に紛する？」

ふざけるな、そんな事姉様が許すとても……!!？」

「……なら、世界中に君の姉が無様に

やられる姿を晒すかい？ンフフフフ」

刹那、ガウエインの額に白雪の霊装、

《銀雪》の銃口が突きつけられていた。

あとは引き金さえ引けばガウエインは死ぬ。

だがしかし、ガウエインはなおも笑いながら

白雪に語りかける。

「ン。良い案だと思うのだがねえ。

幽衣君はステラ・ヴァーミリオンを理解しては

いないが、君は十分に理解している。

それに君がステラ姫を倒してから

また入れ替われば露見することもない。

姉の無様を晒すか、勝利するか。

選ぶまでもないと思うが……」

白雪は何も言わずに、《銀雪》を下げた。

その表情には未だ濃い怒りが残っていたが、

彼女はゆつくりと、ガウエインに問うた。

「……方法を教える。ガウエイン」

数分後、白雪は幽衣のいる部屋へと戻って来た。

「おう、白雪。……なんだ、浮かねえツラ

しやがって。何かあったのか？」

……ガウエインの教えた方法は、聞けば

呆気ない程に簡単な代物だった。

ただ、ほんの一瞬だけ幽衣の警戒を緩ませる事。

「いや、何でもないよ姉様。

それよりもこの大会、姉様はどれぐらいまで

行ける？」

「そうさな……」と幽衣は首を傾げて

暫し思考してから、こう答えた。

「優勝は無理だな。精々ベスト4程度か」

「そう、か……ねえ、姉様。

ボク達この大会で戦えるかな？」

「無理とは言わねえが、無駄だろ」

無駄。かつて交わした約束を忘れたのだろうか。

この計画に参加すると決まった時、二人で

誓ったあの約束を。

決勝の舞台で、どちらが上か決めると。

「……うん。そっか、そっか。

なら姉様。ステラとは……ボクが代わりに戦うよ」

ほんの一瞬、数秒にも満たない時間、幽衣の

警戒を緩ませる事。その結果は、

「……どういう意味、ガッ!?」

幽衣の胸から刺し貫かれて姿を晒す

黒の短剣が示していた。

「ガッ……あつ……!?」

幽衣は自らの胸から突き出た短剣を茫然と眺めていた。

幽衣は若手の凶手の中でも指折りの存在だ。そんな彼女が、背後に立たれる事を許す程警戒を怠った訳がない。

ただ、白雪に謀られた事のみは理解できた。

「ジ、らゆ……ギイ……ツ!!?て……めエエツ……」

白雪は、ただただ何処か悲しい目で

幽衣を見つめていた。

「ごめん。だけど……こうしなきやつ……」

こうでもしないと姉様大会出ちやうじやん……」

「……ツ!?てめ、え……何を……っ!?」

「だってだってだってツ!!?僕はツ!!?」

姉様が傷つく姿を見るのは嫌なんだよツ!!?

傷つく姿も、負ける姿も、苦しむ姿もツ!!?

だから……僕は姉様が傷つく前に

姉様を止める。そう、……殺してでも!!?」

愛するが故に殺す。常識的な愛としては

狂っているだろう。

だがその実、愛というものは、恋というものは

大抵そういうものだ。

幽衣の胸を貫いたのは《幻想形態》の霊装らしく、

幽衣は一瞬意識が落ちかけたもののなんとか

持ち堪えていた。

「さつきから聞いてりやワガママばっか

言いやがってテメエはツ!!?」

だが、胸の短剣が引き抜かれると同時に

幽衣は背後の何者かに組み伏せられる。

「早くしろガラハッド。貴様に拒否権は

もうない」

老齡の嘎れた声が響く。

「……分かってるよ、アグロヴァル。

僕は、もう後戻り出来ない」

そう言うと、白雪はアグロヴァルなる者に代わり  
幽衣の首にゆつくりと手をかけた。

「白雪ッ……テメ……ッ!? やめッ……!!?」

幽衣の能力《反射》は瞬間的な衝撃には  
強いものの、徐々に加圧される攻撃には  
減法弱い。例えば締め上げる類。

なので、今の彼女には何も出来なかった。

「ごめん……ごめんなさいっ……!!?」

ごめんなさい……ごめんなさい……!!?」

姉様……ごめん……ッ!!?」

「ガッ……カ……ジ、ラユ……ギ、イ……!!?」

白雪は謝り続けた。幽衣が気を失うまで。

その様を、アグロヴァルは冷めたような目で  
じっと見つめていたのだった。

……自分は姉を手にかけた。

もはや後戻りは叶わない。

それ故に。

「……審判が寝てる以上、ルール違反の  
判断は下しようもない。

僕には先はない。だから……

ここでテメエぶっ殺して相打ちで終わらせてやるよ

ステラ・ヴァーミリオン………ツツ  
この戦いでステラを落とすと白雪は決意した。」

## 凶手の真髓

『おいおい……誰か試合止めろよ。』

ルール違反だぞ!!?』

『でも審判気絶してるし誰が止めるっていうの?』

『委員会は何やってんだ!!?早く止めろ!!?』

『待て、委員会が止めないんだから』

ルール違反じゃないんじゃないか?』

観客達はあまりにも想像を超えた事態に

混乱していた。

この試合が止められて終わるのか、はたまた

続行するのか誰にも分からなかったのだ。

だが、試合会場の周りにはいる委員会の人間達は

誰も動かなかった。

……いや、動けなかったのである。

(なんだ、この感覚は……っ!!?)

(まるで、総身が押し潰されるような……)

全身に襲いかかる今までに感じた事のない

異常な圧力。まるで「その場から動くな」と

言うかのように。

ただ一人、神宮寺黒乃だけは、この異様な

圧力の正体を知っていた。

人の範疇を超えた《魔人》の領域の権能。

それを扱え、尚且つこのような場で使用するの

はたった一人しか居ない。

(この感覚は……っ!!?エムリスめ、

妨害する気なのか……!!?)

「さて、と。邪魔する者はこれでいないね。

存分にやるといい白雪。君の本気を

見せてもらおうとしようか」

「……何故お止めになられたのですか？

規律を重んじるドクターが珍しいですね」

いや、とエムリスは手を軽く振りながら

答える。

「僕はそこまで規律を重んじる人間ではないよ。

今回だって、白雪くんが目に余る程の違反行為を

しでかしている訳ではないから止めないだけさ。

……まあ、何故そんな事をしたのかは

問わずに置こうか」

じわり、とガウエインの背中に冷や汗が湧く。

エムリスはガウエインが白雪を唆した事を

知っていたのだ。知っていて、あえて見逃した。

彼が何を考えているかは分からないが、

見過ごした以上自らの利になる事だと

踏んだのだろう。

「……恐れ入ります」

「いずれにせよ、この場にいる誰も

この闘いは止められないよ。

それに彼女は今、一つの事を成す事に全力を

集約させている」

もはや結果は問わない。

ただ一つ、ある事さえ成せば構わない。

それは――

「《紅蓮の皇女》を抹殺する、と言う事に」



タン、と軽い音がリングに響く。

続けて空気が張り裂けるような音と共に

数発の銃弾がステラへと襲いかかる。

だがその全てがステラを撃ち抜く前に彼女が纏う  
焰によって蒸発してしまう。

先程から、ずっとこの調子である。

時折ステラが魔術による遠距離砲や豪剣の一撃を

白雪に放とうとしても彼女の異能である《歪曲》に

よって、それらは全ての外的な方向にへと捻じ曲げられ、傷一つ付  
ける事すら出来ない。

(才能の差、か……)

白雪は苦々しい表情を浮かべてステラの放つ炎熱の弾丸を《歪曲  
》の概念によって捻じ曲げ、横や上にへと逸らす。

この調子で勝負が続いてゆけば、いずれ自分の方が体力切れで敗れ  
るだろう。

何故ならば、《紅蓮の皇女》は一步も動かず白雪の銃撃を防ぎ、焰  
の遠距離砲を放っているのだから。

世界一の魔力量を誇るステラのこと、自分より先に魔力切れになる  
ことなどあり得ないと白雪は気づいたのだ。

(ボクなんて動く必要さえないってか……クソッ！)

格が違う。何もかもが、次元が違う。

だけど、負ける訳にはいかない。負けられないのだ。

(姉様を手にかけて手に入れられるのがそんな結末だなんて、……嫌  
だ。嫌だ、嫌だ、嫌だ、嫌だッ!!?)

それでは報われないではないか。命より大切な者を手にかけて、敗  
北しか手に入れられないなんて、それならば死を選んだ方がマシであ  
る。

(ちまちま撃ってるんじや埒が明かない!!?一発だ!!?とびつきり



ばかの《紅蓮の皇女》でもひとたまりもあるまい。

『な、なんて威力だアーーーーーーツ!!? 先程のステラ選手の  
伐刀絶技ノウブルアーツにも引けを取らない……いや、それ以上の威力ツ!!? 流石に  
これは……』

「やったか、これで……!!?」

「……中々良い攻撃だったわ、シラユキ」

一たまりもないはず。なのに。

「……な、ア……!!?」

「流石に今のはアタシでもコレを使わなきゃやられてたわ」  
リングの嵐が晴れる。

ステラ・ヴァーミリオンは、立っていた。

無傷で、微笑を浮かべて、……体から燐光を放ちながら。

「な、ンで……」

自身の最大火力が破られた。その事実には白雪は驚愕する。

「これを使った以上、先は見えてるわ。だから……すぐに終わらせて  
あげるツ!!?」

瞬間、未だ高空にいた白雪に影がかかる。

「ツ!!?」

慌てて顔を上げるがもう遅い。

顔を上げて白雪の視界に映ったのは、こちらへと剣を振り上げるス  
テラの姿。

そして、今まで経験したことのないような衝撃と痛みが白雪を上空  
からリングにへと叩き落したのであった。

## 最期の一撃

リングを、激震と高熱の嵐が襲う。赤土は焼け、あるいは熔融し、空気が吸う者の肺を焦がすほどに燃え上がる。

まるでそこだけが原始の地球へと戻ったよう。

そこに立つ二人の少女がいた。

《紅蓮の皇女》ステラ・ヴァーミリオン。

《白き死神》多々良 白雪。

だが……その姿は、正反対と言っても良かった。

ステラは僅かな衣服のほつれ以外に擦り傷一つ見えず、身体の内側から放たれる紅き燐光は見る者を魅了する美しさがある。

一方、白雪は……まさしく死に体を晒していた。

己が渾身を受け止められ、反撃で受けた炎熱の一撃により左腕はぐちゃぐちゃに壊れ、臓器は小腸と大腸の一部、右腎臓、そして肝臓が破裂及び損傷している。更に小腸と大腸の一部を抉り取られた傷口からは未だ出血が酷く、あと3分もあれば失血で彼女は死ぬだろう。衣服はステラと比べるのも馬鹿らしくなる程に焦げ、破れ、そしてそこから熱で溶けた皮膚や筋肉が覗いていた。

「ッ……ガ……アアッ……!!?」

しかしそれでも、それでも白雪は戦うことを止めようとしなかった。

思うように動かない身体を引きずり、震える指に精一杯の力を入れて《銀雪》の引き金を引く。

「《塵殺の獵犬》イイイツ!!?」

「……フツ!!?」

だが、放たれた幾多もの殺意はステラという名の標的に到達する前に全て消し飛んでしまう。

そして、今度はステラが大きく白雪へと踏み出し、《妃竜の罪劍》レィヴァアティンを右袈裟に薙ぎ払った。

咄嗟に白雪は後退しながら《銀雪》を盾に斬撃を受け……。

ミシッ……パキッ……。……バキヤツ!!?

「ツツツぎやあああああああツツ!?」

刹那、今まで体験した事のないような衝撃と激痛が彼女の身体を蹂躪。残っていた右腕はそれにより完膚なきまでに砕けた。

その余りの痛みに白雪は喉が裂けるほど悲鳴を上げ、荒れ果てた大地をゴミ屑のように転がる。

「ひ、ぎいひい……ウウウウウウウ……!!?」

その余りの痛々しさに、観客達は愚か実況、伐刀者である解説さえも言葉を失う。

『これは……ツ……!!?』

ようやくその一言を搾り出すことが出来た実況。

それは最後まで続かなかったが、全ての人が同じ思いを抱いていただろう。

「……」あまりにも、酷い光景だ、と。

『白雪選手はまだ、倒れません。ステラ選手が痛ぶっている訳ではありません。白雪選手が、能力と気力で致命傷を凌いでいるのです……信じられない。ここまで実力差がありながらまだ食い下がるなんて……!!?』

その解説の言葉を聞きながら、観客席の端で観戦していたガウエインはリングへ背を向けて歩き出した。

「……おや、何処へ向かうのですか、ガウエイン君?」

「帰るのですよ。この試合は先が見えた。最早ここで見ていても結果は変わらないでしょう?」

同行していたエムリスの言葉に歩みを止めたガウエインは、肩を竦めてやれやれといったジェスチャーと共にそう言い切った。

「先生も奇特なお方だ。結果は分かっていたというのにわざわざここまで見に来るとは……」

「君には、この先が分かっているというのですか?」

「ええ。先生だってそうなのでは?」

エムリスは、瞠目して。それから僅かに口端を歪めた。

白雪を見つめる彼女と瓜二つの少女を眺めて……。

「ガウエイン君。それは……慢心した人間の発想ですよ」





しよう？

覚えておきなさい。傲慢とは己の敗北に繋がるものです」

「……肝に銘じておきます」

ガウエインは恭しく首を垂れながら、心中では猛り狂う怒りを白雪にへと向けていた。

(クソツクソツ!!?この死に損ないがツ!!?弱者は弱者らしく、とつととくたばって死んどけよ!!?)

だがリングの白雪は身体中の負傷もなくなったかのようにしつかりと二本の足で身体を支え、静かな瞳で直線上に立つステラを見据えていた。

「……驚いたわね。ここまでアタシに食い下がるだなんて」

ステラは、未だ倒れる気配のない白雪に対して心からの賛辞を送る。彼女は今までにこれほど長い長期戦を経験したことはなかった。彼女の力はそれほどまでに強力なものだったのである。

その力を白雪は受け続け、それでも尚立っている。

「そしてその姿。まるでイツキの《一刀修羅》みたい。……だけど、アタシには絶対に勝てないわよ」

無言でこちらを見る白雪から僅かに後退する。

「敬意を以って倒してあげるわ」

《レィザァテイィン妃竜の罪剣》を両手で構え、天に掲げる。

刹那—————剣は爆発するかの如く燃え上がった。

巨大な焰は哮り、集い、狂い、喰らい合い……一閃の光と変生し、天を貫く。

それは龍の怒り。

身の程を知らぬ愚か者に振るわれる鉄槌である。

その光の剣を、

「

カルサリテイィオ・サラマンドラ  
天壤焼き焦がす竜王の焰

》アアアアアア—————アアアアアアツ!!?」

ステラは白雪に向けて振り下ろした。



実況は思わず悲鳴を上げた。

ただでさえ白雪は重篤な怪我を負っているのに、これ以上大きな一撃を喰らえば死んでしまう。だというのに。

白雪は、笑っていた。

自棄になったわけでもなく、その瞳は輝いている。

(言われたからね……一発キツイの、カマしてやれって)

朦朧とした頭に、その叫びはよく刺さった。

誰が叫んだのかもよく分からないが、心地よい風が吹きこんだと思われる程に気持ちが良くなった。

(やってやるよ……。どこまでやれっか、分からないけど)だから、

(見ててね、姉様……ッ!!?)

白雪は、走り出した。

残り50m。

白雪は初歩で《銀雪》を解除した。

《銀雪》による銃撃は既に捨てていた。もはや通じないことは分かっていたからだ。

初歩の足に《銀雪》を解除して得た魔力を込めて蹴り出す。

ステラが振り下ろしてくる光が彼女の目前まで迫ったのは、全く同時であった。

(勝っ………ッ!?)

勝利を確信したステラは、直後目の前の光景に刮目する。

真っ直ぐに白雪に向けて奔る光が白雪の手前でまるで避けるかのようにぐにやりと曲がったのである。

「やりますねえ!!?空間そのものを《歪曲》させましたか!!?」

エムリスが驚嘆の声を上げる。

白雪はステラの光熱の剣を曲げながら更に加速する。

残り30m。

ステラは振り下ろしから薙ぎ払いに斬撃を変え、白雪を腰斬しよう

とする、が。

「ツ~~~~ツツツ?」

瞬間、ステラを頭が割れたかの如き激痛が襲い、全身の筋肉が硬直した。次いで吐き気が胃の腑から込み上げる。

特に酷いのは頭の痛みだ。まるで脳を直接搔き混ぜられているかのように絶え間ない苦痛が彼女を襲う。

これもまた「~~~~」、白雪の仕業であった。

《石化の魔眼》、かつて一輝との手合わせで使用した魔術である。

あの時は全力ではなかったが、今回は全力。更にステラは外傷には強いものの今のような内部からの激痛は余り経験したことはない。故に、ステラはその痛みに思わず顔を歪めて薙ぎ払いの動作が遅れる。

だが全力は、白雪に代償を払わせる。

ぶちや、と音を立てて白雪の左目が爆ぜた。

残った右目からもどろりと黒い血が流れ視界を汚す。

それでもステラ相手に稼いだ時間を白雪は走る。

残り20m、15m、10m、5m。そして。

薙ぎ払おうとしていたステラの《レヴァアティン妃竜の罪剣》、その柄を壊れた左手を無理やり動かし掴んで封じる。

「ツ?」

摂氏3000℃を超えるステラの霊装。それを素手で掴んで無事で済むはずがない。じゅう、と音を立てて白雪の左手が焼け焦げて更に壊れていく。

「……捕まえた。この、距離、なら……外れない」

しかし、その痛みを感じていないかの如く白雪は微笑を浮かべる。そしてその笑顔にステラは……恐怖を抱いた。

《竜》を体現している今であっても拭い去ることが出来ない、この一撃は命に届きうるという確信を。

だがもう遅い。もはや誰にも……白雪は止められない。

白雪は同じく砕けた右手を無理やり動かして握り拳の形にすると。

「《ミステイルティン無害なる毒》」

とん、と軽くステラの胸の中央を叩いた。

「「……………」」

誰も彼もが、その光景に呆気にとられた。

あそこまでステラの攻撃をいなし、懐に潜り込んでまで一撃を放とうとしたのだ、どれほどの威力なのか想像もつかなかった。

だが、叩かれたステラも白雪も動かない。

まさか不発か、と誰もが思った刹那。

「……………」ステラの胸が、まるでスプーンでくり抜かれたかの如く爆ぜて吹き飛んだ。

「「ほっ!!?がッ……………!!?」」

その更なる光景に、誰もが肝を潰し、言葉を失う。

《無害なる毒》。

その最期の一撃は、白雪が全力を尽くして放ったものだった。

物理で押してもステラの防御の前では無力。

……ならば、彼女の防御が及ばない所に全力を撃ち込む。

即ち、体内に直接叩き込める一撃を。

それこそがかの伐刀絶技の特徴。

見た目はただの拳打でありながらもその実は撃ち込んだ刹那、標的の体内に流れ込んだ衝撃を《歪曲》の概念によって操作、防御の出来ない内臓を蹂躪するものである。

(とはいっても、胸の辺りを螺旋描くみたいにぐるぐる回すのが限界だったけど、ね……)

自嘲の笑みを白雪は零す。

あと少し余力があれば、ステラをミンチに出来たが……自分にはここが限界らしいようだ。

ステラが地面に膝をつくのを見る前に、白雪の意識を抗いようないな音が覆い尽くしていく。

(……………めん、……………姉様……………)

勝てなかったよ、と呟いたのを最後に、白雪の意識は完全に途絶え

た。

## 番外編：凶手達の聖夜

「……クリスマス。それは神の子イエス・キリストの生誕を祝う、どんな気難しい人であろうとなんとなく浮かれてしまう日。

しかし、それを真実心から祝えない人間が一人いた。「彼女」にとっては、クリスマスなど何の意味も持たない字面だけのものであった。そう、あの雪の日までは「……」。

「クリスマス？……ああ。なんかここら最近騒がしいと思ったら、そんなことかよ？」

欧州の某地方。その奥まった山脈の中に《アツプグルント黒い家》の本拠地は存在した。

そしてその本部に「彼女」の姿はあった。

濃い隈の付いた朱色の目。ボサボサの黒く長い髪。

寒い地方故にその格好はマフラーにコートなどの防寒着の重装備で、その顔の全貌を拝む事は難しい。

「フィーア・アツプグルント、後に「多々良 幽衣」と呼ばれることになる少女である。」

「テメエもあんなボンクラ共と同じことで騒ぐんじゃねエよ。仮にもテメエ、《シスターズ黒い家》の《姉妹》だろうが」

そんな彼女は今日の前の相手に怒りをぶちまけていた。

普通の相手なら彼女も馬鹿にしたような様子で嘲っただろうが、目の前の少女はそんな様子で嘲っても屁とも思わず、むしろ逆効果になるだろう。

「……でも。ボクは素直に姉様と祝いたいんだよ。今年のクリスマス、無事に生き残れたことをさ」

その目の前の少女は、フィーアと同じ姿をしていた。

だが全てが全て同じという訳ではない。

顔立ちと背丈は全くフィーアと同じなのだが、その髪は絹のように、肌は新雪の如く白い。



「あー、きつつき ックリスマス？どーでもいい」みたいな口ぶりだったのにその脅しからするとさては割とワクワクしてるんでしょ!!?」  
「やかましいいいいいいいッ!!?」

もういちいち突っ込んでいたらこの場で寿命が尽きるんじゃないかと幽衣は思った。故に、深い深い、本当に深い溜め息を吐いてから白雪の胸ぐらから手を離れた。

「はあ、はあ……!!?クソ、いねエモンはどうしようもねエが、アタイはゼツツツツたいにテメエと一緒にクリスマスなんて過ごすモンか!!?」

「ええー……。ダメなの？お願いします一緒に過ごして下さいなんでお願いしますから」

「ん?」

刹那、ファイアの脳裏に天啓が走った。

なんでもしますから。

なんでも、そうなんでもするとゼクスは言ったのだ。

この突如舞い降りた天啓にファイアは思わず口端に笑みを浮かべる。

これならば、この事態を切り抜けられると。

「今、なんでもするって言ったよね?」

「うん?そうだけど、それがどうかしたの?」

「よし、じゃア服脱げよ」

「……は?」

……2分後。

ゼクスは一糸纏わぬ姿で真冬の山の中に放逐されていた。

この地域の気温は冬になると零下を上回ることはなく、ましてや白雪がいるのは山頂近く。その寒さは体感で-10℃にもなるだろう。

「うう……寒い……。でも、姉様とクリスマスを過ごす為だ……。頑張ろう……。ヘックシヨッ!!?」

何故、ゼクスはこんなことをしているのか……。それはファイアの先

の一言が発端である。

「服を脱げ」という言葉から始まったフィーアの課したゼクスへの事件は非常に厳しく、危険極まりないものだった。

具体的には、ゼクスに服を全て脱がせ、《アップグルント黒い家》の近くにある山の中に放置しフィーアが迎えに来るまで耐え切れれば約束通りフィーアはゼクスに付き合うというものだ。

「に、しても……ちよつとヤバいかもしれないな」

体温調整がこの寒さで上手くいかない。下手を打てばこのまま凍死、あるいは体温を上げる為のエネルギーで餓死するかもしれない。

本音を言えば、かなり危険な状況に置かれていた。

「生きてるかなあ……明日の夜まで……」

ゼクスは白く揺蕩う息をほう、と吐いて満天の星空を見上げながらそう思ったのだった。

次の日。

その日は朝から5 m先も見えない程の吹雪だった。

「ひでエなこりやア。滅多にねエ大吹雪だ」

フィーアは、窓からその様を眺めていた。

これほどの大雪なのは生まれてからずっと《アップグルント黒い家》本部で暮らしてきたフィーアとしても数回しか見たことがない。

「こんな雪が来るって分かってたら、少しはマシなヤツにしてやったんだが……チツ、くたばっちゃいねエよなゼクスの奴」

幽衣は苛立たしげに背後に立つ影に同意を求める。

「ゲホツ……。そつたこと知らね、わあには関係ねことだはんでね。おめのやったことだはんで自分でカタばつけへ」

少し赤い顔で、訛った言葉で返事をする茶色のショートボブに銀色に輝く目をもつフィーアより頭一つ背の高い少女。

フუნフ・アップグルント。フィーアとはほぼ同期の仲間である。

「大体一晩付き合っつけてるばしだろ？了承へばいがつたんだば。そうしとけばこつたことにはまねがったのにさ、そさねがったせいであの



娘は死ぬかもしれぬろ?」

「わーったわかったよ!!?行きやいいんだろ行きやア!!?」

フィーアはフュンフのどこか責めるような口ぶりに耐え切れず、逃げるようにして外へと続く扉へと向かう。

そして扉を開け、銀世界を目の前にしてフィーアはフュンフの方へと振り返る。

「あと、その訛りいい加減直せよフュンフ。言葉が分かりづれエ」

「直す気はさらさらないよわあは」

その人を食ったような態度とニヤニヤと笑うフュンフの表情にフィーアは更なる苛立ちを覚えながらゼクスを置き去りにした山へと向かったのだった。

山に着いたフィーアを待っていたのは、次のような一言だった。

「メえええくくくいいいいクリつまああーースう!!」

結論から言えば、ゼクスはピンピンしていた。

山で冬眠している熊を銃殺し、その皮を剥いでコート代わりにし、冬眠に使っていた穴に籠っていたのだ。

「意外と早いお出迎えだったね姉様。ところでボクの服は?」

「……ピンピンしてるじゃねーか!!?フュンフの奴心配させること言いやがって!!?」

「あの……ボクの服は?」

「持ってきてねエよそんなの!!?まあいい、とりあえず家に帰るぞゼクス!!?」

コイツに関わるとロクな目に遭わない。

心配して余計な損をした気分だ。

フィーアは未だ裸のゼクスを連れて重い足取りで《アップゲルント黒い家》へと戻る。

その頃には日はもう落ちかけていて、雪の勢いも粉雪が舞う程度になっっていた。

《アップゲルント黒い家》の門の前で、フュンフが待っていた。

彼女は銀色の目でゼクスを認めると一言。

「ろー、わあの言う通りになつたびよん？」

「流石フუნフ、予測1mmもズレてないや。頼んで正解だったよ」

「あ……!?ちよつ、あーッ!?」

そのやり取りでフィーアは理解した。

何故あんなにフუნフがフィーアを責め立てるような口ぶりで喋ったのか。ゼクスが予定より早く来たフィーアに驚きもしなかったのか。

「て、テメエら……謀りやがったな!?」

「頼まいじゃ断らいねはんでね。悪がった」

とは言うものの、フუნフの表情は「テヘペロ♪」、あるいは「やつちまったぜ♪」みたいな様子で、ちつとも反省しているようには見えなかった。

「どれもこれも、全て姉様とクリスマスを過ごす為さ」

驚愕の表情でゼクスの方を向くフィーア。

ゼクスは微笑を浮かべて静かな、まるで湖底のような瞳でフィーアを見つめていた。

「クリスマスを用意は出来でらはんで、後はおめだづが来ればいつでも始めらいるぞ」

「じゃあ……行こうか」

「ちよつと、待って、待て!!?心の準備って奴がまだ!!?」

何を言ってるんだ、とゼクスはフィーアの腕を引っ張りながら楽しげに囁く。

「約束したじゃん。姉様が来るまで雪山で耐え切れたら……クリスマスを一緒に過ごそうって」

刹那、ぐいっとフィーアの体が強い力で引っ張られ、《アップダグレント黒い家》の中へと引き摺られるようにして入っていった。

「テメエと過ごすと同性的なのに貞操の危機を感じんだよオオオツ!!?マジで勘弁してくれゼクスウウウウウツ!!?」

「あはは、何言ってるの姉様。女同士で子供が作れるわけないじゃないか」

「じゃあ、せめて……せめて服は着てくれ

よーよーよーオオオオオツ!!？」

その悲痛なファイアの叫びは、雪深い山々に木霊したのであった。

……なお、クリスマス自体はフンフ曰く「ファイアはつまらないと盛んに言っていたが酒が入ってからは私とゼクスより楽しんでいた。今度は皆でクリスマスパーティーも良いかも知れない」ということだった。

## カウントダウン

《暁学園》にとって、その試合は文字通り「悪夢」と呼べるものであった。

なにせ一度に、それも彼らにとって圧倒的優位にあった試合で、暁の手勢が半数以上も敗退を喫ってしまったのだから。

まだ《風の剣帝》黒鉄王馬やサラ・ブラッドリリーなどといった有力な面々は残ってはいるが、それでも痛すぎる損失だ。唆されたとはいえ、白雪が幽衣と入れ替わった為に幽衣まで反則を取られて登録抹消処分を受けたのもそれに拍車をかけている。

「白雪はなんとか一命を取り留めました……が、意識が戻るのに時間がかかるそうです」

当の白雪を唆した男、ガウエインは《KORT》が根城としている廃ビルの一角にて、己が主人であるエムリスに対してそう報告した。

試合が終わりスタジアムに備え付けられた病院に担ぎ込まれた時、白雪はほぼ死にかけていた。全身が重度の火傷、片目は潰れ、臓器は軒並み破裂。よくも生きていたと思える程の有様だった。

そんな状態を救ったのは、《白衣の騎士》薬師キリコ。

とある理由で自身の抱える患者達が危篤状態に陥っていた中、目の前の重傷者である白雪を真っ先に助けた彼女は、正に医者 of 鑑と言えるだろう。

だが……それを、嘲笑う者がいた。

(余計な事を……くだらん。あんなネズミ一匹救ってご満悦ときたか、《白衣の騎士》)

心の中で、その所業をこき下ろすガウエイン。《KORT》に産まれた者は選ばれし存在であり、完璧な存在であるという考えを持つ彼にとつては、白雪はこの産まれかも知れない雑種風情であり、《KORT》の名に泥を塗った裏切り者という認識なのだ。

「……そう、ですか。白雪くんが……ガウエインくん、今の白雪くんの居場所は？」

「ええ、はい。今はスタジアムから府内の病院に移動されました。い

かが致しでしょうか？お望みとあらば、……始末も厭いません」  
「く、くくきくきくかくく。おいおいガウエイン、本音漏れてんぜ？ドクター、俺アさ別に始末しなくてもいいと思うがねー。メンドーだし」

ガウエインの後ろからブルーノがけたけた笑いながらエムリスに指示をあおる。

一方のエムリスはというと、彼らを背後にして、廃ビルの窓から下界の光あふれる夜景を見下ろしながら、物憂げな表情で考え事をしていた。

「ドクター？ドクター？……へんじがない、ただのしかばねのようだ」

「殺すな、勝手に!!」

やがて、ゆつくりとエムリスがガウエイン達へと振り返る。その表情は、堅い決意に満ち満ちていた。その様子に、普段やかましいブルーノでさえも押し黙った。

そして、彼は……こう呟いた。

「分かりました。じゃ、やめましょう」

「……は？」

一体何と言ったのか、理解がつかなかった。

やめよう？やめようとは、一体何をやめるのだ？

理解のついていない2人に対して、エムリスは『やめる』という内容の説明を始めた。

「えー、やめると言ったのは、この計画を私、エムリス・アンブローズは任された訳ですが、今この瞬間を持って降りさせて頂きます。人数も減りましたし、後は月影総理に任せます」

「え?!」

「後、《解放軍》<sup>リベリオン</sup>も辞めます。あちら側に対して相応の義理は果たしましたし、これからは《KORT》<sup>コルト</sup>単体で頑張っていきましょう！」

「は、はい？ちよ、ちよっと待って下さいドクター？それは、つまり……」

突然にして、突拍子もないことを言い始めたエムリスに対して理解がますます追いつかなくなるガウエイン。

「はえくすつごい……たまげたなあ」

一方、ブルーノはとうに理解を放棄してエムリスに対して賛辞とも驚嘆とも思える言葉を送っていた。

「あ、耄碌した訳ではありませんよ？白雪くんがもう少し残っていれば私も待ちましたが、脱落してしまったなら仕方がないですね。私としてもそろそろ準備はしたい頃でしたし、丁度良い頃合いかもしれません」

エムリスは淡々と、ほんの少し楽しそうに語り始める。

彼は見通しているのだ。現実ではないものの、数年の間幾万幾億と続けて来た天文学的な演算によって導き出した最もあり得る未来の形を。

それには、《KORT》に降りかかるであろう災厄も導き出している。故に、エムリスは研究の材料が欲しかった。

天才である彼が100年もの時を費やしても未だ解き明かす事の出来ない、人の心と魂が持つ力の原理メカニズムを。

その為には、どうしても必要な人材が要る。

「私は、期待しているのですよ。騎士としては最低……いえ、それすら満たない力しか持っていないはずであるのに、今最強の座を掴み取るうとしている『黒鉄一輝』という存在に」

あれは素晴らしい、とエムリスは陶醉した気分になる。

久しく見なかつた逸材。あれを逃したくはないと。

ふと、エムリスは気付く。この場にいない二人、ランスロットとアグロヴァルがこの場に来たことに。

彼らは、ガウエインとブルーノに一切気配を悟らせずに部屋の隅に立っていた。2mを超すランスロットがそんなことを行えるのにも驚異的な物があるが、アグロヴァルに至っては気配どころかその姿の詳細さえも同門の者達に悟らせない。

ランスロットの存在が元々いた二人に分かったのは、彼がその痩せこけた身体に染み着くようにべつとりと鮮血と鉄臭い芳香を漂わせ

ていたからだ。

「ふむ、その様子だとしつかりこなしたようですね。ご苦労さま、ランスロット。私の可愛い息子よ」

その言葉に敬礼するように、ゆらりとランスロットは僅かに頭を垂れた。

エムリスは《解放軍》を辞めるにあたり、ランスロットに《解放軍》の大阪支部の潰滅を命じていた。

理由はごく簡単、そうでもしないと辞められないからである。

さて、これを以て彼らの鎖は解き放たれた。もはや誰も彼らを縛ることは出来ない。何もかも自由の身だ。

「さあ、自由を手に入れてから最初の仕事です。大会が終わり次第、黒鉄一輝を捕え、私の元へ連れて来てください」

「手段は？」

「問いません」

「生死も？」

「問いません。己の殺しの理由も、誰を犠牲にしても、全て不問にします」

刹那——彼らから歓喜と共に膨大な殺気が溢れ出す。

《K O R T》が最強にして、最悪の傭兵集団である理由——

——それは、何もかもを彼らの気分次第で変えてしまうからである。味方も、契約金も、被害も、エムリスからの指示がなければ彼らの性格とその時の気分次第で決めてしまう。下手すれば個人という点で最強の傭兵である《砂漠の死神》よりもタチが悪いのだ。

そんな彼らにエムリスは自由に遂行しろ、と命令した。

「さあ——始めましょうか」

大阪、ひいては日本そのものを巻き込む災厄のカウントダウンが……今、始まった。

@

「……」

大阪府内にある大病院。その一室にて、多々良白雪は未だこんこんと眠り続けていた。医師からは、2日もすれば目覚めるとは言われた

が、隣で一睡もせず看病する幽衣にとってはどうでもいいことだった。

「……なんで、なんでテメエはあの時一人で突っ走りやがった……?!」  
誰も答える者のいない病室で、彼女はそう一人問いかける。

「そんなに、アタイを大事に思ってたのか?こんな道端でいずれくたばっちゃうような、クソみてえな存在を?」

何故だろう。何故こんなに胸が熱くなる?何故喉が詰まりそうになるのだ?

「それとも……信用出来なかったのか、アタイの強さを……?」

何だ。何なのだ一体。この頬を伝う雫は一体、何だというのか?!

「なあ、答えてくれよ……白雪……ッ!!」

静かな病院の夜。その日、誰かがすすり泣く声がか細く聞こえたという。



## 治せない病気

自分は、どこかおかしい。そんなことを、多々良 幽衣は病院の待合所で菓子パンを一口齧りながらぼんやりと思った。

あれから、1日が経とうとしていた。その間にも《暁学園》としての情報は逐一入手している。その中でも、最も衝撃を与えたのは《KORT》の離脱、そして《解放軍<sup>リベリオン</sup>》の脱退であった。……が、幽衣にはそんな重大な情報がどうでも良いように思えて仕方がなかった。

白雪が倒れてから何もかもが狂ってしまった。イラつきも、怒りも何もなく、ただ空虚が幽衣の心を支配していた。

（やっと、帰れるってーのに。初めてだこんな気分は……『実家に帰りたいくねエ』なんて、思うはずなんてねエのに）

毎日煩わしく思っていた白雪の変態行為も、いざ彼女がいなくて寂しく感じられてしまうのは、きつとそんな毎日に慣れていたからだろう。白雪はこちらの気分も知らず、未だ眠り続けている。つい1時間程前にルームメイトと名乗る少女が見舞いに来たのだが、幽衣はけんもほろろに追い返した。

思い返すとその時の自分はどこか変だった。相手は打算なしに、心の底から白雪を見舞いに来ていたのに自分はそれを拒否した。

それもただの拒否ではない、『死んででも行かせる気はない』とでも言いたげな感じに対応で、だ。別に彼女が白雪の所へ行つたとしても、とって食われるという訳でもないのに。

「ひよつとしたらアタイ、イカれちまったのか?」

厳しい任務が続く暗殺者の身だ。幽衣はそういう人間や仲間は何人も見知っている。が、どうにも腑に落ちない。

「でもなア……そーいう奴は自分が『壊れてる』ってことを理解出来ねエはずなんだがな……アタイは違うのか?」

「なら、私が診察してあげましょうか?」

「ッ……!?」

突如背後から耳の裏にかけられた声と吐息。

幽衣はこれを知っている。数日前、《七星剣武祭》の立食パー

テイーにて、同じことをされたから。

振り返って、幽衣は気怠げな声と共に目の前の犯人の名を吐き出す。

「あー……テメエは……薬師、キリコだっけかア？《白衣の騎士》サマがなんでこんなところにいやがる？」

鶯色の髪をした白衣の少女、薬師キリコであった。

彼女はあの時と同じように余裕のある笑みで、幽衣の問いに答える。

「ふふ、広島の方の患者はクランケすぐに治してきたわあ。それに、あなたの妹さん……白雪ちゃんのアフターケアもしたいところだったしね。もののついでにやってあげるわよ」

様々な手術を行ってきたキリコにとっても、今回の白雪のような重傷者は久しぶりに診察した。ひよつとすると、前《七星剣王》諸星雄大のそれよりも重傷だったのではないかと彼女は思っている。

それ故に、万全の状態で完治させる為にわざわざ彼女は広島から飛行機で寝る間も惜しんで大阪に戻ってきたのだ。

「まあ、やってあげるといいうか、強制ね。あなた全然寝てないでしょ。この間見たときよりも目の隈が酷いわよ？姉妹纏めて診てあげるから、ついてきなさい」

「へーへー……わかりましたよ」

幽衣としても逆らって体を強制的に操られるのは勘弁だ。素直に従うと、白雪の眠る病室へと歩き出した。

@

「……うん。流石私ね、なんともないわ。あと数時間もあれば目覚めるって所かしら。……それで、次はあなたの診断だけれど」

魔力で以って白雪を診察しながら幽衣の話聞いていたキリコであったが、白雪の診察を終えると続いて幽衣の診断へと乗り出す。

「精神科は専門じゃないけど、あなたの病気はそれなりに見当はつくわ」

「なんだよ、アタイの病気は？薬で治るものか？」

「うーん……無理かしらねえ」

だって、とキリコは身を乗り出して幽衣に今彼女が患っている病気の名を告げる。

「あなたのそれは、『恋』の病気なんだから」

「……あ？」

あまりに想定外の答えに惚けたような声を上げる幽衣。

続いて、その顔が真っ赤に染まっていく。

「て、テメエツ!!?ンなことがある訳ねエだろーがツ!!?アタイが恋?暗殺者のアタイが?馬鹿言え!!?しかも白雪とだなんて……そんな馬鹿なこと……」

「思い当たる節はあるみたいだけどね?」

「……ツ!!?」

思い当たる節なんて、……いくらでもあった。恐らく、自分は白雪を喪うことを恐れているのだろう。だからあの夜あんなことを言った。彼女を置いていくことに気後れを覚えた。そして、彼女に近づこうとしたルームメイトの少女を門前払いしたのは……その少女に、自分が嫉妬していたからなのだから。

「……ツ……クソツ!!?」

もはや否定も出来ない悟った幽衣は、悪態について目の前のキリコを睨むぐらいしか出来なかった。

「そんなに睨まない。私も暇じゃないし、そろそろ行くわね。あなたの身体の不調はもう直しておいたから」

キリコはくつくつと笑いながら席を立て、病室のドアに手をかけて出て行こうとする。その前に一度幽衣の方を見やってから、医師ではなく、一人の人間としてアドバイスを送る。

「それに、その病気は大切にしておきなさい。きっといつか、あなたにとって素晴らしいものになるはずだから」

その言葉の真意を問おうと幽衣が口を開いた時には、もう彼女の白衣の裾がドア越しに見えていた。

『あ』の形で口を開けたまま、幽衣は暫し沈黙する。そして、口を閉じてから眠り続ける白雪の手を握って一人ため息を吐いたのだった。

そんな二人だけの病室を、外から伺う者がいた。

《K O R T》が一人、《群雲》アグロヴァル。

彼はその高度な気配の遮断技術によって、誰にも知られることなくここまで侵入してきていた。

自由行動を許された彼が行うのは……白雪の誘拐。そのためには、一緒にいる幽衣を排除する必要がある。先程部屋から出てきた医師の気配が十全に離れたのを確認してから、片手にサバイバルナイフ型の《霊装》<sup>デバイス</sup>を顕現させながら病室のドアに手をかける。

様子を探ってみると中の相手はこちらに背中を向けていた。ならばカタは、一瞬でつけられる……!!?」

「……よお、わざわざ真っ正面からご苦労なこった」

『……!!?』

ドアを開けた刹那、ナイフを振り抜く前に……彼の首に、チェンソーの刃が突きつけられていた。幽衣の《霊装》<sup>デバイス</sup>である。

「白雪に用件があるなら、今は無理だぜ。代わりにアタイが請け負ってやつから」

『……なら、言わせてもらおう。その娘をこちらに渡せ。そうすれば何もしない』

唖れた声で伝えられた理不尽な用件を、幽衣はギザギザな歯をむき出しにして笑うと、

「ギギツ、悪イが……こっちもコイツに用があるんだよ」

拒否すると共にチェンソーを振り抜く。

皮一枚でアグロヴァルは身をよじって回避し、相手へと応手を返そうとして……立ち留まる。

何故なら……幽衣が意識のない白雪を両手で、まるでお姫様抱っこのように抱えて、いつの間に関けたのか窓べりにへと立っていたから。

あと一歩でも下がれば、25 m下のコンクリートに叩きつけられるだろう。

その状況で幽衣はなんでもないように、何も無い虚空に身を任せた。

させじとアグロヴァルが疾走し、手を伸ばしてその服を掴み取ろうとするが、その指先がわずかに端っこを掠めただけに終わり、幽衣と白雪は共に窓から姿を消した。

『馬鹿なことを。共に死のうとするとはな』

そう吐き捨てる、アグロヴァルは窓から顔を出して地上にあるはずの二人の死体を探す。

が、

『ッ☒な、いない……だど？どこに消えた☒』

あるはずの死体がないことに狼狽するアグロヴァル。だが、その真相に気付き、己の失態を悟った。

(しまった……奴の能力は『反射』!!？落下した際の衝撃をそれによって無効化したとすれば死体などあるわけがない!!？)

その彼の推理を肯定するかのように、幽衣と白雪が落ちたと思われる場所には大きな亀裂が走っていたのだった。

(あー、もうッ!!？クソ、《KORT》の野郎がなんでこっちに来てんだよ!!？なんか勢いで白雪も連れて来ちゃったし!!？白雪イ、テメエ起きたらこの責任は必ず取って貰うからなッ!!？)

一方、病院を抜け、白雪を抱えながら大阪の街にへと繰り出した幽衣。どこか一時身を隠す場を探すと、病衣のままの白雪の服を変える為に、《暁学園》の生徒として泊まっていたホテルを一路目指して走り出したのだった。

## 目覚めと告白

「……ホント、アンタには感謝してるよ」

ホテルの一室にて多々良幽衣は目の前の相手に素直に感謝を述べた。

アグロヴァルとの一件にて病院を出たはいいものの、仮にも相手は《K O R T》、すぐに追ってくるだろう。その時に幽衣がとれる行動は2つあり、絶えず場所を変えて逃げ続けるか、あるいは……うかつに手出し出来ないような相手の元に逃げ込むことだ。

そして幽衣が選択したのは後者の行動。選んだ人間とは……。

「まーっただよ。本来ならウチには何の利益もないのにさ。アンタらはもつとウチに感謝してもいいんだぜい？」

《K O K》三位にして、破軍学園の臨時教員である西京寧々。

面識があり、なおかつ《K O R T》が迂闊に手を出せない程度の強さを持つ騎士ときて、幽衣に唯一心当たりがあつたのは彼女だけだった。

流石にいきなり飛び込んできて「匿ってほしい」と開口一番言われた寧々は嫌そうな顔をしていたものの、幽衣が背負っていた白雪が病衣のままであつたことや幽衣の緊迫した表情を見てなんらかの事情があつたと察してくれた。

「しっかし、かの《K O R T》に追われるなんて何しでかしたんだい？」

「知らねエ。こつちや何もしてねエツてのに、いきなりあつちから襲って来やがったんだよ」

この点に関しては本当に二人は無実の身である。

強いて言うなら白雪の行動が発端だがそれだつて唆されたものだから、白雪が全て悪いとは言い切れない。

と、ベッドに寝かせていた白雪が大きく身じろぎして、その瞼が弱々しく痙攣した。

この様子を幽衣は何度も見てきている。そして同時に歓喜の想いも湧き出した。何故ならば……白雪が目覚める時の合図だったから

だ。

だが、それを表情には出さずにあくまでも冷徹に幽衣は行動する。

「……そろそろ目覚めの時、か。悪イが、ほんの少しだけ外してもらえねエか。コイツと1対1で話し合いたいんでな」

「人遣いの荒い奴だーねえ……はいはい分かったよ。ま、その分の対価も払ってもらえるんだよねえ」

「約束する」

その言葉に満足したのか、寧々は紅色の袴の袖をなびかせて部屋の中に幽衣と白雪を残して暫しの間退室していったのだった。

@

「……ん、うあ……あ、姉様……?」

「起きたか。散々人に迷惑かけさせやがって」

起きたばかりの白雪の記憶は混濁していたが、やがて覚醒していくと共に自分の犯した事実に関わらず白い顔色を更に白くして震え始めた。

「あ、あ……あの、その、ね、姉様」

恐る恐る口を開いた瞬間、エンジンの唸り声を上げて彼女の鼻先1cmに駆動するチェーンソーの刃が突きつけられる。

否が応でも話させない、そんな心理の読み取れる幽衣の行為に益々体の震えを強くする白雪。

「う、あうう……」

「……あの時。なんでテメエはアタイに全て話してくれなかった?」

「そ、それは……その、あの……」

「その口は何の為に……? アア喋るんならよオ、きつちりと喋れツてんだよツ!!?」

「ひいひいツツ!!?」

部屋中に響き渡る怒号に体を丸めて悲鳴を上げる白雪。それで観念したかのように、今度はしつかりとした口調で話し始めた。

「……あの時。あんな事をしたのは、姉様を傷つけなくなかったからだよ。あんなバケモノを相手に、姉様が捌られて負ける様なんて見たくなかった」

全て、彼女を愛しているが為に。愛するが故に白雪は幽衣を手にか

けて成り代わり……重傷を負った。

その間の幽衣の想いなど知る由もない。どれだけ彼女が苦悩したか、ただ眠っていた白雪には知ることはなかった。

「でも、傷つけなくなかったから先に姉様に危害を加えるなんてき……僕は狂ってるよね。姉様、失望したでしょ？こんな、こんなクソみたいな女に好かれたなんて……っ!!?」

「失望なんかしてねエよ、このバカ」

え？と半泣きの表情で白雪は幽衣の顔を直視する。同時に、幽衣は白雪の体を抱き寄せていた。

「テメエがクソだって？だとしたらアタイも同じだよ。アタイが強くなかったばかりにテメエだけに色々背負わせちゃった」

幽衣だって後悔していた。もつと自分が強ければ、白雪はそんな行動に走らなかつたかもしれない。その想いは、鎖のように未だ彼女の心を縛っている。

だから、と幽衣は白雪の頭を強めに小突いて笑みを浮かべる。

「これで、おあいこだ。これでアタイとテメエは対等、二人で全部背負っていくぞ。苦悩も怒りも悲しみも、そして喜びも」

「え、それ、って……」

頬を赤らめながら、その真意を問おうとする白雪。

その唇に、幽衣は自らの唇を重ね合わせた。

「ッ……」

「……っ、はア。なんだよ、顔赤くしちまつてさ。長年テメエが望んだ事だろーが」

そして、混乱の極みに達した白雪に、幽衣はいつもの意地悪げな笑顔を浮かべてその言葉を紡ぎ出す。

「好きだ、白雪。テメエのせいでアタイはこうなっちまったんだから、ぜってー責任取れよな？」

「ふわ、ふわああああ……!!?」

口元を両手で隠しながら、声にならない悲鳴を上げる白雪。

そうだ、自分はこの顔が見たかったのだ。期待と喜びに駆られて幽衣は後退りする白雪に言葉を投げかける。





認しながら、ガウエインは突然来訪した仮面の男を見上げた。

「おう。今回イツキとか言った奴の捕獲任務だけどき、手組まない？俺ちゃんとお前とでさ」

「なるほど。確かにその方が任務の遂行に有効だな」

その言葉にチツチツチと指を振りながら、ブルーノは《狂笑》の二つ名に相応しい笑みを仮面ごしでも分かるほど浮かべると更に言葉を続ける。

「でもお、そんだけじゃーたーりねーえーな。ランス兄とドクターの力も借りたいところさね」

エムリスは手段問わず、と言っていた。なるほど、確かにそういう手もあるだろう。ガウエインはブルーノの提案に思わず舌を巻く。

「すぐにドクターに意見を具申しよう。ブルーノ、計画はお前の十八番だろう、その辺りは頼めるか」

「もちのロンよお。いやあ楽しくなってきた、道化師としての腕の見せ所って奴だあ!!？ヒヤアハハハハハハハツ!!？」

高笑いを上げるブルーノ。忍び笑いを漏らすガウエイン。大阪に巻き起こる災厄の期限はゆっくりと、しかし確実に迫って来ている。

## 猛毒の支配

《KORT》が《解放軍<sup>リベリオン</sup>》から離反したというニュースは、一両日と待たずに全世界へと駆け巡った。

これにはありとあらゆる人々が驚いたが、一番驚いたのは当の《解放軍<sup>リベリオン</sup>》の幹部達である。

なにせ《KORT》を束ねるエムリスはどちらかと言えば穏健派に属し、そんな大それたことをしでかすとは到底思えない人間だったからだ。更に言えば、今人材不足に悩まされている彼らにとって《KORT》の離反はとんでもない痛手。故に早急に彼らを説得して元鞘に納めなければならぬ。

そして、この情報に世界で誰よりも憤怒に燃え上がった者が一人孤独に立ち上がった。

《解放軍<sup>リベリオン</sup>》の幹部にしてエムリスと古い知己の仲でもある、《隻腕の剣聖》の異名を持つ男、ヴァレンシユタインである。

「一体どういう見だエムリス……!!?」

「どういう見、ですか。私はあくまでもこれが一番の選択と申ったのですが……」

現在エムリス達がアジトとしている大阪にある廃ビルの一角にて、両者は向かい合って対峙していた。

その二人を取り囲むように、ガウェイン、ブルーノ、ランスロットの3名が傍観の構えをとっている。

「馬鹿な真似をしおつて。悪いことは言わん、早々に《解放軍<sup>リベリオン</sup>》に戻ってくるのだ」

「戻ってこい、と言われましても。こちらから言い出した手前、すごすごと引き下がるのもなんと云いますか、馬鹿みたいじゃないですかね？」

千日手のような終わりのない、堂々巡りの話し合いを続ける二人。かれこれ2時間近くこの状態が続いている。

やがてこれにしびれを切らしたヴァレンシユタインはエムリスだけではなく、その周りの《KORT》の面々の説得にかかる。

「貴様ら、《解放軍》を裏切る気かッ!!? かつての世界を変えるという気概はどこに落として来たというのだ!!?»

「私は別に、そこまで興味はないのですが……ドクターに従っていたらこうなっていただけですよ、ええ」

「……」

あまりに腑抜けた返答に顔を怒りに赤く染め上げるヴァレンシユタイン。ただ一人、ブルーノは笑顔を貼り付けて突っ立っていたが、それを見て嘲るように声を上げる。

「あつは。気概を忘れたのはそつちじゃねーの? 《解放軍》創立当初はさ、バカスカやべーことしてたってドクターから聞いてたよ」

でもさ、と彼は長い腕をゆらりと広げてげらげらと嘲りの色を強める。

「今や《解放軍》は金持ち共にこき使われて、狂犬から首輪のついた忠犬になっちまった。ワンワンってな。ヒヤハハッ」

「何を……!!?»

「何も言えねーってこたあ凶星かあ? ま、いーけど。《KORT》はこれから過去に遡る。過去の《解放軍》に。あの孤高にして素晴らしき組織に戻るのさ。腐り切ったテメエらに変わってさ。」

それともあれか? アンタももう腐っちまったってか? 」

その言葉に、とうとうヴァレンシユタインの堪忍袋の緒が切れた。激怒とは、最低限の常識すら奪い取ってしまうものであり、この場合は彼は《KORT》の面々に対し禁忌の一言を怒鳴りつけてしまったのである。

「こ、……この『人モドキ』共がッ!!? そのエムリスが気まぐれを起こさなければ生まれてすらこなかった落ちこぼれの、実験動物風情が、この《隻腕の剣聖》に対してよくもそんな大きな口を叩けたものだなアッ!!?»

「……抜かしたな、老いぼれが」

その言葉にブルーノを押しつけて己の《霊装》、《玉虫籠手》を顕現させて詰め寄るガウエイン。

『人モドキ』『実験動物』。なぜこの言葉が彼らに対して侮辱と取られ

るのか、それは《KORT》の面々の出生に秘密がある。

彼らは、エムリスがとある目的の為に己の遺伝子と有力な女性のそれとを交配させ、試験管の中で育てた……いわゆる《人造人間》と呼ばれる存在だからである。

彼らには『母親』という家族の概念は存在しない。あくまで存在する家族は『父親』であるエムリスと彼の血を継いだ『兄弟』達しかない。

故にこそ、彼らには意地というものがある。

「我々は神の才能を持つドクターの血を継いだ者達だ。母の顔など知るか!!? ドクターさえいればそれで良い!!? 我々の侮辱は即ち、我が父エムリス・アンブローズの侮辱!!? その罪は万死に値するツ!!」

「ほざけ青二才!!? 貴様らこそ、《解放軍》<sup>リベリオン</sup>を裏切った罪は到底許されるものではないわツ!!?」

火花を散らす両者を交互に見やって、もはや衝突は免れないと悟ったエムリスは、深くため息をつけてからガウエインに向けて指示を出す。

「殺すことだけはしないように。頭は固いですが、彼は数少ない友「ヒイヤツハハハー……ツツ!!?」

紛うことなき奇襲。エムリスの言葉を遮りながら攻撃を仕掛けてきたのは《狂笑》ブルーノである。

彼だつて《KORT》の一員、ヴァレンシユタインの言葉にはとうに沸点を超えていたのだ。

ガウエインの体の影から野獣の如く疾走し、糸の《靈装》<sup>デバイス</sup>で編み上げた槍で以ってヴァレンシユタインの胸を貫かんとする。

だが、それは悪手。何故ならばヴァレンシユタインの能力は《摩擦》を操る力。摩擦力をゼロにされればどんな攻撃も通用しない。

「馬鹿が。この程度で私を倒せるとでも?」

そう嘯いたヴァレンシユタインへと走った槍の一閃は見事につるり、とその表面を滑り、バランスを崩したブルーノに彼は巨軀を生かした蹴りを放つ。

「ぐえッ!?」

その時、不思議な現象がブルーノに起こる。体に突き刺さった蹴りによって彼は窓ガラスへと叩きつけられた、がしかし窓ガラスが割れる気配がない。

それどころか衝撃を吸収するように彼の体を包んで撓み、再びヴァレンシユタインの方へと弾き返そうとしている。

《狂笑》ブルーノ、概念干涉系能力《物質弾体化》<sup>ゴム</sup>の持ち主である。

「……ならば、今度は叩ッ斬るまでだ」

「させると思っているのか、くたばり損ないが」

ブルーノを倒そうとするヴァレンシユタインに立ちはだかるは、拳を構えたガウエイン。

それに構う様子もなく、ヴァレンシユタインは大剣の《靈装》<sup>デバイス</sup>を顕現させ、居合いの構えを取る。

彼の《伐刀絶技》<sup>ノウフルアーツ</sup>である《山斬り》<sup>ベルクシユナイデン</sup>は超広範囲にして防御不能の攻撃。

さらにガウエインの武装は籠手、どうやってもヴァレンシユタインの攻撃が先に入ってしまう。

「——《山斬り》<sup>ベルクシユナイデン</sup>」

だからこそヴァレンシユタインは躊躇うことなく必殺の大剣を抜き放ち——、

「《能力支配》<sup>アビリティジャック</sup>」

その一閃をガウエインがあっさりと『弾き飛ばした』光景に、愕然とした。

そして、その一瞬をガウエインは見逃すはずがなく、ステップインすると共に胴に渾身のストレートを叩き込む。

「ぐ、ガッ!?」

「ギャハツハハアツ!!」

そこへ仰け反った所にブルーノがゴムの勢いも合わせたドロップキックを浴びせ、ヴァレンシユタインは壁へと勢いよく叩きつけられて動かなくなった。

「……死んじやったかねー？」

「まだ死んではない。ドクター、この老骨をいかが致しましょうか」  
「うん、病院に送っておきなさい。このことは後々彼に謝るとするとして……2人とも、本当に成長したね」

無法者を片付けた2人に労いの言葉を送るエムリス。

しかし、なぜヴァレンシユタインの攻撃は不発に終わったか？

それは、ガウエインの能力が深く関係している。

彼の能力は概念干渉系——《支配》。

生物に己の魔力を送り込み……その能力、身体機能を思いのままに操ることの出来る力である。

無論、人間などには相応の魔力を必要とするが……ガウエインは『一手間』を加えてそれを簡単なものにしていく。

「本当に、虫というのは良いですね。小さく、小回りも替えも利く。だからこそ……利用価値がある」

ガウエインが懐から取り出したのは試験管に入れられた数匹の蚊。彼はその蚊に魔力を送り込み、支配して対象の血を吸わせる。

そして血を吸わせると同時に彼の魔力を送り込むのだ。小さい為にごく少量しか送れないものの、それでも能力を1〜2秒支配下における。そしてその時間さえあれば、更なる魔力を送り込む一撃を放てるのだ。

そうこうしているうちにランスロットがヴァレンシユタインを担いでビルから歩き去っていく。それを見送ってから、エムリスは残された者達に向けて宣言した。

「さて、これで今度こそしがらみから我々は解き放たれました。3日後の七星剣舞祭の終わりの時が……始まりの時です」

これにて、《KORT》は真に世界に解き放たれた。彼らがいかなる災厄を、あるいは変化を世界にもたらすのだろうか。今それを知るのには、エムリス・アンブローズ唯一人だけであった——。

## 姉妹と《KORT》のなんやかんや

「……なーるほど。とりあえず、あんたらがうちを頼って来たのは理解出来たよ」

ホテルの一室にて白雪から《KORT》の面々の能力、及び情報を聞いていた寧々は渋い顔をして天井を見上げた。

それもそうだが、《支配》の能力持ちに、性別も年齢も分からない暗殺者などという埒外の存在を抱えている組織に追われては、下手な所に逃げれば即刻捕まっていただろう。

それならば敵でこそあるが《KOK》Aリーグ3位、《夜叉姫》の異名を持つ寧々の元に飛び込む方が安全である。

飛び込まれた方は迷惑であるが。

それにしても、と彼女は呆れたような調子でベッドに座っている白雪にへと語りかける。

「あつさり言ったねえ。問題なかったのかい？」

「?いや、別に?あの人やランス兄の能力なんてバラしたって……不思議と負ける未来が見えないんだよね、僕にはさ」

《KORT》の一部メンバーやエムリスはこの星の理の外にある存在。白雪はそんなこと知る由はないが、本能で彼らが自分とは何か違うものであることを察していた。

「……でも、今一番問題ありそうなのは、後ろの方だけどねえ」

「……うーん」

そう言いながら二人は背後の幽衣を見やる。

「……あー……うう……」

何故か、彼女はうずくまって頭から毛布を被って呻き声を上げ続けている。

別に怪我や病気ではない。先程白雪へ送った自分の口説き文句の内容に、今更ながら小っ恥ずかしさを感じてきたのである。

「良いよねえ、口説く姉様も恥ずかしがる姉様も。自分に酔った姿も中々良いものがあつたなあ」

「白雪イ……あとで覚えてやがれよオ……!!?」



「……こいつら、ここで匿ってて本当に大丈夫なのかねえ……?」

末期的な二人の關係に今度は別の意味で渋い顔をする寧々。

しかし、今度は匿うは匿うで、新たな問題が発生することになる。「でも参ったねえ、明日うち仕事あるんだよ。試合の実況でき、その間あんたら守れねーけど、どうするよ?」

「あ、そっか。まあ大阪観光でもしながら場所を変え続けて移動するよ。一箇所に留まるよりかはマシだと思うけど」

「それがいいね。うちとしてもその案には……つと」

話を途中で切り上げると、耳元の辺りを両手でパンツ!!?と打ち鳴らせる寧々。その両手を広げて、「早速来やがった」と一言呟いた。

見ると、その小さな手のひらに潰れた蚊の死骸が存在していた。その骸には、僅かだが緑色の魔力が纏わり付いている。

「成る程、こいつが《ベルゼブブ蟲使い》の異名の所以かい」

「……?」

「奴さんは虫に《支配》の魔力を注ぎ込んで、うちか、あるいはあんたらにそれを注入させる魂胆だったんだろーねえ。確かにこんな小虫、刺されたってなんとも思わねーはずだ」

以前ヴァレンシユタインを破ったのも同じ方法。だが寧々は常に常在戦場の心意気で行動している。この程度でやられるほど《夜叉姫》の名は安くはない。

「確かにこいつあ厄介だ。……だがタネが割れちゃった以上、そう簡単には抜かせねー。あんたら、とりあえず今日はここから動くなよ。明日は死ぬ気であつちこつち移動しまくれ」

「うん」

「あともう一つ。マジに《KORT》がテロ起こすときたら、流石にうちら教員だけじゃ手が余る。観光ついでに大会出場者に会ったなら、一応協力を仰ぐよう耳に入れてくれよ」

「……分かったよ」

気恥ずかしさからようやく復帰した幽衣が掠れた声で返事をする。と、寧々はにっこりとした笑顔に変わって、二人に何かを投げ渡す。

それは……TVゲーム機のリモコン。

「じゃ、ここで何もしねーってのもアレだしゲームしようぜゲーム!!  
?一人だと飽きが来てねえ。あんたらマ●オ分かる?」

「そんぐれー分かるっての。なんだ、マ●オカートでもやんのか?」

「あー、このゲーム前に破軍でやったことある」

「ふっふっふ。うちはこー見えてもけっこー強いんだぜい?あんたら  
ボコボコにしてやつから、かかってきな!!?」

「コイツ汚ねえ!!?自分の有利なゲームで勝負とかズリイぞ!!?」

@

「……チツ。失敗したか」

ランスロットがヴァレンシユタインを病院へと送っている間、ガ  
ウエインはアグロヴァルの電話越しの依頼により虫を使って『仕込  
み』をしようとしていたのだが、それがあつさり失敗したことに苛  
立ちを覚え舌打ちした。

「手段は悪くはないが、相手がダメだったな。《夜叉姫》相手に通用  
する技術ではないか……」

「ま、失敗して良かったんやないかーい?ドクターが『一輝少年の捕獲  
にだけ専念しろ』って言ってたから、そのアグなんたらもドクターの  
指示に従うだろーねー」

そう、この時もはや幽衣と白雪、二人の危険はどうに過ぎていたの  
だった。なので別に外に出ている大丈夫なのだが、二人がそんなこ  
とを知る由がなかった。

「ところで、ドクターはどこに?入り用ならば私が行こうと言いた  
かったのですが」

「それ、遅いよお☒もう行ったよドクター、なんか買いたいものあるつ  
て言ってさっき出てっちゃったーよおー」

「き、……貴様という奴はツ!!?何故ついて行かない☒ドクターは今  
脱獄囚の身なのだぞツ、万が一捕まったら責任は取れるのか!」

その呑気な言葉に、赤べこも真つ青の勢いでブルーノの首を揺すり  
まくるガウエイン。一方ブルーノはブルーノで揺すられながらケラ  
ケラと笑っている。

「へーきだよオ。百貨店が集中してる所だから人混みに紛れて分から

んってばよ」

ブルーノの言葉は正しいだろう。仮にもエムリスは《デスベラード魔人》、そう簡単にやられるほど弱くない。ただ、問題であったのは……。

「……あー、もうっ!!? なんなのよあの人混みは!!?」

「ベスト8が3人もいるってこともあるし、仕方ないんじゃないかしら。もう通り過ぎた後だし、気にしないで行きましょう」

「あ、お兄様は何かここで買って行きますか?」

「うん、そうだね。僕も欲しいものがあるから買っていこうかなとは思ってるよ」

大阪にある大型百貨店の一つ。

「……はあ。やれやれ、凄い人混みでしたね。大阪というのはこんなにかくさんの人がいるんですねえ」

《紅蓮の皇女》ステラ・ヴァーミリオンに《深海の魔女》黒鉄 珠雫、そして今彼が最も気にしている存在、《ワーストワン落第騎士》黒鉄 一輝達が入っていった百貨店に、何の因果か偶然か、《神代の魔術師》エムリスが入っていったのである――。

## 邂逅、最弱の騎士と神代の魔術師

参ったな、とエムリスは誰に言うでもなく呟いた。

なんとなく予感はしていたのだ。予感はしていたが、確信はしていなかったし他の面々はエムリスから仕事ということでも久しぶりに張り切ってしまったっている。到底駆り出すことなんて出来ない。

だからこそ……今彼は、デパートの中で迷子になっていたのだ。

齢100を超える爺が迷子なんて徘徊かと思われてしまうかもしれないが、生憎エムリスは体も心も20代のままで止まっている。

それはそれで恥ずかしいことだが。

「うーん、やっぱり誰かについてきてもらうべきでしたか……失敗してしまいましたねえ」

実はエムリスは余り一人で外出した事がない。大抵は《KORT》の面々とだったり、あるいは《KORT》の本部で自室にこもって実験するしかしてこなかった。ついでに彼は地図が読めない。

早々に帰りたいところだが、そもそも玄関ドアまで辿り着けない。もはやどうやってデパートまで辿り着けたのか聞きたいくらいの方角音痴っぷりであった。

「……あのー」

「はい？・なんででしょうか」

背後からの声に途方に暮れていたエムリスが振り向くと、そこには黒髪の少年が立っていた。

「何か迷っているようでしたら、僕が道案内しますよ？」

「ああ!!？・それは有難い。いやお恥ずかしい話、余りこういう所には慣れていないもので。実は私、猪国谷書店に向かいたいのですが」

「あ、それだったらそこを右手に曲がって、少し進んでから今度は左手に曲がると見えますよ」

親切な少年に対してエムリスは彼に向かって拝みたい気持ちになったが、それを我慢して、代わりに感謝の意を述べる。

「いやあ、ありがとうございます。このお礼は必ず返しますよ」

「いやいや、そこまでして頂かなくても。人として当然のことですし」  
「では、せめてお名前を教えて頂けますか」

「それならいいですよ。僕の名前は一輝です。黒鉄 一輝」

それを聞いて彼ははっとしたと同時に、『これがかの少年か』という  
思いで一輝の顔を見つめた。思っていたよりもかなりイメージが  
違っていたからだ。

一応、情報や試合のデータは見ていたが、その時感じた印象は研ぎ  
澄まされた刃のようであった。だが今は試合中ではないにせよ、別人  
かと思われるようなかなり柔和な趣きを彼から感じる。

(うーん、やはりデータだけではなく実地で見た方がいいですね。  
データでは分からないことが多すぎる)

「あの一、何かありましたか?」

「……あ、いえ。一輝君でしたか。本当にありがとう。いずれ必ずお  
礼をさせて頂きますよ」

それでは、と丁寧な所作でお辞儀をしてから立ち去っていくエムリ  
ス。一輝はその後ろ姿を見送ってから、ポツリと一言呟いた。

「……なんだろう。あの人、誰かに似ているような気がするなあ……」

@

『親父。そいつやろうと思えばブツ殺せたんじゃないか? アンタの  
能力なら楽にやれるはずだろうが』

「無茶言わないで下さいよ。攻撃する前にこっちの首が飛びますつて  
ば」

目当ての本を買って帰る途中、《KORT》のメンバーの一人であ  
るアグロヴァルと電話しながら一階のカフェでエムリスは一息つい  
ていた。

「大体私の能力はサポート向きですし、そもそも殺したくないんです。  
滅多にいない逸材ですよ? 彼は」

『逸材だかんだか知らねーが、そいつ目の前にして何もしねーとか、  
それマジで大ポカだぜ?』

「出来ませんって。なんせ周囲に目がついてるような気の張り方して  
るんですよ? 間合いに入った途端に背中が粟立ちましたからね?」

まさしく剣の鬼だ、とエムリスはコーヒーを飲みながら独白する。  
なにせ真つ正面から向かい合った途端、一輝から僅かに漏れ出る『剣気』に《魔人》デスブレイドであるはずのエムリスが思わず慄いてしまったのだ。到底とは言わないが、大怪我覚悟で行かなければ彼は捕らえることは出来ないだろう。

「そんなに言うなら、あなたがやってみてくださいよアグロヴァル。今何をしているかは知りませんが、ブルーノがあなたの力を借りたいと言っていましたよ？少しは力を貸しても良いんじゃないですか？」  
『……OK。親父、その話乗った。とりあえず全員で会議してくるよ』  
「……全員って、今何人いるんですかあなたは」

その問いに、くつくつと笑いながら電話口でアグロヴァルは低い声で返事を返す。

『さあ？何人いるんだろうね？親父なら、分かっていると思っただがね』

じゃあな、という声を残してブツつと通話が切れる。

息抜きのはずだったが凄く疲れた気がするのは何故だろうか。エムリスはため息を吐きながら勘定を済ませて店を出ると……。

「あ」

「あつ」

そこでカフェのメニューを見ながら悩む少年、黒鉄 一輝と再び邂逅した。

「おや、奇遇ですね。何かありましたか？」

「ああ、いえ。大したことはないんですよ。少し買い物し過ぎて、お金が足りなくなっちゃって……」

別の店にしようかな、と諦めの言葉を口にする一輝。その言葉にエムリスはびん、と閃いた。

「では、私が奢りましょうか？」

「え、良いんですか？」

「困った時はお互い様ですよ。先程助けられたお礼も返させて頂きたいですし」

一輝は元から推しには弱い性格であったので至極あっさりとお

リスの提案を受けてくれた。

「本当にありがとうございます」

「いえいえ、私はそこまで言われるようなことはしていません。……しかしどうにも、何かありましたか？浮かない顔をしていますか」

「えっ、あ……すいません、顔に出ちゃってましたか」

「気にすることはありませんよ。誰しも悩みの種の一つや二つあるものです。どうです、私が乗れる相談なら相手になりますよ？」

エムリスの言葉に恥ずかしそうに後頭部を搔いてから、一輝はぽつりぽつりと少しずつ悩み事の内容を話し始めた。

実は長年自分と実家とはとある理由で疎遠となっており、今回久しぶりに実家の父から連絡があったのだが、その内容が実家との縁を切るかどうかそちらで決めてほしいというものであること。

そして自分の中では答えが決まっていたはずだったのに、未だに答えが出せずにいるということだった。

「……いやはや、なかなか拗れた家庭状態ですね」

まあ、自分の所もそんな変わらないのだが、と心の中で自嘲するエムリス。

「……しかし、答えは案外簡単じゃないんですか？」

「え、そんな簡単なことなんですか？」

「ええ。スケールは少々違いますけど、要はそれって……『只の親子喧嘩』に過ぎないのでは？」

「え」

そう言いながらエムリスはぴんと人差し指を立てて一輝に「考えてみてくださいよ」と質問する。

「只の親子喧嘩で絶縁する親子ってあなたは見たことありますか？」

「い、いえ……騒ぐだけならよく聞きますけど、実際にそう言ったという話し合いは聞かないですね」

「実は私も子持ちなんですけど、喧嘩なんてよくよくありますよ。それだって、二人で向き合って話せばいつのまにか仲直りしてますし」

白雪が《K O R T》を抜ける、という時も同じように大喧嘩になったが、結局は話し合いで穏便に解決した。

「一番いいのは、とにかく父親と話し合いをしてみることです。ひよつとしたら殴り合いに発展するかもしれませんがね」

「そういう経験はあるんですか？殴り合いとか」

「いやあ、あるにはありますけど、殴り合いというより……私が一方的に殴られる形ですよ、はははは」

エムリスの父親としての威厳が形無しになっていそうな話に、一輝もつられて苦笑いしてしまう。

「あとは、何が何でも自分の意思は通しなさい。一度ぐらい父親にわがままを通させても、あなたは許されますよ」

だって、とエムリスは一輝に対して優しく語りかける。

「親にわがままを言うのは、子供が持つ最高の特権なのですからね」

「……ッ!!??」

と、ふと右手の腕時計に目をやってエムリスは少ししまったというような顔をして、一輝に別れを告げる。

「……おっと。そろそろ私も行かなくては。先に支払いは済ませておきますから、どうぞゆつくりと食べていて下さい」

「……あの、ありがとうございます。僕も悩み事を聞いてもらえてすっきりしました」

「いえ、私も色々話していて楽しかったですよ。それでは、またいずれ。Happyness is in your life」

その言葉を残して、爽やかな風の如くエムリスは静かに去っていった。再びエムリスの後ろ姿を見ていた一輝は、最初の時に覚えた既視感を、ここに至ってようやく理解した。

彼は……エムリス・アンブローズは、かの大英雄、黒鉄 龍馬に相通じる所があるのだと。

(成る程、道理で話していて親近感を覚えた訳か)

かつて一輝が小さい頃、実家から虐げられていた頃に龍馬と出会い、その時語ってくれた言葉は今も彼の『芯』となっている。

エムリスの語った言葉はそれに能うものではないにせよ……一輝の悩みを完全に取り払うものであった。

「……しまった、名前聞き忘れたな。もつと話し合いたかったんだけ



ど……仕方ないか」

またいつか、彼と会えることもあるだろう。その時はもつと色々なことを話し合いたいと思いつながら、一輝は一時の休息の時間に入ったのだった。

一方その頃、エムリスはというと。

「すいませんガウエイン。今すぐ迎えに来てくれますか？」

『ええ、ドクター。何かありましたか？』

「いや、それがその……タクシーで帰ろうと思ってたんですが、お金が足りなくなっちゃって……」

『……すぐに迎えに行きます。今どこですか？』

「……実は、何処なのかさっぱりで……」

大阪の街中で一人、途方に暮れていたのだった。

## 埜外の正体

アグロヴァルの襲撃から一夜明けた午後。

《七星剣武祭》もいよいよベスト4決定戦と大詰めの局面を迎え、熱狂の空気が高まりつつある大阪。

その熱狂の坩堝の中で、多々良 幽衣と白雪の姉妹は雑踏に紛れ込んでいた。

「——姉様、大丈夫？ぼーっとしてるけど。熱中症じゃないよね？聞こえてる？」

「……アア。ちつとばかり考えごととしてただけだってエの。あと白雪うるせエ、離れろ」

幽衣の視界いっぱい少女の顔が映る。元々しかめっ面の顔を更にしかめながら、幽衣は白雪の頭を掴んで横へと押しやった。

今二人がいるのは、《七星剣武祭》会場から程近い商店街の一角。多くの店が居並び、無数の人で賑わう喧騒の中である。

(全く、すっかり元気になりやがって)

小さく舌打ちしながら幽衣は長蛇の列からゆっくりと近付きつつある暖簾構えの店を眺める。

店の外観は見てくれこそボロ……いや古くはあるが、どこか威厳を感じられるものであり、時折『一番星』の文字が描かれた暖簾を分けて人が行き来をする度にソースの香ばしい匂いが漂ってくる。

「こんなトコに寄り道して本当に平気なのか？」

「木を隠すなら森の中、つてね。その為にメイクして、服装も変えたんだからさ」

今の二人の服装はいつもの防寒具を纏ったものではなく、一般人がよく着るようなカジュアルな衣装。それもこれも、全て《KORT》の暗殺者アグロヴァルの目を掻い潜るためのものである。

だが白雪が要らぬ力を入れた故か、あるいは二人の素質が元々高かった故か、二人の姿は控えめに見ても美しいものだった。

背後から降りかかってくる視線や密やかな声を感じとりながら、幽衣はやれやれとため息を吐いた。

「注目されてンじゃねエかよ、おい」

「姉様が美しすぎるからね、しょうがないよ。あー辛いなー。ボクだけが知ってた姉様の可愛さが皆に知られちゃって辛いなー」

いつもと何ら変わらない白雪の様子に思わず頭を抱えなくなる。あの時重傷の白雪を必死に看病していた自分が馬鹿に思えてくるぐらいだ。

まあ、あの時の幽衣には見捨てるという選択肢は端ハナから無かった訳だが。

そんな下らないことをしている間に二人は店の中に漸く入り、案内されたテーブル席に向かい合って座る。

「……しかし、やけにこの店だけ行列が出来てやがったな。席の案内に来たガキだって仕事のし過ぎか声が枯れて小さかったしよ」

「そりゃ、どの旅行雑誌にも絶対行くべきって書かれてるもの。行列が出来て当然だよ」

それに混雑してた方が相手も迂闊に動けないし、とメニューを開きながら白雪は付け加える。

その言葉に心の中で同意を返しながら幽衣は先日襲撃してきたアグロヴァルの姿を思い浮かべる。

今思い出しても、何ら特筆する所のない、平凡な青年であった。潜入してきた技量は確かではあるが、幽衣に易々と撤退を行わせた時点で到底暗殺のプロとは呼べたものではない。

そんな感想を抱きながら、店員の少女に白雪が注文を終えた所を見計らって幽衣は口を開く。

「白雪。テメエ、アグロヴァルって奴について何か知ってるか？」  
対する返答はたった一言、『何も』というものだった。

「アグロヴァル兄さん……姉さんなのかな。まあどちらでも良いけど……その正体は先生以外誰も知らないんだ。同じ《KORT》の人間ですらね」

「だが暗殺の依頼はこなしてンだろ？特徴の一つや二つバレたっておかしくはねエぞ」

「それが逆に特徴が多過ぎて特定出来ないんだよ。ある時は隻眼の大

男、またある時はあどけない少女。全ての特徴を纏めると無数の矛盾が生まれる。だから正体にたどり着けない」

白雪の説明を聞きながら幽衣はアグロヴァルの能力に思考を巡らせる。様々な推理が浮かんでは消えていき、やがて幽衣の考えに残ったのは――。

「……分かるかこんなもん!!? つかなんだよ、《認識阻害》かと思っただけど殺しのやり方も複数の異能でやってるしよ!!」

「本当にねえ。真夏に凍死とかだけならわかるけど、なら陸の上で溺死とかどうやったんだって話だし。こちらが立てばあちらが立たずって奴だよ」

全ての暗殺からアグロヴァルという個人を推定することは不可能であった。考えれば考えるほど二人の思考は袋小路に嵌まっていく。

そんな二人の空気を打ち破るように、どん、とお好み焼きの豚玉が二皿テーブルの上に並べられる。

「なんや二人とも頭抱えおつてからに。なんか悩み事でもあるんやったらワイにでも相談したらどうや?」

次いでかけられたどこか聞き覚えのある声に二人は顔を上げ、

「あつ」「げっ!!」

幽衣が嫌なものを見たそばかりに声を上げる。

声の主は180を超す身長に、バンダナの似合う偉丈夫。何よりも

二人はその獣染みた鋭い眼を知っていた。

「立食パーティー以来やな。元気にしとったか?」

黒鉄 一輝と死闘を繰り広げた前《七星剣王》……諸星もろぼし 雄大ゆうだいの姿がそこにあつた。

◎

「なるほどな。ワイが知らない間にそっちも色々あつたんやなあ」

かくかくしかじかと白雪達のかいつまんだ事情を聞きながら休憩に入った諸星が頭を掻きながら大きく笑う。

「とゆーか、ありすぎやお前ら!! 聞いているだけで腹一杯になるわ!!」

「おい、白雪イ……なんでここにアイツが居やがるんだよ」

隣に座られた幽衣は立食パーティーでの経験をまだ引きずっているのか、どこかしおれた様子で白雪に話しかける。

が、その問いに答えたのは諸星の方であった。

「だつてここ、ワイの実家やで」

「実ツ……!?待てよ、白雪まさかテメエ……知つててこの店選びやがったな!」

返答はない。ただ、いたずらがバレた子供のように微笑を浮かべる白雪の顔は雄弁に答えを語っていた。

「ブツ殺す。《地擦り蜈蚣》」

「待った待った!!しようがなかったんだよ、協力を仰げる人が絶対居るっていうのが分かつててなおかつ奇襲を防げそうなのがここだけだつたんだからさ!!」

チエーンソーを顕現しようとする姉を慌てて制止する白雪。

暫く白雪を睨み付けていた幽衣だったが、横に座っている諸星の視線に気付き渋々座り直す。

「んで、お前らが悩んだのがアグロヴァルだかいう特徴の掴めない暗殺者の話やつたっけか。複数人が『アグロヴァル』を名乗ってるっつーことはないんか?」

「それはねエ。暗殺つてのはごく少数でやる仕事だ。無闇に人数を多くすることはリスクにしかならねエよ」

一人数が増えても難航する推理。煮詰まりつつある思考の中、白雪の脳裏から古い記憶が呼び起こされる。

いつだったか、アグロヴァルについて正体を知るエムリスに直接聞いたことがあるのだが。

『彼の情報を選択してはいけません。全ての要素が、アグロヴァルという存在の正体を指し示しているのですよ』

そんな箸にも棒にも引つ掛からないような答えが返されて、分からず仕舞いのままに終わったのである。

(全ての要素が、正体を指し示している……か)

訳の分からない言葉——果たして本当にそうだったのだろうか

か？

白雪はまさかとは思いなながらも、アグロヴァルという存在が持つ全ての要素をエムリスの言葉に従って俯瞰する。

雑多にして矛盾だらけ。故にこそ真実がそこにある。

考え、推理し、そして……か細い推論の糸は繋がった。

「分かった……分かったけど、そういうことか……あり得ないでしょ……」

可能性の話とはいえ、白雪がたどり着いた結論は余りに理解し難いものだった。

怪訝そうな顔でこちらを見る幽衣と諸星に対して、白雪はゆっくりと口を開く。

「アグロヴァルの正体、掴めたかも」

「はア!? 矛盾だらけの存在だぞ!」

「ワイもない頭絞ったけど全然やわ。で、何や正体って」

その前に、と白雪は結論を急かす二人に一つだけ、とある《前提条件》について問いかける。

「二人共、《異能は一人につき一つ》しかないことは知ってるよね？」

「当たり前の話やな。《<sup>デバイス</sup>霊装の形も個人によって異なる》のと同じ、誰でも知ってる話や」

「そう。ボク達はその前提を元に正体を探って、混乱していた」

「じゃあ、もしその《前提》が成り立たなければどうなる? と白雪は話を切り出した。

「前提が成り立たねエって、つまりどういう訳だよ」

「余りに盲点で、希少すぎて分からなかったんだ。誰も正体にたどり着けない訳だよ、アグロヴァルが……多重人格の《<sup>ブレイザー</sup>伐刀者》だなんて」

その余りに意外な結論に、二人は思わず啞然とならざるを得なかった。

「んなアホなことがあるかい!? 誰にも正体が知られない暗殺者が多重人格なんて、誰が信じるんや!」

「じゃあキミは見たことあるの? 多重人格の《<sup>ブレイザー</sup>伐刀者》をさ」

その問いに、ぐつと諸星は答えに詰まる。幽衣も同じように、納得

出来ずにいるが黙ったままだ。

そもそも《ブレイザー伐刀者》自体希少な存在。そこから更に多重人格者を見つけるといふのは砂漠から一粒の胡麻を探し出すようなものである。「なら、複数の異能を扱えるのはどうなる？姿だって全て違うのをどう説明すんだよ!？」

「説明出来るよ。《ブレイザー伐刀者》は己の魂を固有靈装として顕現させるけど、もしその魂が複数あれば、それぞれ別の異能の靈装を複数顕現出来るはずだ」

そして、それは実質複数の異能を持っているということになる、と白雪は結論付けた。

「こうなると姿なんてただの《ガワ》でしかない。《認識阻害》で変えるとか……あとは《分身》の異能を使用した時にもよるね」

「あー……聞きたくはねエけど。どうなるんだ？」

げっそりしたような幽衣の言葉に対し、想像もしたくないけど、と前置きをしてから白雪は再び語り始める。

「別の人格が《分身》として出てきたらもう手に負えない。人格の自己認識によって姿が変わるかもしれないし、分身は分身で本体とは別の異能を持つてるからそこから更に《分身》するかもしれないし」

「あかんやんけそれ!!とゆーか考えれば考えるほど隙がないやんけ!!」

諸星の言う通りである。複数の異能を持つ《ブレイザー伐刀者》などという時点で相当厄介な存在であるのに、もし白雪が語る通りになれば最早それは個人が持つていて良い武力ではない。

「……まあ、あくまでも推論だから。ひよつとしたら別のアプローチで情報を攪乱してるかもだし」

「いや、今のところテメエの推論が一番信憑性が高エ。アタイとしてはその想定でいった方がまだマシだ」

「そうなるか気イ付けんとかあかんのが奇襲やないか？気付いたら周り分身で囲まれてましたじゃどうしようもあらへんぞ」

馬鹿にしてもらいたくはないね、と白雪は幽衣の方を見ながら目を細めて笑いかける。

「ボク達は暗殺者だよ？そういう殺意の機微は感じ取れるし、《歪曲》<sup>ホク</sup>と《反射》<sup>姉</sup>の能力が揃えば滅多なことじゃやられはしないよ」

笑顔を向けられた幽衣はじろりと鋭い視線を返すが何も言わずに暫し見詰め合った後、諦めたように——あるいは照れたようにそっぽを向いた。

「とにかくさ。こつちの問題はこつちで解決するけど、寧音先生の話みたいなことがあるかもしれないから気を付けてよ」

「お前に心配されるほどワイは弱かないわ、アホたれ。そもそも頼まれんでもそんな事やらかす奴はこつちからシバきに行くに決まってるやろ。ここにやワイの大事なものが一杯あるんでな」

牙剥くような、それでいて快活な笑みを浮かべて胸を張る諸星の姿に白雪はどこか安心感を覚えた。

威圧感を感じる雰囲気を纏った男だと思っていたが、間近で話すと威圧感のみではなく包容力と器の広さを感じさせられる。

正しく、傑物と呼ぶべき男であろう。

（《七星剣武祭》でこいつとかち合わなくて良かった。ひよつとしたら負けてたかもしれない）

仮にもステラ・ヴァーミリオンに深手を負わせた白雪にそう思わせる程に、諸星という男は強かった。

そんな男を敵に回すようなことにならずに済んでよかったと、心中で安堵の息を吐きながら白雪は席を立つ。

「そろそろ行かなきゃね。ご馳走さま」

「おう、またな。いつでも来てええで」

死んでなかったらね、と軽口で返しながら幽衣を伴って白雪が会計に向かう途中で、それまで辺り一帯に満ちていた喧騒を追い出すように困惑のどよめきが湧き出した。

「……うるっせエな。黙ってメシを食えねエのかよ、ここの連中は」

元々人が集まるような場所や喧騒を嫌っている幽衣の顔に青筋が走る。しかしどよめきの原因であるテレビの画面を見て、白雪は真剣な面持ちで黙っていた。

『試合中の事故か？ 試合後に黒鉄 一輝選手、心肺停止に』



速報として画面の上部に表示された突然の凶報。

このニュースこそが、後に《大阪七星動乱》と呼ばれる事件の発端になることを、まだ誰も知ることはなかった。

## 七星を穢す者達

「全く厭いやになる。後1日程度は猶予があるとは思っていたが、《凶運バッドラック》のせいでも前倒しにさせられるとはな」

ため息を吐き、ビルの屋上からごった返す人々の群れを睥睨へいげいするのはガスマスクで顔を覆われた青年……ガウエインである。

マスクの奥から人々を眺めるその視線は到底同じ人間を見詰めるものではなく、まるで虫を見下すような嫌悪の感情を纏まとっている。

「こうして見ていると理由わけもなく腹が立つてくるな。その呑気な横っ面を殴り付けて、頭を踏みにじりたくなる」

「だから鬱憤を晴らしに行くんだろおーがよ？ドクターからの任務も兼ねて、一挙両得一石二鳥つてなーア」

隣で茶々を入れてくるのは黒いタキシードに白い仮面を付けた奇怪な言動の男、ブルーノ。

元より二人はエムリスの命により《作戦》の第一段階、陽動を担当していたが、ここでとあるアクセントが生じた。

《七星剣武祭》の準決勝にて、エムリスの興味の的であった黒鉄一輝が人事不省の重体に陥ったのだ。

それも助かったとしても数日は目を覚ますことのない程の重体にある。

これによって《七星剣武祭》の終結を待つ必要がなくなると判断したエムリスは急遽《作戦》の実行を前倒しにしたのであった。

「ドクターもさー、よくも実行に踏み切ったよなあ。奴黒鉄一輝さんが死んじまう可能性だつてなきしにもあらずだつてーのにさア」

「ドクターの言葉に従えば何の間違いもない。我々はそれに肅々と従うまでだ」

その言葉と共にガウエインは己の《霊装デバイス》、《玉虫籠手》を顕現すると同時に辺り一帯に翠色の魔力を拡散させる。

魔力は色彩を薄くしながら重力に従って下界の人々の頭上から降り注ぎ――。

「《絶対命令》……『暴れろ』」



「5ヶ所で大規模な暴動さね。多分まだ起きるよこりや」

その内容はまだ想定の範囲内でこそあったものの、懸念が現実のものとなってしまった事実には黒乃は忌々しげな顔で舌打ちする。

「全く、しでかしてくれたものだな《KORT》め。何が目的か知らんが水を差す真似をするとは」

「しかもこれ、多分『陽動』の段階だつーのに大阪中の《魔導騎士》が駆り出される規模だぜくーちゃん。もつとやばい『本番』はこれからだ」

どちらにせよ、この騒ぎは早急に鎮めなければならぬ。

その思いを胸に秘め、二人が現場へ向かおうと動き出した瞬間――

総身を走る、おぞましい戦慄にその足を縫い止められた。

二人はこの感覚を知っている。戦慄の源を知っている。

遙か昔、まだ新米の《魔導騎士》であった頃。邂逅は僅か一度、されど鮮烈に鮮明に身体に刻み付けられたその男の名を。

「――おい、まじかよ」

がり、がり、と硬いコンクリートを削るのは牙のようにギザギザと不揃いの刃が並ぶ巨大な鉈。

恐らくは己の身長と同等の長さの《霊装》<sup>デバイス</sup>を引き摺りながら彼は亡霊の如く二人の前にゆらりと姿を現す。

胸の辺りまで届く黒い布袋で頭を覆い、下半身にはボロボロの袈裟を纏う筋肉質ながらも痩身の太男。

《KORT》のメンバー、《悪食》<sup>アメイゼン</sup>ランスロットである。

《KORT》でも指折りの化け物をここに……!?まさか、奴らの本命は会場この中か!!)

その尋常ならざるプレッシャーを前に黒乃は確信する。

《KORT》、いやエムリス・アンブローズの目的が会場の中――そこで治療を受けている、黒鉄 一輝であると。

一体彼のどこがエムリスの琴線に触れたのかは分からない。だが実際にランスロットがここへ来ている以上、黒乃達がすべきことは分かっていた。

「寧音、暴動の鎮圧は後だ。まずはこいつを止めるぞ」

「あいよ、くーちゃん。12年前のリベンジマッチとしやれこもうぜい!!」

黒乃は二挺拳銃、寧音は鉄扇の《靈装》デバイスを顕現し目の前に佇むランロットに対して臨戦態勢を取る。

ランロットもそれに応えるようにして引っ提げていた《靈装》デバイス、《アギト》を肩に担ぎ上げる。

3名全員がAランクの《伐刀者》ブレイザー、更に2名はその上位存在たる《魔人》デスベラード。

今ここに、《伐刀者》ブレイザーの頂点に棲む者達による死闘が幕を開こうとしていた。

◎

《伐刀者》ブレイザーの中には、《創造》の能力や《伐刀絶技》ノウブアルアーツを持つ者達が存在している。

例えば『影絵』として立体的な存在を生み出す有栖院ありすいん 凧なぎの《鳥獣戯画》シヤドウヒースト。あるいは、描いた絵をどんなものでも実体化させるサラ・ブラッドリリーの《幻想戯画》パンプル・カリカチュア。

こうした能力を持つ《伐刀者》ブレイザーは彼らの他にも——エムリス・アンブローズが該当する。

「さて、ランロット達が私の為に動いてくれたのです。私個人としても、ここは一つ働きを見せねばなりませんね」

廃ビル群が並び立つ、エムリスが一時の根城としていた場所。その中の一つのマンションの屋上にて、彼はとある《伐刀絶技》ノウブアルアーツを

発動しようとしていた。

「……《全知全能たる魔導書》」

エムリスが右手を開くとそこに収まるようにして表紙に魔方陣が描かれた、分厚く白い本が顕現する。

その重みを懐かしむように握りしめてから、彼はゆっくりと本を開いた。

「思えばこれを顕現したのはいつだったでしょうかね。久しく手に持ったことはありませんでしたが、相変わらずよく手に馴染みます」  
そして、エムリスの全身から魔力の塊が迸ると真っ白な本のページに吸い込まれるようにして集まっていく。

エムリス・アンブローズ。《K O R T》の首魁たる彼の異能は《空想の具現化》である。

彼が知り、その在り方を想像し得るものであるなら、どんな存在であれ現実の存在として召喚することが出来る。

例えそれが、空想や神話にしか存在しない怪物であつたとしても――

「アドベント・ファンタジア神話再臨………アジ・ダハーカ《暴悪蛇龍》ツ!!」

極限まで魔力が高まり、光に包まれたアルザイス・グリモワール《全知全能たる魔導書》が無  
理やり閉じられる。

魔本に集約した魔力の塊はページから弾かれるようにして中空に飛んでゆき……3つの頭と巨大な翼を持つ、ドラゴンの姿に生まれ変わる。

爬虫類のようでありながら凶悪な顔つきに二本の角。全身に纏う黒く脂ぎった鱗。大きさはそこらの民家の5倍近い巨体である。

端はたから見ればまるで生きているようだが、このドラゴンに自分の意思というものは存在しない。

エムリスの『想像』というプログラムに沿って行動する、ロボットに似た存在でしかないのだ。

「さて、これ程なら大丈夫ですかね。適度に空でも飛び回らせれば《魔導騎士》達の目を引くでしょうし」

そう呟きながらエムリスが軽く手を振ると、アジ・ダハーカ《暴悪蛇龍》はそれに応えるように大きくその翼をはためかせる。

たった一度の羽ばたきで、怪物は天高く舞い上がり、何処かへと飛び去っていく。

それを見送るように眺めながら、エムリスはランスロット達とは別の任務を与えたアグロヴァル、そして白雪達に思いを馳せていた。

『己の裁量で白雪と幽衣君の力量を見極める』……彼は任務には忠実

な男、手を抜くことはしないでしよう。身勝手な行動とは分かっています。……彼女達には、彼を乗り越えて貰わなくてはならない」

いずれ近い未来に来る、《戦乱》を生き残るためにも。

そして、白雪達の未来の為にも。

決意を胸に秘め、エムリスは強烈な風によつて巻き起こされた砂塵に紛れるようにしてその場を立ち去るのであった。

## 動乱、そして対峙

突如として混乱と災禍に包まれた大阪。多くの人々が事態を理解出来ぬままに右往左往する中で、状況を理解し、行動を起こす者達もいた。

建物の屋上から屋上へと飛び移りながら《七星剣武祭》会場へと疾駆する二つの影——幽衣と白雪の多々良姉妹もその該当者である。

「あーあー派手にやってくれちゃって。はしやぎ過ぎだよ皆」

「はしやぐなんてレベルじゃねえだろ。こいつはバカ騒ぎだ、それもド級のな」

地上の騒ぎを横目に見送りながら、幽衣は気にくわないといった様子で悪態を吐き捨てる。

元々暗部の世界で産まれ、育ってきた二人にとってこんな光景は見慣れたものではあるが……それでも、負の感情は抱くものである。

「なあ、おい。《KORT》ってのはここまでバカやる奴らか？」

「必要ならなんでもやるからね……だけど正直、ボク多々良白雪という存在を炙り出すだけにここまでやるとは思わなかった」

「他にも目的はあるんじゃないかねえのか？ テメエ一人にこの騒ぎはどう考えても釣り合わねえよ」

「多分、そうなんだろうけど。どちらにせよボク達は寧音先生の元に転がり込むだけでしょ？」

そんな白雪の間延びした言葉を、幽衣は「馬鹿か」という辛辣な返答で即刻切り捨てた。

「別にバカ騒ぎしてるだけならどうでも良いが……あいつらは《解放軍》も《暁学園》も、そしてアタイ達《黒い家》アップグルントも裏切りやがった。これはプライドの問題だ。裏切り者には相応のケジメを付けなきゃならねえ」

自分達は金で他人の命を勝手に売り買いし、恨みを抱かれ、道端で野良犬のように死んでいく存在である。

だがそんな存在にだって、最低限のルールは存在するのだ。



そのルールを破った《K O R T》の面々に怒りを燃やす幽衣の姿に、白雪は微笑みながら口を開く。

「それでこそ姉様だよ……だから」

姉様は、先に行つて。

白雪の言葉の真意を聞かずとも、幽衣は分かっていた。

その場に立ち止まった白雪を尻目に、会場へ向かうスピードを上げて走り去る。

「死ぬなよ、白雪」

「姉様も」

去り際に交わした言葉は僅かに一言。されどその一言に多くの願いを託し、二人は別れた。

後に残された白雪はため息を吐き、姉の無事を祈りながら姿を現した『追跡者』と相対する。

「……何故、二人に別れた。共にいれば勝てずとも負ける可能性もなかっただろうに」

その場に降り立ったのは、数人の男女。

彼らに共通する特徴は何もない。背丈も性別も髪型も、何もかもがそれぞれ異なっている。

だが白雪は、『彼ら』の名を知っていた。

「いい加減、尾けられるのもうんざりしてきたからね。ここらで終わりにしよう……アグロヴァル達」

「へえ。まさかまさか、ロクな情報もなく僕らの正体を言い当てられるとは」

集団の中でも若齢の少年が驚いたと言わんばかりの様子で顎を撫でて呟く。

他の面々も表情にこそ出さないものの、白雪の発言に感心したような様子で白雪を眺めている。

「ほぼ推察ではあったけれども……反応を見て確信出来たよ」

「別に隠していた訳ではないわ。貴女のように推測でアグロヴァルという存在が多重人格の特殊な伐刀者<sup>ブレイザー</sup>であるというたどり着いた者はいくらだっている。まあ、知った者は一人として例外なく――」

銃声。

刹那の殺意を感じ取り、南蛮刀の《デバイス霊装》で辛うじて弾丸を叩き落とした中年の男を除く全員が、急所を撃ち抜かれ崩れ落ちた。

撃つたのは——当然、白雪である。

片手にはいつの間に顕現したのか、狙撃銃の《デバイス霊装》《銀雪》が携えられている。

速撃ちという狙撃銃には難しい芸当。それを安々とやってのけた白雪の技量に男は戦慄を覚えながら刀を構える。

「……どうでも良いよ、貴方達が何者だろうと。姉様がケジメを付けに行くのを邪魔させる訳にはいかない」

「ケジメだど？《K O R T》にたった一人で勝てると思っっているのか、笑わせるなよ」

「笑わせる、ねえ。ならもう一つ面白いこと言っただけよ」

白雪は《銀雪》を肩に担ぎ、口の端に薄く笑みを浮かべ、挑発的な視線で男を見やる。

「——勝つよ。姉様も、ボクも。お前ら風情に負けてやるもんか」  
「……言ってくれ……!!」

男の怒気をはらんだ声と共に新たな分身達が白雪を取り囲むように現れる。

その全てがアグロヴァルの人格の中の一人であることは彼女には分かりきっていた。

——ただ、その数が余りに多すぎることを除いて、だが。

「人格の総数400と34。その全てが牙を剥く!!これこそ、我ら真髓の伐刀絶技、《ノウブアルアーツ悪霊大隊》!!貴様を《K O R T》に連れ戻す前に、一つ格の違いとやらを教えてやるとしようか!!」

周囲の分身達が、大小様々な形の《デバイス霊装》を顕現する。

剣、銃、弓、斧に鞭に大鎌。一つとして同じ形の《デバイス霊装》は見当たらない。恐らく能力も同上だろう。

知れば知る程に実力の彼我の差を思い知らされるが……白雪にはそんなことは負ける理由にはならない。

「吠えるな、数だけの雑魚が」

単純な数にして、434対1。

《KORT》の任務を背負う者と姉の思いを背負う者。

互いのエゴを潰すための戦いは、この瞬間幕を開けた。

◎

「ぎゃあああああつ!!」

大阪中を掻き乱す混乱。その多くは《KORT》のガウエインの能力によるものであるが……中には、別の要因によって引き起こされた混乱もある。

今、暴動を鎮圧に向かおうとしていた連盟の《魔導騎士》達の前に立ちはだかる真紅の鎧を纏う騎士も、その一つであった。

片手には鮮血に塗れた剣を引つ提げ、切り捨てた者を足蹴にしながら相手の方向へゆっくり向き直る。

「隊長!!この鎧、間違いありません!!あの悪名高い《狂笑》、ブルーノの霊装です!!」

「分かっている!!だがこいつは……!!」

隊長である中年の男は部下に《霊装》展開の合図を出しながらも、何故か攻撃しようとせずジリジリと後退していく。

その理由は至って明快。

「……た、隊……長……逃げ……助けて……」

——鎧の中にいるのが、先程まで行動を共にしていた部下であるからである。

鎧を纏った……否、捕らわれたのは彼のみではない。その背後からまるでゾンビのようにふらふらとした挙動で、鎧の姿をした人間が姿を現す。

ブルーノの糸に捕らわれた者は彼の伐刀絶技《不実の機織り》により編まれた鎧の中に閉じ込められているのだ。

そして中の者の意識はそのままに、ブルーノの遠隔操作により外部の鎧は勝手に外敵を駆逐し始める。

それが、例え中の者の知己同胞であろうとも。

人質を取ると同時に、手駒を増やすという合理的にして悪辣な戦法である。

「……外道め……!!」

どこかでこの状況を見ているであろう黒幕に悪態を吐き捨てる男。それと同時に操られた騎士が武器を振り上げて襲いかかり、《連盟》の騎士達は仲間との思わぬ死闘を強いられることになったのである。

「仕事は順調だな!!ヨシ!!」

一方、とあるデパートの屋上、遊戯施設のエリアでいくらかの人々を操っていたブルーノはその二つ名に相応しい狂気的な笑みを浮かべて悠々と状況の推移を見守っていた。

「さて今回もやってまいりましたお仕事タイム!!俺がやらにやならねえのは《魔導騎士》共の足止めって訳だ!!」

ブルーノ自身は、この任務はそこまで苦労するまでのものではないと思っていた。

そもそも一人で攪乱や作戦の立案、実行まで行わなければならない普段と比べればあまりに人員が豊富。更にエムリスやランスロットが参加しているのだからそう時間はかからないと踏んでいたのだ。

「手段は不問、任務は楽チン!!これさえあればいつでもワクワク絶好調さッ!!」

これ程楽な任務はあるまい。顔を覆う白い仮面の中で、たかを括っていたブルーノの両手から伸びる十本の赤い糸が一瞬の内に断られたのは、正にその時である。

「ッ!!」

首筋に走る冷ややかな感覚を振り払うようにその場から飛びずさるブルーノ。直後、彼の身体があった場所には一振りの槍が墓標の如く突き立っていた。

「……つち。そう簡単には終わらんか。ま、両手の悪さしとる糸は全部ぶった斬れたからそれでええか」

妨害する者が来ることは当然ブルーノは想定していた。その上で様々な罠を多重に張り巡らせていたのだが——相手が相手だと素直に感嘆し、引きつるような笑い声を上げる。

「いよーオ、どうしたんだい色男<sup>ロメオ</sup>。ジュリエットはここにはいねえぜ？」

「別に逢い引きに来た訳やないわ。ちつとばかし、バカ騒ぎしとる道化<sup>ピエロ</sup>をシバきにな」

長く黄色い槍の霊装<sup>デバイス</sup>《虎王》をひつ掴み、ブルーノの前に立ちはだかるのは、前《七星剣王》諸星 雄大。

ブルーノの想定では……二番目に最悪な相手であった。

「よくもまあワイの地元で好き勝手やってくれよったな。その仮面ひつpegがして道頓堀に沈めたるわ」

自分の故郷を、そして大切な者達を危機に陥れている元凶の一人を前に、青筋を立て隠しきれぬ殺気を放つ諸星。

対してブルーノの方は、この状況をなんとも思っていないように諸星の殺気を総身に浴びながら腕を組んでくつくつと身体を揺らして笑っている。

「止<sup>よ</sup>してくれよオ。道化<sup>ピエロ</sup>の仮面を取っちまったら……笑えなくなっちまうだろうが」

「既に笑えんようなことやつとるのはどこのどいつや、このボケ。とつとと地獄に落ちろや」

《虎王》の切っ先を向けたまま、ブルーノの一挙一動を見逃さぬといった様子でじつと構え続ける雄大。

これは雄大の戦い方は『待ち』に近いというものもあるが……なによりも、ブルーノの周りを護るように張り巡らされた紅い糸の霊装<sup>デバイス</sup>の存在があつたからである。

(目を凝らさんと見えない程巧妙に、しかも糸が何処かに繋がつとる。こりや切つたらどうなるか分からんで……)

下手に切つて建物ごと倒壊するようなことになれば大惨事である。その懸念が脳裏をよぎり、雄大の思考は一瞬だけ惑う。

その惑いを、ブルーノが見逃す訳がなかった。

組んでいた右手の人差し指を軽く上に動かし、プツリ、と彼の周りに張つてあつた糸の一本を切る。

ブルーノの先制に即座に応手を返せるよう身構える諸星。

その目前にごとごとごとつ、と黒い物体が転がり落ちた。

くすんだ緑色をした、見ようによってはマンゴーにもパイナップルにも見える十数個の金属の物体。

(グレネード手榴弾ツ!?まづつ、この数は流石に——!!)

当然全ての手榴弾のピンは抜かれており……直後、諸星の思考など知ったことかと言わんばかりに、諸星とブルーノのいるアトラクションエリアを爆煙で呑み込んだのであった。

## 凶手のプライド

「——さて。我々の目的の遂行を邪魔しないで頂けるかな、お姫様？」

「……ッ」

《七星剣武祭》会場から5kmと離れていないスクランブル通り。混乱により打ち捨てられた車両が無造作に点在するコンクリートで舗装された道路の上でステラ・ヴァーミリオンとガウエインの両者が対峙していた。

「この混乱の中、原因の元と我々の目的を特定してここまで走って来たのは流石と言うべきではあるが……しかし、こちらとしても障害になりうる者を放置する訳にはいかなくてね」

滔々と語りながら近くにあった軽自動車のボンネットに腰掛け、ステラに抜け目無く注意の視線を向けるガウエイン。

対するステラには若干の焦りこそ見られるものの、その表情にはガウエインに対しての恐怖や警戒は全くなかった。

「……ふむ。仮にも《KORT》のことを知っていながら、ここまで堂々とした振る舞いが出来るのは中々だな」

「当然よ。今のアタシの実力なら、アンタ位は倒せるわ」

成る程、と頷きながらガウエインは己の不遜な態度を変えることなく顎を撫でて暫し黙考する。

ステラの言ったことは……実際正しい。

ガウエインは能力と小手先の技術で奇襲をかけるのが得意で、格上を倒すことも場合によっては可能ではある。

故にこそ、そうした小手先が通用しないステラのような隔絶した『絶対強者』には手も足も出ないのだ。

彼女の意見に納得しながら、ガスマスクの下で笑みを浮かべてガウエインは言葉を紡ぐ。

「ご明察だ、お姫様。確かに、確かに私ではどうしたって勝てやしないが——まあ、それならそれでやりようはある」

「……何を思い付いたか知らないけど……そこから指一本でも動かし

てみなさい。命の保証はしないわよ」

ガウエインの言葉から害意を感じ取ったステラは片手に《レイヴァーテイン妃童の罪剣》を顕現し、ガウエインの動きを抑えにかかるが——絶望的な状況でも尚、ガウエインの態度は変わることはない。

「構わんよ。別に指一本動かさずとも私がすることは一つだ、お姫様……君がそこから一步でも動けば、私の能力の支配下に置かれている者を即座に自殺させる」

その言葉を聞いた瞬間、ステラの剣先が僅かに鈍ったのをガウエインは見逃さなかった。

「何を……!?!」

「私の能力は《支配》、私の魔力に晒された者を自由に操れるというものだ……ああ、私の能力発動前に殺すという手段はお薦めしない。戦いならともかく、君から逃げることもなら私でも容易いよ」

畳み掛ける。目の前にいる王女に与えるのは疑念と最悪の可能性だけで良いのだ。

ガウエインという人間がステラより勝るのは場数の差と交渉力、故に力による蹂躪をさせないようにその剣に重石を縛り付けにかかる。

「君には選択の自由がある。私と無辜の民の命と引き換えに黒鉄少年を助けるか、黒鉄少年の身柄を引き換えに罪のない無辜の民の命を救うか。私は君の選択を尊重しよう」

そして天秤を提示する。この世に一人しかいない恋人か、無数の市民達の命か。

彼女が愛を選ぶのか、ノブレス・オブリージユ高貴なる者の義務を選ぶのか。ガウエインとしてはそんなことは全くどうでもよい些事に過ぎない。

(若い彼女には重すぎるであろう二択、そう簡単には決められるものか。これで私は戦わずとも相手をここに留められると言うわけだ)

剣を向けながらも、決してこちらへと攻撃しようとせず究極の二択に煩悶するステラの姿を嘲笑いながら眺めるガウエイン。

「——さつきから邪魔だ、テメェら」

その光景に文字通り水を掛けたのは、刺々しい一声だった。

何者だ、と思う間もなくガウエインの全身に空から大量の液体がぶ







に睨み付ける。

「一介の凶手風情が……!!高々ガソリンでこの私を殺せると思うなア!!」

「文字通り『火に油を注いだ』ってかア、ギギギギ!!ちよつとした挨拶って所だ、笑って許せよ」

怒号に対して幽衣はへらへらと意地悪げな笑みを浮かべていたが、やがて真剣な面持ちになると低い声音でガウエインに告げる。

「だが……今のテメエらがやらかしてるのは笑って許せる範囲じゃすまねエぞ。たかだか一人の為に何百人塵殺おっせつする気だ？」

「……く、く。嗤わせる気か《不転凶手》。殺しが仕事の貴様が、殺すことに文句を言うとはな。滑稽極まりない話だ」

まるで役割が逆転したかの如く、ガウエインが身体を震わせて幽衣の言葉の揚げ足を取って嘲る。

多々良 幽衣という少女は生まれてからこの方、暗殺を仕事として生きてきた。

金を積まれて人を殺し、人を殺して己の命を繋ぐ。

人の生き死にを糧に生活が続けてきた、人間の中でも一等唾棄すべき存在。

だがそんな者にだって——プライドはあるのだ。

「仕事だからこそだ。殺しを生業にしてきたアタイは仕事に無関係の殺しなんぞしたことがねエ。そして、クライアントを手に掛けたことも、だ」

《K O R T》がそれを破ったことを、同じ闇に潜む住人として、そして暗殺者としてのプライドとして、彼女が許すはずもない。

「裏切りには相応の罰を、度を越した暴挙には制裁を。これからアタイはエムリス・アンブローズに落とし前を付けに行くが……ついでだ。テメエを潰してからにさせてもらうぜエ!!」

その言葉と共に片手に引っ提げていた霊装デバイス《地摺り蜈蚣》のスターターロープを思い切り引き、エンジンの咆哮を轟かせる。

鯨の牙にも似た刃が高速回転を始め、唸りを上げて空気を切り刻

む。

これに対してガウエインも己の霊装を顕現し、幽衣の行動に怒りの感情が籠った叫びを返す。

「痴れ者が!! 貴様程度の雑魚が、あの御方に害を為せるものか!! その思い上がり、この場で命を以て償えエエツ!!」

「うるせエんだよ、ムシケラがア!!」

両者が一步を踏み出したのは全く同時。

刹那、二人の身体は魔力を纏って弾丸の如く加速し————周  
りの車を吹き飛ばす衝撃と一帯を覆い尽くす土煙を伴って、激突した。

護る者、喰らう者

《狂笑》<sup>メフェイスト</sup>ブルーノ対《浪速の星》諸星 雄大。

《群雲》<sup>レキオン</sup>アグロヴァル対《白い死神》多々良 白雪。

《蟲使い》<sup>ベルゼブブ</sup>ガウエイン対《不転凶手》多々良 幽衣。

大阪各地で暗躍する《KORT》の面々のそれぞれが死闘に突入する中、最初に始まった闘いは未だ激戦の様相を呈していた。

現世界ランキング3位の《夜叉姫》西京 寧音と元KOK世界ランキング3位にして破軍学園の理事長である《世界時計》<sup>ワールドクロック</sup>新宮寺 黒乃。

この二人に相對するのは《KORT》メンバー、《悪食》<sup>アメイモン</sup>ランスロットだ。

恐らく今日本にいる《KORT》のメンバーの中では、この男が最強であろう。

そうでなければ彼は最も難しい『黒鉄 一輝の確保』の任務を任せ、今この場にいる訳がないのだから。

「《黒刀・八咫鳥》<sup>やたがらす</sup>」

「《クイツクドロウ》!!」

故にこそ、この男をどうにかすればこの騒動は早晚終結出来ると二人は看破し、協同してランスロットを一輝が眠る《七星剣武祭》会場から引き離しつつ、《伐刀絶技》<sup>ノウブルアーツ</sup>による重力の刃と無数の弾丸によつて潰しにかかる。

だがしかし——この猛撃に、ランスロットは全く動じない。

「……」

黒刀より先に殺到する弾丸を身体で受け切り、続けて迫る一对の超重力の刃を背丈程もある大鉈で易々と受け流す。

数百にも及ぶ弾丸を受けながらも一滴の血も流すことなく二人に肉薄するランスロットの姿に、思わず寧音は舌打ちする。

「ちつ、やっぱ<sup>デバイス</sup>霊装で直接ブツ叩かねーとダメか!!」

そのからくりを、二人は既に知っていた。

《悪食》<sup>アメイモン</sup>ランスロット。その異能の本質は、《喰らう》能力である。

《喰らう》と言ってもかの諸星雄大が使用する《暴喰》<sup>タイガーバイト</sup>のように魔力

を無効化するものではない。

文字通り——魔力を『喰らい』、己の糧とする能力である。

相手からの魔力を奪い、自らは回復する。

つまりは魔術や遠距離攻撃はランスロットの『餌』にしかならない訳である。

更に言えば、ランスロットの異能はこれに留まらない。

「……《ク、ロツク、アツ、プ》」

「ッ!!」

ランスロットが途切れ途切れに呟いた言葉は、黒乃が有する  
《ノウブルアーツ伐刀絶技》、《クロックアツプ十倍速》。

その技を……彼は模倣した。

先程とは比べ物にならない速度で突進し、巨大な鉈で二人の身体を  
両斬する軌道で鋭い横払いの斬撃を繰り出す。

この突然の強襲に、二人が冷静に逃げを打てたのは十年前にランス  
ロットと対峙した経験があったがこそだ。

《アーツ・プレデーション異能捕食》。喰らった相手の魔力を元に、相手の異能を使役するラ  
ンスロットの《ノウブルアーツ伐刀絶技》である。

彼の能力を突破し得るのは、彼が喰いきれない程の高密度の魔力で  
形作られた<sup>デバイス</sup>霊装による攻撃か、魔力を使用しない物理攻撃しかない。

「くーちゃん。悪いけど」

「……ああ。分かっているよ」

寧音の言葉を聞くまでもなく黒乃は理解していた。

黒乃の銃という<sup>デバイス</sup>霊装の形状とランスロットの能力は余りに相性が  
悪すぎる。

そもそもランスロットは<sup>ブレイザー</sup>伐刀者の中でも限られた上位存在、  
《デスベラード魔人》。彼に対抗出来るのは同じ《デスベラード魔人》の位階にいる寧音しかい  
ない。

とどのつまり……今この場において、黒乃は手を出さない方が良い  
ということだ。

少なくとも、手を出さなければランスロットの『喰らう』能力によ  
る自己回復は難しくなるだろう。

「……悔しいな。倒すべき敵が目の前にいるのに、手を出せないというのは」

その場を離れる間際、黒乃は忌々しげに呟く。

「分かるよくーちゃん。十年前、うちも同じ思いをしたからね。……だからこそ、ここは退きなよ。くーちゃんの分までうちがガツンとやってやるからさ」

寧音はいつものように童のようなあどけない笑みを一瞬だけ浮かべ、それから剣呑な雰囲気纏いながらランスロットの前に立ちはだかる。

その小さな背中を振り返り、黒乃はほんの少し立ち止まりかけたが……小さく口を結び再びその場から走り去った。

「……悔しい、か。その言葉、ここで聞きたくなかったねえ」

せめてKOKを辞めたあの雨の日、その一言を聞いていれば寧音の胸の痛みは多少は晴れていただろうか。

嫌な記憶を思いだし、腹の底から苛立ちがじわりと滲み出す。それを吐き出すように、寧音は嫌み混じりの言葉を放つ。

「テメエはそんな感情も知らねえよな。戦場で好き放題に暴れてるテメエには」

それは半ば八つ当たりに近い暴言であったが——ランスロットはたどたどしい言葉で返答を返した。

「わ、かる……わかる、とも。その、思いは」

寧々の抱える思いと感情への同意を。

予想外の返答に驚く寧音の前で、おもむろにランスロットが頭から被っていた黒い布袋を掴み乱暴に引き裂く。

その中から現れた顔は……目も鼻も肉もなく、骨そのものが頭あらわとなるまで削がれた、死神の如き凶相。

その姿は、常日頃から飄々とした態度をしていた寧音も思わずたじろいでしまう程に異常な風体であった。

「その顔は……」

「お、己おれの手、で削いだ。戒め、として、だ」

剥き出しとなった顔の骨を撫でながら、ランスロットは語り始め

る。

「負けながら。おめおめ、と、生き延びた、敗者、として……当然の罰だ。そして、己<sup>おれ</sup>の手で、奴に勝つことを、忘れぬ、ためでもある」  
次は殺す。その言葉を発したとき、とうに眼は失われ今ははっきりと闇がわだかまっているランスロットの二つの眼窩に、その時光が宿ったように見えた。

寧音にはその眼光の源が何であるか、まるで自らのことのようによく分かった。

敗北の悔しさ。そして負けた相手への底知れぬ執着。

かつて自分がとある女に抱いていたそれと、全く変わらないものだ。

「勝つて、みせる。あの時、己<sup>おれ</sup>を殺して、おけばと、いう後悔を、味わせてやる——《比翼》に!!」

「……な——るほどねえ。とんでもね——名前が出て来るもんだ。かの世界最強におめおめと見逃されたって訳かい」

あのさ、と寧音はランスロットの膨大な殺意を前にして、肩をすくめて問いかける。

「笑ってくれてもいいけど、テメエは……《比翼》に、エーデルワイスに憧れていたか?」

自らに消えぬ屈辱を与え、底知れぬ執着と殺意を注ぐ相手への、もう一つの思いがあるかどうかを。

これに対するランスロットの答えは——。

「……然<sup>しか</sup>り。己<sup>おれ</sup>、は憧れて、いた。彼女の、強さに、圧倒的な、力の、象徴に」

その声音には、殺意を抱いている相手のことを話しているとは思えない程に尊敬の念が満ち溢れている。

そして寧音には、これから彼が言う言葉が何であるかとうに分かっていた。

「彼女には、憧れている。その、力を羨ましく、思う。己<sup>おれ</sup>を、小石程度にしか、見ていなかったことに、殺意を覚える。あの、凜とした、表情に嫉妬すら感じる」











そして腕ごと伸ばしながら勢い良く放たれるのは、ドリルの如く螺旋を描く鋭い突き。

限界まで捻られた反動によって生まれる回転による破壊力は、単なる突きとは比べ物にはならないだろう。

「タイガーバイト暴喰ッ!!」

対抗するのは、一切の魔力を無力化せしめる諸星の伝家の宝刀のノウブルアーツ伐刀絶技。

不安定な空中、更に片手のみでの槍による防御ではあったが……それでも、空気を裂きながら突撃する赤い剣の鋒を消滅させることに成功する。

「甘いんだよオオオオツツ!!」

だが、回転によって無理矢理に槍のガードをこじ開けながら半ばから折れた剣は諸星の肩に突き刺さり、骨に達するまでその身を抉り出す。

「っ、ぐ、ああああああああああっ!!」

激痛に悶え、苦しみから悲鳴を上げる諸星の姿にブルーノはその瞳に狂喜の色を見せ、更に剣を深く突き立てようとする。

——それが、彼の失策であった。

「……甘いのは……そつちじゃ、ボケエツ!!」

叫ぶと共に、諸星はブルーノの顔面目掛けて全身全霊のパンチを放った。

ほんの少しばかりの魔力しか籠っていないテレフォンパンチ。ブルーノには蚊ほどのダメージもないだろう。

それでも、ブルーノは念のために数本の糸のデバイス霊装で以て拳を防御した。

防御した。——そのはずだったのだ。

「……あ、レ……!?!」

次の瞬間彼が知覚したのは、仮面を砕きながら、自らの頬に深々と食い込んだ諸星の拳。

何故、何故、何故。突然の事態にブルーノの思考は走馬灯の如く駆け巡るが……諸星はそんなことなど知ったことかとばかりに、ブルーノ

ノを地上へと叩き飛ばしたのだった。

◎

伐刀者の異能は、デバイス霊装に依らずとも発動出来る。

例えばステラ・ヴァーミリオンであれば大剣を出さずとも火炎を放てるし、ガウエインは魔力をばら蒔くことで多くの人間を《支配》の能力で縛りつけた。

諸星が利用したのは、これであった。

『タイガーバイト《暴喰》は、諸星のデバイス霊装のみにしか纏えない』というブルーノの思い違いを、諸星は起死回生の一手としたのである。

即ち、囷のタイガーバイト《暴喰》を突破し、油断したブルーノにタイガーバイト《暴喰》を纏った拳による本命の一撃を見舞う為に。

そしてこの策は成った。

魔力を無効化する拳に、防御もなく思い切り顔を砕かれたブルーノのダメージは重篤。

更にろくに受身もとれずに地面へと衝突したのだ。

(腕一本でその面に一発じゃ……少し割は合わへんがな)

瓦礫や家具の残骸が山積する1階エントランスに再び降り立った諸星は、数m先に仰向けで倒れ伏すブルーノに止めを刺すために黄色い槍のデバイス《虎王》を引っ提げて、ゆっくりと歩き出す。

「これで終しまいや。おどれのバカ騒ぎも、ここまでつちゅーこつちやな」「……ああ。これからはバカにもなれないな」

先程とはうって変わって冷静な声で、むくりとブルーノが上体を起こす。

仮面を砕かれて現れた、その顔は……まるでパッチワークのように、スタスタに縫われていた。

まるで複数の人の皮を貼り合わせたかのように、顔の各部で皮膚の色が異なっている様は、異常としか言い様がない。

「さつきも言っただろう？道化の仮面を取ったら……笑えなくなるよ。俺はこの通り、泣き虫だからね……」

そういうブルーノの目からは、絶えず涙が溢れ出ていた。

理由は明快——まぶた 瞼がないからだ。瞼がなく、閉じられないが故に痛みで涙を流し、その眼は血走っていた。

その痛ましい顔に、思わず顔をしかめる諸星。だがブルーノはそれを気にする素振りも見せず、淡々と話し続ける。

「しかしまあ——一本取られた、と言うべきか。霊装デバイスを囿こにするとはこちらも考えつかなかった」

「そりゃ、どうも」

ブルーノは座り込んだまま、立ち上がりもせず、構えさえも取る気がない。

余りに隙だらけ、チャンス、奇襲をかける好機。

だというのに、諸星は動けなかった。

(さつきとは、まるで雰囲気が変わりおった……!!なんやこの重圧は……!?)

「だが、浅いな。奥歯が砕ける程度じゃ俺はやられん。尤も……この皮膚に傷を付けたのは少々応えたがね」

そう言いながら、ブルーノは殴られた頬、その白磁のように白い肌の部分を愛おしげに撫でる。

まるで、恋人を慈しむかのように。

「もうこの世にいない、俺のせいで死んだ子供達。そして愛した人。俺以外に知る者のいない無垢な存在。……その残滓をお前は傷付けた」

ブルーノと諸星の間を、音もなく何かが一閃する。

直後、諸星の厚い胸板が横一線に斬られ、鮮血の華を咲かせた。

「っ、ぐっ!!」

「惜しいな。後一步、踏み出していれば臍臓まで断ち切れたものを。どちらにせよ、俺がすることは——お前を殺す。徹底的に、無惨に殺してくれる」

刹那、無音の三連撃が諸星に目掛けて襲い掛かる。

一度目で腿の肉を削がれ、二度目の頸動脈への一撃を辛うじて槍で防ぎ……三度目にして攻撃の軌道を見切り、その正体に気付く。

ブルーノの腕だ。極限まで脱力し、己の異能で以て柔軟な鞭のようになつたその先端を糸の靈装デハイスで覆われていた。

鞭という武器はその実、とても厄介な存在である。

自在にうねることで軌道を読めなくしたり、防御のしにくい位置に攻撃したり出来るというのもあるが——何よりも厄介なのは先端の『速さ』である。

その速度、およそ時速1200km。音速を越えた鞭の切れ味は非常に鋭く、アルミ缶すら簡単に切断可能な程だ。

それをブルーノは数倍重い己の腕で、更に諸星ですら最初見切れぬスピードで実現しているのだ。

「片腕だけでは殺すに至らず、か」

立ち上がりながら、ブルーノがもう片方の腕をだらりと脱力させる。

まずい、と諸星が躊躇なく後方へ身を投げ出した瞬間。

「《コンビ・スラップステイク》」

ブルーノの両腕が、周りを縦横無尽に切り刻んだ。

当たるを幸いに荒れ狂う鞭打の結界。それを維持したまま、目の前の諸星の下へとゆっくりと彼は歩き出す。

諸星はそれを目の前にして《虎王》を構え、うねりくねる波状攻撃を防ぎ続けるが、しかし……。

「……捉えたぞ、《浪速の星》。嵐の只中へようこそ」

《虎王》の長い柄に巻き付くようにしてブルーノの腕ががしりと掴み、諸星の身体を己の制空圏へと引きずり込む。

総身を切り刻まんと押し寄せる殺意を前にしながらブルーノに掴まれたままの槍を動かすことも叶わず、連撃が諸星をひたすらに打ちすすえる。

「ぐっ、が!!ぐあああ!!」

「貴様を殺し、俺は生きる!!彼女達を踏みにじった世界を嘲笑つてやる為に!!道化師の仮面を被つてな!!」

憤怒と怨嗟の込められた声が一撃の重みを更に加速させる。

諸星の両膝が地面に屈し、槍を握る力が段々と弱まり、意識が遠く



なっていく。

(……大切な者を失った絶望と怒り。形は違うにせよ、ワイもそれを知つとる)

数年前の事故。諸星は両足を失い、それを気に病んだ妹の小梅は声を失った。

今でこそ二人が失ったものは取り戻すことが出来たが、声を失った妹の姿がとても痛々しいものであったのは、諸星の記憶に鮮烈に焼き付いている。

諸星はブルーノの痛みと怒りを理解し、同情して。

「……この、大ボケがアアアアアッ!!」

故に、激怒の衝動に突き動かされるままに吼えた。

その魂からの叫びに、ブルーノの動きが一瞬硬直する。

それを見逃す程、諸星 雄大という男は甘くはなかった。

引つ張り合いとなっていた《虎王》を解除し、無理やりブルーノの体勢を崩し、再度《虎王》を顕現しながら傷付いた足で彼の懐へと疾走する。

「つ……《トリオ・ザ・スラップステイク》ッ!!」

それを防ごうとブルーノが繰り出すは、両腕のみならず片足まで動員した鞭の乱撃。その猛威は先の比ではなく、諸星の身体を切り刻む。

「……つ、何故だ、何故止まらない」

だが諸星は少しもその勢いを止めず、ブルーノへと突撃する。

肩を抉ろうと、傷口に痛撃を叩き込まれようとも、その血にまみれた足を止めることすら出来ない。

諸星の鬼気迫る雰囲気到现在まで感じたことのない恐れを抱き、ブルーノが目を見開いた瞬間……勝敗は決していた。

「……なんでや。なんで奪われた痛みが分かるのに……奪う側にお前は行ってしまったんや」

「痛みがなければ人は覚えない。それに……俺はこうしたやり方しか知らなかったからな」

己の身体を刺し貫く《虎王》を眺めながら、ブルーノは疲れた様子

で眩く。

その顔には狂気も怒りもなく、ただただ清々したといった様子が溢れていた。

「だから、こうなった。俺は復讐に足る結果を求め、遂に狂気にも正気にもなれなかった——哀れな道化師<sup>ビエロ</sup>さ」

お前はこうなるなよ、とブルーノは言い、崩れ落ちた。

その身体から槍を引き抜いた諸星の顔は……悪人を倒した者がしないであろう、憐憫の表情であった。

「ひよつとしたら、ワイはお前のようになっていたかもしれん。けどワイは出会いに恵まれた。だからこうして立っていられるんや」

家族、友人、そしてライバル達。彼らとの出会いと交流によって諸星は立ち直れた。

ブルーノにも、そうした出会いがあれば。

そんなifに思いを馳せながら、諸星はその場を後にしたのだった。